



第65回全道造形教育研究大会
函館・渡島大会

研究集録



夢・つくる・人

～未来はぐくむ造形教育～

2015.7.29 函館市立弥生小学校

主催：北海道造形教育連盟 函館市美術教育研究会 渡島美術教育研究会
主管：第65回全道造形教育研究大会函館・渡島大会実行委員会
後援：北海道教育委員会 函館市教育委員会 函館市幼稚園・こども園協会

第65回 全道造形教育研究大会 函館・渡島大会

研究主題

「夢・つくる・人 ～ 未来はぐくむ造形教育」



「夢・つくる・人～未来はぐくむ造形教育」ということで中央に3人の人を配置しました。

中央は、夢をもった子どもたち、両側は、それを支える函館・渡島の先生方と保護者の方々をイメージし、第65回の大会ということで“65”を背景としました。未来に向かって進んでいく造形を大切にして学んでいきたいと考えています。

◇大会シンボルマーク制作 北斗市立上磯中学校2年 田中 真希 さん

2015年、夢つくる北のクリエイターの「函館・渡島」の子どもたちとともに、造形教育を見つめていきたいと願っています。

目次

函館・渡島大会研究集録発刊によせて	1
大会日程	2
大会スナップ	3
研究概要	7
記念講演	13
分科会討議記録	
○ A-1 分科会	16
○ A-2 分科会	30
○ A-3 分科会	46
○ B-1 分科会	56
○ C-1 分科会	74
○ C-2 分科会	88
新聞記事	101
編集後記	102

第65回全道造形教育研究大会函館・渡島大会集録発刊によせて

第65回全道造形教育研究大会 函館・渡島大会

実行委員長 土谷 敬

函館・渡島大会集録を発刊するにあたり、一言あいさつを申し上げます。

第65回全道造形教育研究大会函館・渡島大会を、御来賓の渡島教育局長辻俊行様、函館市教育委員会教育長山本真也様はじめ、道外、全道各地から造形教育に情熱を傾けておられる先生方をお迎えし、盛会のうちに終了することが出来ましたことに心から感謝申し上げますとともに大会運営者としてたいへん嬉しく思います。

さて、本大会の開催に向け、北海道造形教育連盟の研究主題を受け「**夢・つくる・人～未来はぐくむ造形教育～**」のテーマの下、組織的、計画的に造形教育の在り方について究明すべく授業研究や実技研修、講演等をとおして研究・研鑽を深めてきました。

ちょうど現行の学習指導要領が全面実施されてからの折り返し地点として趣旨の理解を図る段階から、それらを踏まえた授業実践を一層深化させる時期に入っています。したがって、本大会においては、奇をてらった取組の公開ではなく、子どもの学びを基軸とした授業の在り方、つまりは確かな資質、能力を育成する視点を重視した指導の充実のため、改めて図画工作、美術科の改善の基本方針に立ち返った実践交流を重ねていくことをねらいとした研究大会にすることを目指しました。

そのため、「子どもの夢の多面的な発想・構想・創造を語る（素直な造形～子どもの気持ち）」、「授業づくりを研修・研鑽する（育む造形～学びの気持ち）」、「地域や人、他分野とのつながり（ひろがる造形～つながる気持ち）」の3つの実践ポイントを設定し、それぞれの授業づくりに努めてきました。また、全道の子どもたちの夢が書かれたリーフによる造形活動「北海道夢ツリープロジェクト」も地域、校種を越えたチーム北海道の共同の取組として造形教育を考える新たな視点になったのではないかと考えます。

さらに、環太平洋大学次世代教育学部教授 村上尚徳先生のご講演「感性や創造性をはぐくむ造形教育」も、先に述べた大会の趣旨に沿う、わかりやすいお話で改めて現行の学習指導要領の趣旨やそこで使われていることばの確認ができ、たくさんの語彙を持ってその後の分科会協議に臨むことが出来たのではないかと考えています。どの授業会場も分科会会場もあふれんばかりの先生方で講演講師、助言の皆様からも子どもたちが考える場面を位置づけたよい授業ばかりであったとお言葉を頂きました。

大会恒例の地区交流会もこれまでのうちで最高の出席を得て、各地区の実践交流、連盟餅つき、次期開催地への連盟旗の引き継ぎと和やかかつ愉快的な北海道ならではのひとときを過ごすことが出来ました。

本大会にご参集の皆様には、北の造形教育クリエイターとして共に未来を担う子どもたちを育てる視点で公開保育・授業、実践発表をもとに協議、交流を図り、実りある研究大会につくり上げてくださったことに心から感謝を申し上げます。

終わりになりますが、本大会の開催にあたり、ご後援頂きました北海道教育庁渡島教育局、函館市教育委員会、函館市幼稚園・子ども園協会をはじめ、ご講演、ご助言を賜りました皆様には感謝を申し上げますとともに、各般にわたりご支援、ご協力頂きました関係各位に心から御礼申し上げます。

大会日程



第65回全道造形教育研究大会 函館・渡島大会

■北海道造形教育連盟研究主題

“わたしを創る”～自立と共生の造形教育をめざして～

■大会テーマ・研究主題

「夢・つくる・人 ～未来はぐくむ造形教育～」

■日 程

7月29日（水）

	8:30	9:00	9:50	10:15	11:00	12:30	13:30	16:00	18:00
受付	公開授業Ⅰ (幼・中)		移動	開会式 全体会 概要説明	講演 村上尚徳氏 環太平洋大学 次世代教育学部教授	昼食	分科会 研究協議	移動	全道地区交流 ・閉会式 (五島軒本店)
	夢ツリープロジェクト 公開授業Ⅱ (小)								
	9:15		10:00						

■講 演 『感性や創造性をはぐくむ造形教育』

講 師 環太平洋大学次世代教育学部 教授
村上 尚徳 氏

■主 催 北海道造形教育連盟 函館市美術教育研究会 渡島美術教育研究会

■主 管 第65回全道造形教育研究大会函館・渡島大会実行委員会

■後 援 北海道教育委員会 函館市教育委員会
函館市幼稚園・こども園協会

■会 期 平成27年7月29日（水）

■会 場 函館市立弥生小学校
五島軒本店（全道地区交流・閉会式）

大会スナップ



大会スナップ



大会スナップ



大会スナップ



第65回全道造形教育研究大会函館・渡島大会の開催おめでとうございます。

私にとって函館の地で開催される全道造形教育研究大会には、特別な思いがあります。

一つ目は全く個人的なことではありますが、教員になって初めて参加した全道造形教育研究大会が、第42回全道造形教育研究大会函館大会でした。会場校がたくさん先生方であふれ返っている光景に、未だ北海道造形教育連盟の一員ではなかった私は、「こういう世界もあるんだ。」と大変驚いたことを覚えています。今の私があるのも、その経験が一つの原体験となっています。

二つ目は、第60回全道造形教育研究大会函館・渡島大会です。この大会には、当時の文部科学省教科調査官の奥村高明先生と村上尚徳先生が参加されました。一県大会に両氏が揃うことに、凄いことだと思いました。さらに、当時の全国造形教育連盟委員長の永関和雄先生と日本美術教育連盟理事長の岩崎由紀夫先生が参加されました。翌年に全国造形教育連盟と日本美術教育連盟の共同開催による、全国図画工作・美術教育研究大会北海道大会 in 札幌が開催されたことを考えると、日本の造形教育の歴史的に見ても大変意義のある大会となりました。

また、こんなことも思い出です。この第60回全道造形教育研究大会函館・渡島大会に向けて授業者と提言者が集められた会議に、北海道の研究主題の説明を依頼され参加した時のことです。会議の後、函館市美術教育研究会の新年会があり、それにも参加させていただきました。その会に参加して驚いたのは、OBの先生方の数の多さでした。会の中でOBの方が、「他のことは自分たちがやる。大会づくりに専念しなさい。」とエールを送っていたのが印象的でした。函館の造形教育は熱い思いをもったたくさんの人々に支えられ、脈々と受け継がれているのだと実感しました。

“わたし”を創る

～自立と共生の造形教育をめざして～

この北海道造形教育連盟研究主題で全道造形教育研究大会を開催するのも、今回で7回目になります。そして、次年度の札幌大会は、新しい研究主題の下開催される予定です。つまり、第65回全道造形教育研究大会函館・渡島大会は、現研究主題で開催される最後の大会となります。今大会の成果と課題が、現研究主題の総括となり、また、新しい研究主題設定の端緒ともなってきます。ぜひ、分科会研究協議の中では、授業や提言に対する良し悪しというレベルではなく、子どもの姿が語ってください。授業者のこの手立てが子どもの資質能力を発揮させていたとか、こういう手だてをとるとこういう資質能力が育つのではないかなど、授業改善の視点で協議が進むことを期待しています。これは、今大会の研究内容に設定されている

造形教育を見つめなおす5つの視座

の1つ目の中にある

北海道はひとつの地域、チームとして、造形教育をとらえよう

にもつながります。

今大会の会場にいる皆さんが、「北海道の造形教育力をあげるのだ」「北海道の先生方の授業力をあげるのだ」という視点をもって参加されるとき、第65回全道造形教育研究大会函館・渡島大会は、本当の意味で成功を収めることができるのだと思います。

北海道造形教育連盟の研究

"わたしを創る" ~自立と共生の造形教育をめざして~

“わたしを
創る”
とは？

造形活動を通して自分で意味を創り出したり美意識を広げたりすることが自分を豊かにし、新しい自分に気付くことにつながる＝**自己の更新**

⇒ 自己創造感

4 研究内容 1

めざす「自立した造形活動」とは

感性を働かせ自ら意味を創る

学びの中で感性を働かせながら生み出したものが自分にとっての意味であり、自分で意味を創り出す学びであると考えます。その自己実現に向かう意志を“わたし”にとらえ、“わたし”が生き生きと輝く学びを「自立した学び」と位置付けます。

子ども理解をより深める造形教育

一人一人の感じ方や表し方の背景を知ることが、より子ども理解を確かなものにするにつながります。造形活動を通して子どもは“わたし”を創り、造形活動を通して教師は子ども理解を深める。その関係が、造形教育における望ましい授業像と考えます。

5 研究内容 2

めざす「造形活動における共生の姿」とは

自己理解から他者理解へ

“わたし”は、「自立した学びの空間と時間を共有する仲間からの価値付けによる、あたたかい学びの中で創られていくと考えます。このあたたかい学びを、一人一人の「自立した学びが響き合う「共生」の学びと位置付けます。そして、学校のみではなく「地域・社会」が自立をうながしたり、“わたし”を価値付けたり、また、「地域・社会」に向かっても創造性を発揮し自己実現していくことができると考えるのです。

子どもの「あいだ」を見る

“わたし”と“わたし”のあいだで価値へと広がっていく共生の学びをよりよいものにしていくために、教師は子どもたちの「あいだ」を見取る目を養う必要があると考えます。

第65回全道造形教育研究大会 函館・渡島大会 研究概要

同大会実行委員会 研究部長 佐々木 善憲

I はじめに

昨今の世界は、人々をとりまく自然環境や、歴史的、民族的、地域的な社会情勢の変化、ITの進歩とともに、めまぐるしく情報が行き交うメディア社会へと変貌し、人々のコミュニケーション手段もSNSなどの形態へと移り変わるなど、その余波は確実に日本にも押し寄せている。

そんな中、全国の初等中等教育の現場では、近年のPISA調査や全国学力調査などの結果を受けて、「生きる力」の理念を継承し、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視し、それらを習得・活用・探究する授業づくりの充実による確かな学力の育成を目指して、様々な方策が実施されている。

その結果、一般的には、目に見える形での成果が求められ、テスト等の得点アップが学力向上の成果としてとらえられる状況があると言えよう。しかしながら、図画工作・美術教育における確かな学力とは、数値の向上のみを意味するものではないことは、周知のとおりである。

すなわち、「目に見える児童生徒の造形的な創造活動を通して、基礎的な能力を高めていくことだけでなく、目に見えない思いや心の動きなどに目を向けて、人間にとって大切な情操をはぐくんでいくこと」が、図画工作・美術における重要な確かな学力であるといえよう。

今大会では、未来に生きる子どもたちが、このような確かな学力を身につけ、人間性をはぐくんでいくために、これまでの「感性」や「知性」を有機的に関連づけた研究実践をふまえて、**研究主題「夢・つくる・人～未来はぐくむ造形教育～」**を設定した。

「夢」「つくる」「人」というキーワードを主軸として、子どもたちが自ら創造し、将来に向けて、自分や心をつくっていくことを実感できる図画工作・美術を実践していくことで、一人一人の人間性を磨き、生涯にわたって必要とされる豊かな情操を培っていきたいと考えた。子どもたちの生涯への架け橋となるような研究実践に取り組むとともに、全道各地からの素晴らしい実践を紹介できる研究大会にしたいと考えている。

II 研究主題「夢・つくる・人～未来はぐくむ造形教育～」について

1 造形教育を考える5つの視座

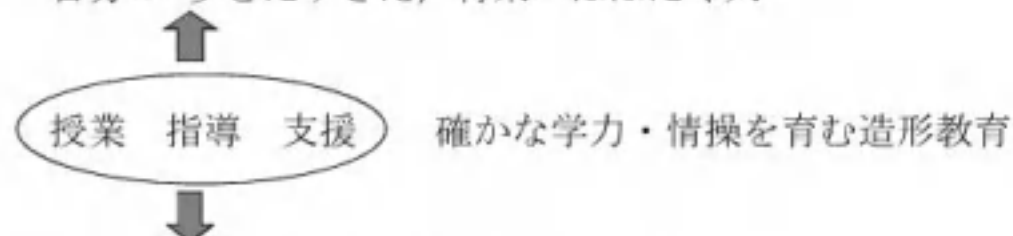
函館・渡島大会をむかえるにあたり、私たちは、造形教育を考える5つの視座を設定した。

(1) 「私たち、北海道のクリエイター」としての造形教育

- ・北海道をひとつの地域、チームとしての造形教育を考えよう。
- ・北海道的な特色ある造形活動（四季 地理 歴史など）の実践・交流を行おう。

(2) 夢つくる「北の2つのクリエイター」としての造形教育

「夢つくる人（子ども）」～ 自分の夢をたずさえ、将来へはばたく人



「夢つくる人（教師）」～ 子どもたちの夢を広げ、将来をはぐくむ人

(3) 「夢・思い」を「とらえる・みつめあう・つなぐ・つむぐ・育む・実現する…」造形教育

(4) 思考と活動の上に成り立つ造形教育

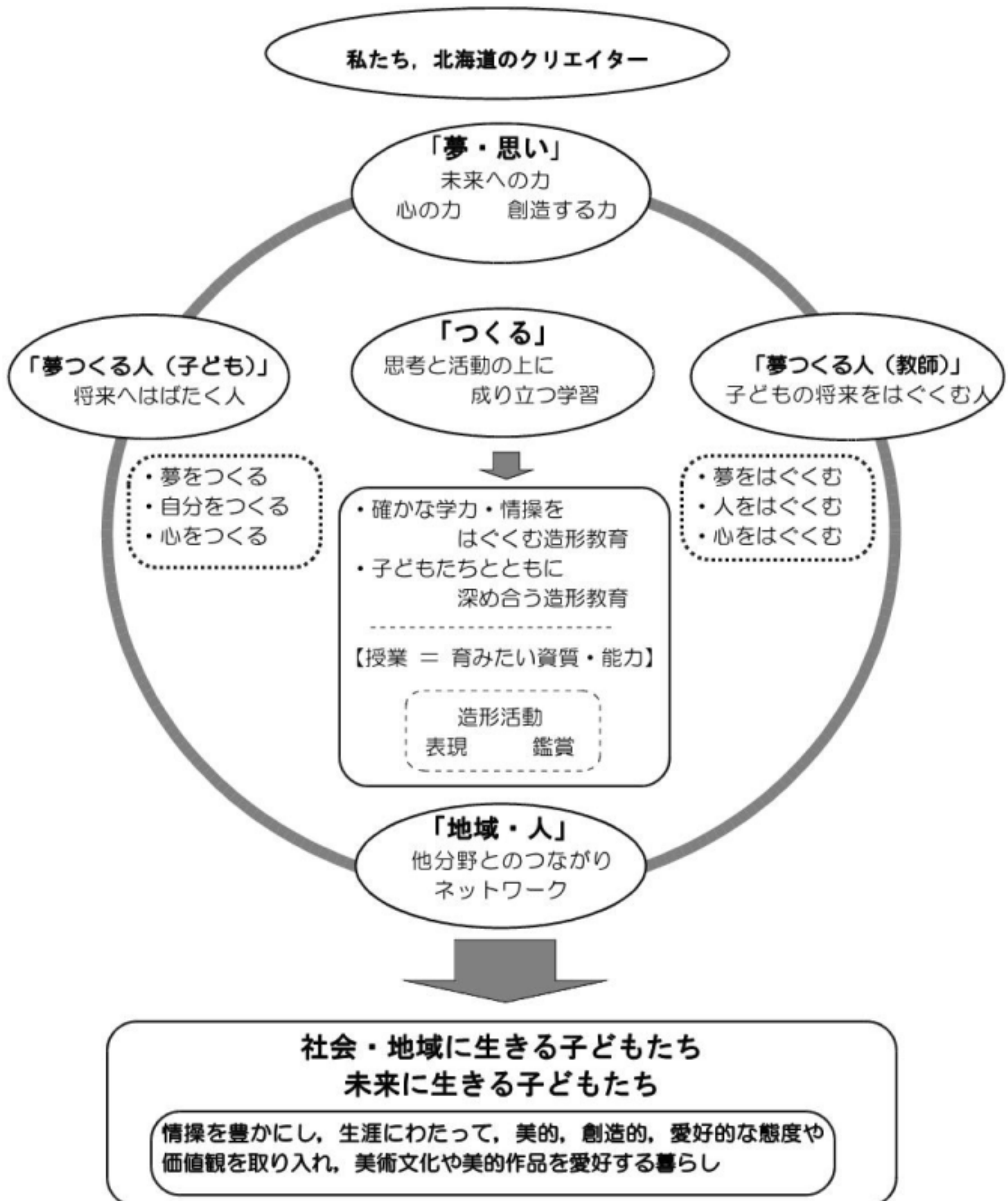
- ・想像する力 構想する力 創造する力 表現する力 鑑賞する力 感性・個性などをはぐくむ。

(5) 社会・地域に生きる、未来に生きる子どもたち、子どもたちとともに深め合う造形教育

2 大会テーマ・研究主題／構造図

北海道造形教育連盟研究主題 “わたしを創る” ～自立と共生の造形教育をめざして～

函館・渡島大会研究主題 **「夢・つくる・人 ～未来はくくむ造形教育～」**



Ⅲ 研究内容

1 研究実践の3つのポイント

3つのポイントを設定することにより、具体的な方策を確認し、研究実践に取り組んできた。今後も、以下の方策を継続して実践しながら、研究主題に迫っていこうと考えている。

素直な造形～子どもの気持ち	育む造形～学びの気持ち	ひろがる造形～つながる気持ち
<p>○子どもの夢の多面的な発想・構想・創造を語ろう</p> <p>・子どもの気持ち、夢にそった造形教育とは、どのようなものかを発想・構想・表現・鑑賞などから多面的に考える。</p>	<p>○授業づくりを研修・研鑽しよう</p> <p>・教師の学びと授業づくりを軸として、教科書題材や教材開発などの実践上の課題や工夫、造形指導や授業力の高め方などについて考える。</p>	<p>○地域や人、他分野とのつながりを考えよう</p> <p>・北海道のネットワーク、地域の人々や社会との出会い、他分野とのコラボレーションなど、ひろがり・つながりの造形を考える。</p>

2 実践のための方策

(1) 素直な造形～子どもの気持ち

●子どもの学び（思考と活動）は、子どもの「夢をつくる」「自分をつくる」「心をつくる」

◆方策 子どもの気持ちをイメージして、具体的なアプローチを工夫することで、子ども一人一人が学びを高め、素直な造形を導き出していく。

教師のアプローチ	子どもの学び
<p>①「夢・思い」ひろげる創造性豊かな題材設定</p> <p>②感性や知性を刺激する多様な材料準備</p> <p>③発想法や構想の立て方の工夫</p> <p>④子どもの思いと表現の一体化を目指した情意面と表現面への理解やアドバイス</p> <p>⑤造形や言語活動の共有による他者との交流</p> <p>⑥鑑賞方法や視点の工夫</p> <p style="text-align: right;">など</p>	<p>・創造の喜びと関心・意欲、想像力の高まり</p> <p>・豊かな発想と創造性あふれる造形活動</p> <p>・制作意図の明確化と表現の工夫</p> <p>・安心感、充実感、達成感の獲得、技能の習得や活用、創造的表現</p> <p>・自己理解と他者理解による造形の共有</p> <p>・鑑賞への関心・意欲、鑑賞力の高まり</p>

(2) 育む造形～学びの気持ち

●教師の学びは、子どもの「夢をはぐくむ」「人（人間性）をはぐくむ」「心をはぐくむ」
子どもの学びは、授業力にかかっている。

◆方策 具体的な研修・研鑽による教師の学びは、より一層子どもの思考と活動を導き、授業力を高めていく。基礎基本プラスアルファの実践の積み重ねを大切にしていく。

- ①サークル内外での研修・研鑽 → 指導力、技能の向上のための実技講習、研究会等への参加。
- ②教科書・指導書の熟読と理解、分析による学習会や模範作品の制作 → 初心の大切さ、基礎基本の学び
- ③教科書題材をもとにした題材づくり → プラスアルファの視点と工夫
- ④授業づくりの発想と構想の工夫 → 情操をはぐくむための意図的な感性・知性の出会いを（第60回函館大会「心うるおす造形活動」の3つのステップの活用）
- ⑤指導案と授業準備等の見直し → 時・場・機会の見直し（第60回函館大会の学習構築ポイントの活用）
- ⑥教材開発と実践交流 → 「こんな実践してみました」、共同実践や若い教師へのエール
子どもの思考と活動にそったワークシート作り など

(3) ひろがる造形～つながる気持ち

- 「夢や思い」から、ひろがる造形は、自分と他とつなぎ、創造性を生み、「未来への力」「心の力」「創造する力」となる

◆方 策 造形を通じて、子ども同士の創造性を高めるような題材等の実践を試みることで、感性・知性を刺激し、資質・能力を高めていく。

- ①北海道のネットワークを活用した出会い・つながり → アートプロジェクトの企画と推進
- ②地域人材や社会との出会い → 他分野、他校種とのコラボレーションの活用
地元企業との造形的な連携による授業構築
- ③美術館との連携 → 特別展と関連した授業等の実践、進行中
- ④他教科、学校行事等への応用 など

3 これまでの成果と今後の展望に向けて

5つの視座と3つの研究実践ポイントにより、「2つのクリエイター」である「子ども」や「教師」のそれぞれの立場や役割、目標などを明確にし、造形教育を考える具体的な実践・学習に結びつけることができた。

大会テーマである「夢」という無限に広がる可能性や理想を、「つくる」という造形教育の立場から考えていくことで、実現可能な現実や、資質・能力の育成や情操をはぐくむための授業のあり方を考えることができた。今後も継続して、造形教育を支える重要なキーワードとしてとらえていきたい。

また、函館、渡島という2つの地域間や全道における「人」の交流、実践交流による連携は、造形の「つながり」「ひろがり」をもたらし、その効果は大きい。今後益々の教師間のつながりや、学びの機会が増えていくことがのぞまれる。

さらに、これまで全道各地で開催されてきた大会は、各地域の造形教育の今を知るとともに、研鑽できるよい機会である。北海道という広範囲な地域では、多様な活動を目の当たりにできる反面、各地域での人材的・物理的な側面、その他様々な側面での縮小化等の課題が浮き彫りとなっている。

今後の全道大会のあり方を考えると、各地域から発信される大会の意義にも増して、年々苦勞の度合いが増えてくることは否めない。だからこそ、北海道造形教育連盟で始めた地域支援プロジェクトを含め、地域から全道に発信し、全道に広げていく展開も視野に入れた支援体制も大切であろう。

地域における造形教育の活性化を目指して、地域間で協力して取り組む授業やプロジェクトを模索していくことは、今後の全道大会でも、北海道を特色づける造形教育の1つとして新たな意義を持つことになるのではないだろうか。

忌憚のないご意見を、全道各地の皆さんと交流し合える大会にしていきたいと考えている。

道造形教育連盟が研究大会開催

自立と共生の教育目指す

渡島管内幼・小・中で6授業公開

【函館発】道造形教育連盟（三井哲会長）は七月二十九日、函館市立弥生小学校などを会場に「第六十五回全道造形教育研究大会」を開催した。写真。全道各地から約二百三十人が参加し、渡島管内の幼稚園、小・中学校で計六授業を公開した。

同連盟では、「わたしを創る」～自立と共生の造形教育をめざして」を研究主題に設定し、研究を進めている。大会テーマは「夢・つくる・人々未来はくむ造形教育」とし、幼稚園・小学校・中学校の公開授業、分科会や講演会を通じて、豊かな造形教育について指導の充実を図った。

公開授業のうち、体育館で実施された「北海道夢ツリープロジェクト」は、弥生小五・六年生三十四人と函館市内中学校の美術部員六人が授業に参加。大会実行委員会研究部が講師となつて授業を行った。

「北海道夢ツリープロジェクト」は、大会の活性化と全道ネットワークを促したアートプロジェクトで、初の試みとなっている。各地区の児童・生徒がフューチャーリーフという葉を作り、自分の夢や目標を書いていくもので、全道の幼・小・中学校から二千三百枚以上が集まった。

大会では、参加した小・中学生が協力して、ツリーの枝の部分をつなぎ、枝にフューチャーリーフを貼っていった。小学生は中学生の指示に従い、協力して作業し、九本の夢ツリーを完成させた。

作業を終えた小学生は、「みんながいろいろな夢を書いていて、頑張っていることが伝わってきたので、私も美容師になりたいという夢に向かって頑張りたい」と感想を。中学生は、「みんなの夢が実現できたらいいな」と思いながら作った」と話していた。

授業後、全体会を行い、はじめに三井会長があいさつ。「子どもたちが主体的・協働的に学ぶことができる質の高い教育をつくりたい」と抱負を述べた。

また、来賓として渡島教育局長の辻俊行局長、函館市教委の山本真也教育長が祝辞。辻局長は「美術科は心の教育にも大きく影響する教育活動。資質、能力を磨き、実り多い会となるようお願いする」と話し、山本教育長は「函館の教育水準を上げるとともに、大会で得たものを皆さんの地域にもち帰っていただければ」と期待した。

続いて、同連盟の湯浅大吾研究部長と佐々木善憲大会研究部長が研究概要を説明。「自立した造形活動」「造形活動における共生の姿」について研究してきたことなどを話した。

また、記念講演として環太平洋大学次世代教育学部の村上高徳教授が「感性や創造性をはぐくむ造形教育」と題して講話。引き続き、分科会や研究協議も行った。場所を五島軒本店に移して全道地区交流会を実施し、親睦を深めた。



北海道通信

昭和50年6月12日第3種郵便物認可
日刊 祝祭日、日曜日、土曜日 休刊 **日刊教育版**

平成27年 第10552号
8月11日(火曜日)

発行所 札幌市中央区北5条西6丁目

株式会社 北海道通信社

会(代) 222-3521 FAX 222-3532

発行人 松木慶喜

支社 東京6261-3822 旭川33267 函館57781

支局 網走25241 札幌27872 岩見沢25044

支局 室蘭251735 網走237119 小樽25515

支局 稚内257111 留萌227116 浦河22200

支局 根室248028 江差250057 倶知安25513

(購読料) 1ヵ月12,960円

編集後記

7月29日(水)函館市立弥生小学校を会場とした第65回全道造形教育研究大会函館・渡島大会では、大会・研究主題「夢・つくる・人～未来はぐくむ造形教育～」のもと、全道各地、東北方面から多くの皆様のご参加をいただきました。本大会の開催にあたり、ご協力を賜りました関係各位の皆様にご心よりお礼申し上げます。

さて、本大会では、幼・小・中の5つの授業と、北海道夢ツリープロジェクト(アートプロジェクト)の1つを公開し、6つの分科会において、参加者との実践交流、そして造形教育への考えや理解を深めることができたと考えています。分科会では、助言者の皆さんからのご助言、全道各地からの提言もいただき、今大会の研究主題を活性化する内容となりました。意義ある討議ができ、函館・渡島の先生方にとっても貴重な学習・研修・研鑽の場となりました。授業、提言、講演などを通じて、私たちが目指す大会へのステップを踏むことができたことをうれしく思います。

また、初めて取り組んだ全道規模での夢ツリープロジェクトの試みでは、37校の諸先生方、またこれに関わるフューチャーリーフに参加してくれた児童・生徒数も2300名を超えるものとなり、全道の皆さんの温かいご支援・ご協力を得ることができました。これは、今大会を含め、今後の大会に向けての大切なつながりであり、大きな力であると言えるのではないのでしょうか。

造形教育を通じた北海道のつながりとひろがり、北海道のクリエイターである子どもたちと先生方の今後の活躍と発展性を益々感じることができた大会でした。

最後になりましたが、私たちは、皆様からの多大なご支援、ご協力、ご示唆をいただき、大会を成功裡に終了できたことに感謝すると共に、ここで得られた成果と課題を生かし、今後も造形教育の発展のため、日々実践に取り組んでいきたいと考えております。

編集委員	土谷 敬 (函館市立湯川小学校 校長)
	木村 伸 仁 (函館市立楯法華小学校 教諭)
	佐々木 壮 一 (函館市立深堀中学校 教諭)
	佐々木 善 憲 (函館市立深堀小学校 教諭)
	水 島 賢 久 (函館市立磨光小学校 教諭)

第65全道造形教育研究大会函館・渡島大会 研究集録

発 行 者	大会実行委員長	土 谷 敬
編 集	大会研究集録編集委員会	
大会事務局	函館市立楯法華小学校内	木 村 伸 仁
	Tel 0138-86-2051 / Fax 0138-86-2053	
発 行 日	2015年12月	
印 刷 所	(有)三和印刷 〒040-0061	函館市海岸町8番11号
	Tel 0138-45-0845	

記念講演

◇講師
村上尚徳氏



◇演題

『感性や創造性を
はぐくむ造形教育』

造形、図画工作、美術教育では、感性や創造性をはぐくむことが重視されています。しかし、単に描いたりつくったり、鑑賞したりするだけで感性や創造性が豊かに育つでしょうか。感性や創造性をはぐくむためには、発達の段階に応じて体全体の感覚を働かせたり、視点をもって対象を捉え感じ取ったり考えたりすることが必要です。そのためには、造形体験をする中で言語によって気付いたり、互いの考えを交流したりすることも重要です。感性、創造性、言語活動、〔共通事項〕をキーワードに、子どもたちの未来をはぐくむ造形教育について考えてみましょう。

プロフィール

村上尚徳 (むらかみ ひさのり)

昭和37年5月生

岡山市公立中学校美術科教諭，岡山県教育庁指導課指導主事，文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官（中学校美術，高等学校美術・工芸担当）を経て，平成23年度より環太平洋大学次世代教育学部教授。平成10年小学校学習指導要領図画工作作成協力者，平成20年中学校学習指導要領美術及び高等学校学習指導要領芸術（美術，工芸）文科省作成担当者

分科会 討議記録

分科会構成

A	B	C
素直な造形 ～子どもの気持ち～ 分科会	育む造形 ～学びの気持ち～ 分科会	ひろがる造形 ～つながる気持ち～ 分科会
子どもの夢の多面的な 発想・構想・創造を語ろう	授業づくりを 研修・研鑽しよう	地域や人，他分野との つながりを考えよう



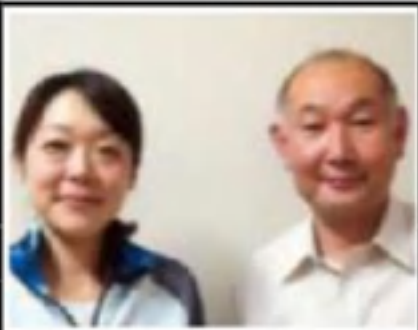
A-1 分科会

公開授業	
題材名	「カラフルねんどで」(立体に表す)【小1】
授業者	石岡 寿子／船橋 恭二
学校名	七飯町立七重小学校

提言 1	
テーマ	小規模校での陶芸粘土を使った作品づくり【全学年】
提言者	前小屋 学
学校名	函館市立本通小学校

提言 2	
テーマ	夢をかたちにできる「美術」の魅力【中2】
提言者	中村 悠子
学校名	新篠津村立新篠津中学校

【 小学校授業 分科会：A-1 素直な造形 ～ 子どもの気持ち 】

	「カラフルねんどで」 七飯町立七重小学校 1年3組 30名 / 指導者 石岡寿子 船橋恭二	
	夢	つくる
◎	○	人

1 題材について

1年生の子どもにとっての夢、それは直感として抱き、想像の世界の中でその子なりのストーリーを展開させることだと思います。

紙粘土は、可塑性に富んだ心地よい感触が特徴で、子どもたちにとって魅力的な素材です。そこで、色付き（3原色）の紙粘土を取り上げることで、色の組み合わせや混色の面白さから表現への思いを生み出し、素直な思いをひろげながら表現活動に取り組んでいくと考えました。

題材との出会いでは、絵本の読み聞かせをします。物語の世界をイメージさせることで、個々の子どもの抱くイメージの共有の観点が生まれ、それらの観点が友だちの表現活動と係わることでお互いの発想や表現のよさに気づき、鑑賞の楽しさを味わえると考えました。

表現活動の場面では、粘土に指や手のひら全体で触れさせて粘土の感触を味わわせ、手の巧緻性を高めていきます。また、子どもの発想や構想のよさを「見いだす」「伝える」「つなげる」に努め、創造的な造形活動の楽しさを広げていきたいと考えています。

2 児童の実態

本学級の子どもたちは、明るく朗らかで個性豊かな雰囲気を持っている。反面、まだ幼児期の自己中心性が残り、集団での活動や学習への参加が難しい児童が数名みられる。図画工作の学習では、ものづくりを好む児童が多く、夢中になって活動にのめり込む姿が多く見られる。

4月に行った「好きなもの なあに」という題材では、自分の好きなものを思い思いに絵に描きました。導入時に、好きなものがなかなか決まらなかったり、どのように描けばいいのか迷ってしまったりして、自発的に絵が描けなかった児童が数名みられました。そのため、1学期の間には、子どもたちに、失敗や間違いを恐れずに「自分で決める。」「自分で行う。」ことの大切さを働きかけながら自発的な言動が見られた時には、認め励ましてきました。

粘土の学習では、子どもたちは、油粘土に親しんできました。指先や手の平を使って、粘土を伸ばしたり、丸めたりしながら、思い思いの作品をつくりました。国語や算数の学習への集中力が続かないことが気がかりであった児童が目を見守りながら真剣な表情で粘土に熱中する姿が印象的でした。私が「粘土を頑張っていたね。」と声をかけると、「だって、つくりたい、つくりたいって思ったんだもん。」と笑顔で話す姿が強く印象に残っています。

3 題材の目標

○紙粘土の感触や色の組み合わせ、混色のよさを楽しみながら、思いのままにつくる楽しさを味わう。

4 指導計画

○育みたい資質や能力

(関) 手や体全体を使って粘土にかかわり、形をつくることを楽しもうとする姿勢

(想) 粘土の感触や、手の動きを生かして、様々な色や形を考えようとする力

(技) 粘土のあつかいを工夫しながら、いろいろな色や形をつくろうとする力

(鑑) 形の面白さを感じ取りながら、自他の表現の楽しさを友人と見つようとする力


時数 4	学習活動・内容	評価規準			
		関心・意欲・ 態度	発想や構想 の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
1	○オリエンテーション 粘土に触れる ・遊びの共有化（粘土体操） ちぎる 丸める つまみ出す など ◎テーマからイメージをひろ げる。 ※レオ・レオニ 絵本 「あおくと きいろちゃん」	・粘土の素材の おもしろさを味 わおうとする。 ・テーマにそっ て自分なりに考 えていこうとす る。	・テーマにそ って自分な りに色をイ メージしよ うとする。		
2・3 本時	◎粘土で造形遊びをする 「色の仲間を増やそう。」 (相互鑑賞・評価) ■作品づくりについて学習感 想を聞き合う（言） ・できあがりを写真に撮る。	・色の仲間をふ やしていこうと する。 ・友だちのつく っている作品に 興味・関心をも とうとする。	・粘土に触れ たり、色をつ くったり、形 をイメージ したりして 考えようと する。	・カラフルねん どで自分のつ くりたいイメ ージをあらわ そうとしてい る。	
4	作品交流会				・自分や友だ ちの作品の 良さを見つ けようとす る。

5 本時案（2/4）

・目標 カラフルねんどを使って、自分なりの形を楽しくつくることができる。

学 習 活 動 ■言語活動	○教師の働きかけ ◎共通事項	◆評価 ※支援
●前時の確認する ●本時のめあてを確認する	○前時の内容を確認させる。 ○本時のめあてを確認させる。 ○学習の準備を確認させ活動させる。	
めあて カラフルねんどを つかって かたちをつくろう。		
●グループ毎に活動する ●評価 ■学習感想を発表し合う ●後始末を行う	・子どもの表現活動のよさをひきだす 言葉がけをする。 ○グループで、活動の様子を見合っ て活動させる。 ○グループ内で自分の作品について発 表させ、表現のよさを共有させる。 ○協力して後始末を行わせる	※指や手のひらで粘土の特 性を体感させるようにする。 ◆工夫して粘土で表現して いる。 ◆友だち同士で作品のよさ を話し合っている。

【 小学校提言 分科会：A-1 素直な造形 ～ 子どもの気持ち 】

	「作りたいものを引き出すために」～小規模校での陶芸粘土を使った制作～		
	函館市立本通小学校 前任校の全学年 / 指導者 前小屋 学		
	夢	つくる	人
	◎	○	

1 題材について


- ・焼成粘土による制作は、子どもたちは、「形が残る。」「実際に使える。」という点に大変ひきつけられる。子どもたち自身で作品を作れる環境を整え、子どもたちの意欲が持続して楽しく、形が残る立体作品の制作を楽しませたい。
- ・前年度までの児童の経験してきた技能や発想をふまえた上で、作りたい物をより自由に発想できるように工夫した。
- ・作品は実際生活に使えるものが多く、そのことを期待する子どもも多い。鑑賞の際には実際に使ったりした感想を発表しあうなど、作品に浸らせるようにしたい。
- ・本校は小規模校のため、学習内容に応じて全校図工を行っている。全校で行う際には、上級生が下級生に教える機会を設定し、より学習を深められるようにしている。

2 題材の目標

- 低学年 ・かたおしやかたぬきから思いついたものを作ろうとする。
 中学年 ・粘土のつけ方や削り方を工夫して、焼き物を作る。
 高学年 ・焼き物制作の技法を生かして、目的に合わせた物作りをする。

3 指導計画

○育みたい資質や能力					
(関) 粘土の素材を味わい、テーマにそって表現を工夫してつくろうとする姿勢					
(想) テーマにそって、実際に使うことをイメージして発想する力					
(技) 形作るために道具を選択し、工夫して粘土で表す力					
(鑑) 友だちや自分の作品の良さを見つけ、それについて話す力					
時数	学習活動・内容	評価規準			
		関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
5					
1	<p>【中学年】 食器を作ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ●たまつくり・ひもつくりその他の活動を行う。 <p>【高学年】 器を作ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ●たまつくり・ひもつくりやその他の活動を行って、焼き物作りの基本を確かめる。 ●中学年に教えながら活動を行う。 	<p>【中】 粘土で器をつくることに興味をもち、楽しく取り組もうとする。</p> <p>【高】 目的に応じた器を楽しくつくろうとする。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 授業時間数については 低学年は4 中・高学年は5 </div>		
2・3 3本時	<p>【低学年】 かたぬきあそびをしよう おさらをつくってかざろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ●かたぬき遊びをする。 ●のし棒で板を作って紙皿にくっつける。 ●お皿にかたぬきしたものをくっつける。 <p>【中学年】 食器をかざろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●飾り付けの計画を立てて制作を行う。 <p>【高学年】 器を作る計画をたてよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●作りたいものをきめて制作計画を立てる。 ●これまで学習したことを生かして計画したものを作る。 	<p>【低】 かたぬきあそびに興味をもって楽しく取り組もうとする。</p>	<p>【低】 かたぬきしたものをくっつけて楽しく活動できたか。</p> <p>【中】 器の形を考えたり、きれいに飾ろうとしたりする。</p> <p>【高】 自分の作りたいものの形や飾りを考え、形に表そうとする。</p> <p>【高】 形や飾り付けを見通しをもってつくることができたか。</p>	<p>【中】 飾り付けをいろいろ試しながら自分だけの器をつくることができたか。</p>	

1	<p>【全学年】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●素焼きしたものに下絵付けをおこなう。 <p>※透明の釉薬をかける部分は、難しいので教師の側で準備をする。</p>		<p>低 好きな色をつけることができたか。</p> <p>中 器に合った色を選んで色をつけることができたか。</p> <p>高 器に合った色や模様などをつけることができたか。</p>		
1	<p>【全学年】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○友達の作品をみて交流し合おう。実際に使ってみよう。 ●友達の作品の良いところを見つけて発表し合う。 ●自分の使い方に合わせて実際に使ってみる。 				<p>低 作品を使って楽しもうとする。</p> <p>中 作品を使って楽しんだり、友達の作品の良いところを発表しあったりしようとする。</p> <p>高 作品を実際に使って良さを味わったり、友達の作品の良いところを発表しあったりしようとする。</p>

4 実践の視点と経過

【低学年の様子】

- ・低学年は周りの活動の様子を見たり、実際に教えてもらったりすることで、積極的な活動を引き出すことができた。教えてもらうだけでなく、型抜きについては逆に中学年に教えながら制作をした。中学年と会話しながら制作を進めることで、自分の思いを伝えながら作品を完成させることができた。



【中学年の様子】

- ・中学年の児童は昨年までの経験を教えながら学習を深めることができた。

【高学年の様子】

- ・前年度は初めての器作りということで、教師主導で行ったため、自由な発想を引き出すところまでいけなかった反省があった。本授業では自分の作りたいものに合わせて、作り方を選び、計画的に制作を進めることができた。



- ・反省点としては、ひも状にして積み上げていく作業は、なれない子どもたちには難しかった。高く積み上げるうちに、徐々に広がっていき、作ろうとした形にうまくまとまらないなどの声も聞こえたので、身の回りにある入れ物を活用して作るなどの工夫が今後必要である。

5 今後の課題とまとめ

- ・陶芸粘土を使った学習では、技術的な指導が多かった。児童の発想を大事に、かつ、作品として完成できるように（技術面）、と言う両方のバランスを考えることは今後も大事である。
- ・全校授業は少人数で自分の思いを語りながら作ることで制作に深まりが出る良さがある。
- ・全校授業を行うに当たっては教育課程の作成の際に、各学年で内容を同時期にそろえるなどの工夫が必要である。「各学年の系統性を考えて、小学校6年間でどのように育成するか。」について考えるよい機会となった。

6 その後の授業について

①全校授業について 小さい学校の特性をいかして

- ・児童の見取りのしやすさ
- ・学年の系統性の把握のしやすさ（教育課程の工夫）

②「ゆめ」の実現へ

- ・制作の自由度の高まり（子どもの思いと表現方法の見通し）

H24 年度の実践



実際に身の回りにある物に粘土を貼り付けて制作を行った。玉作り、ひも作りでは、子どもが作ることでできる形に限りがある。そのため、さらに作り方の選択を増やした。この方法では、自分の作りたい形を短時間で簡単に作りやすくなり、器の飾りを考える時間を増やすことができた。

- ①作りたい物を考える。
- ②作りたい物に近い形のものを探す。
- ③新聞を貼り付ける。
- ④粘土を貼り付けていく。（左の写真参照）
- ⑤入れ物を外す。



H23 年度に比べて高さのあるものや、大きな物も作ることができるようになり、制作の自由度が高まった。これまでに2年間行ってきたので、子どもたちも出来上がる作品に見通しを持てるようになり、「お菓子入れをつくりたい。」「ペットに餌をあげる入れ物をつくりたい。」などの声があがり、具体的な目的をよりもって作品作りを行うことができた。



H25 年度の実践

昨年の経験から、これまでと違った物に挑戦する子も出てきて、大きなお皿や、背の高い花瓶を作った。身の回りにあるものを利用して、だいたいの形を作り、そのあと自分の好みの形に変える工夫も見られるようになった。



子どもたちの経験が高まると作りたい物に広がりが出てきた。

高さのある花瓶をつくるために逆さまにして、底の形を作成している。



H26 年度の実践

粘土による鈴作りを行った。これまでの陶芸粘土の扱いを生かして、器以外でもっと自由度が高い制作を行った。

普段お世話になっていた八雲町教育委員会の窯が事情により利用できないということで、素焼きで作品として仕上がる内容から選んで結果でもあるが、ドベを使った接着などがこれまでの制作の中で定着し、いろいろな物を取り付けて作りたい物をのびのびと制作していた。



1年生は、油粘土での制作を学級で行う図工の経験を生かして、自分の作りたいものを形にした。陶芸粘土として、気をつけなくてはならない、乾燥のことや、ドベを使った接着などについては、上級生が教えるなど、全校図工のよさが見られた。(写真：作品かめ)



3年生は、基本の玉の形から、ひねりだして作りだした。

4年生のうち、一人は、基本の丸い形に魚の部品をたくさんつけたして形を作りだした。(写真：魚)




もう一人は、基本の丸い形を面を意識しながら変形して、作品作りを行っている。(写真：いちご)

子どもたちはそれぞれ、自分の作りたい形や自分の好みの作り方を選んで作品を作った。

亀の甲羅の模様や、いちごの種をつぶつぶを、鈴が鳴るようにする穴として使う工夫が見られた。

【 中学校提言 分科会：A-1 素直な造形 ～ 子どもの気持ち 】

	「我が社のロゴマークをデザインしよう」		
	新篠津村立新篠津中学校 2年 / 指導者 中村 悠子		
	夢	つくる	人
	◎	○	

1 題材について

- ・本題材は、自分が作りたいと考える会社を実際に設立したと想定し、会社のイメージやターゲットに合わせてその会社の顔とも言える会社（ブランド）ロゴマークを表現する造形活動である。子どもたちの「こんな会社・お店があったらいいな」という夢あふれる想いを制作のスタートにし、本当に会社をおこしたらどうなるだろうと深くまでつきつめ、イメージをかたちにする楽しさを感じさせたい。また、マークのデザインにおいては、美しくもわかりやすく伝えることが必要である。ターゲットを絞り、主体的に客層を考えてより伝えるための工夫を加えながら発想や構想をし、オリジナルのデザインを表現していく。



2 題材の目標

- ・生活の中に使われているサインやマークなどの視覚伝達デザインを基に、伝わりやすくする工夫について考えたり、デザインしたりする。

3 指導計画

○育みたい資質や能力				
(関) サインやマークのデザインに感心をもち、主体的に創意工夫して表したり、表現の工夫などを感じとったりしようとする姿勢				
(想) 多くの人に伝えるために、形や色彩などの効果を生かして、わかりやすさや美しさなどを考え、マークデザインの構想を練る力				
(技) 伝えたい内容を絵の具や色画用紙、描画材を生かして効果的に表現する力				
(鑑) お互いの作品をもとに話し合い、わかりやすいデザインとは何かを考えながら作者のねらいや創造的な表現の工夫を感じとる力				
時数	学習活動・内容	評価規準		
		関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能 鑑賞の能力
1	○マークの役割を知る。 ・色々なサインやマークを鑑賞し、デザインの要素、工夫の違いを考える。 ・「こんな会社があったらいいな」と思う、自分の会社を考える。	・伝えたい内容を分かりやすく親しみやすい形や色彩にする工夫に関心をもち、発想を膨らませようとしている。	・自分の表したい主題を見つけ、発想を広げている。	・色々なサインやマークから、伝えたい内容を想像したり、形や色彩についての工夫を考えたりする。
2・3	◎マークをデザインする。 ・会社のイメージが伝わりやすいデザイン（色・形）とはどのようなものかを考えなが	・主体的に創意工夫して表そうとしている。	・伝えたい内容を多くの人々に伝えるために、形や色彩などの	



	ら、効果的なデザインのアイディアスケッチをする。 ・制作の途中でグループ交流も行いながら、デザインを練り直し、よりよいものにしていく。		効果を生かして、わかりやすさや美しさなどを考え、マークの構想を練っている。		
4・5	◎決定したデザインをケント紙に転写し、アクリル絵の具で彩色する。 ・より伝わるマークにするために、絵具の濃さや適切な筆の選び方や使い方などを考えながら着色する。	・描画材料の特性を生かし、表現技法を工夫しようとしている。 		・描画材料の特性を生かし、意図に合う新たな表現技法を工夫している。 ・手順なども考えながら見通しをもって表現している。	
6	◎マークとともにどんな会社なのか伝わるまとめ「会社紹介シート」をつくる。 ・「より伝わるまとめ方」を意識し、会社紹介シートを作る。	・色彩のもつ効果を考えながら画用紙や描画材を選び、主体的に創意工夫して表そうとしている。	・伝えたい内容を多くの人に伝えるために、色彩などの効果を生かし、わかりやすさや美しさなどを考え、構想を練っている	・描画材料の特性を生かし、意図に合う表現技法を工夫している。 ・手順なども考えながら見通しをもって表現している。	
7	○相互鑑賞・評価 ■グループで作品について話し合う。(言) ○制作を振り返る。	・友達の意味、よさや美しさ、表現の面白さ感じ取ろうとする。		・作者の意図を感じとりながら、自分の価値意識をもって味わっている。	

4 実践の視点と経過

- ・子どもたちの中にある「こんなことができたらいいな」と思う夢を、少しでもかたちに出来る美術の授業をと思い、授業づくりを行った。実際に会社をおこすことはできなくとも、イメージをすること、そしてそれを形にすることの喜びを味わうことができる授業づくりを目指した。

5 今後の課題とまとめ

- ・本研究の「素直な造形 子どもの気持ち」の視点に関わって、「こうしたい!」と思う気持ちを全面に盛り込むことを重視して授業を構築した。発想段階におもきを置くことで、自分だけの会社を考える段階では、オリジナルのキャラクターや細かな商品と値段設定、お店の外観はこんな風がいい、などと、深くつきつめて考えている様子も見られた。その結果、マークデザインの段階で「伝えたい会社のイメージを、マークでどのように伝えるか」をしっかりと考えることができたように思う。しかし、まだイメージを形にする段階での躓きを抱える生徒への手立てにはたくさんの可能性を感じており、もっと効果的な導入段階・発想構想段階での手立てを検討していきたい。

<p>A-1 「素直な造形から子どもの気持ち」分科会</p>	<p>助言者 大橋 功（岡山大学教授） 司会者 後藤 征秀（函館市立亀田中学校） 記録者 宮川 典子（鹿部町立鹿部小学校）</p>
<p>○分科会のテーマ 「子どもの夢の多面的な発想・構想・創造を語ろう」</p> <p>・討議の柱 子どもの気持ち、夢にそった造形教育とは、どのようなものかを発想・構想・表現・観賞などから多面的に考える。</p>	

【公開授業】

「カラフルねんどで（小1）」 七飯町立七重小学校 石岡 寿子・船橋 恭二

1 授業者（石岡）より

○反省について

- ・学級の半数が本時の目標を達成できなかった。
- ・子どもが十分に素材に触れて楽しんでからマグネットを入れるような流しにすればよかった。
- ・子どものよさやつながり、悩み相談を全体に還元することができなかった。
- ・子ども達の導線を考えた場の設定（完成したら黒板に貼る、貼ったらすぐマグネットを持って行ける）にすればよかった。

○工夫について

- ・絵本『あおくんときいろちゃん』を導入に用いて、子ども達とイメージを視覚的に共有（広汎性発達障害の子へ配慮）したこと。
- ・色粘土で混色体験をさせることができたこと。
- ・学習感想で自分なりの思いを話すこと。
- ・粘土の状態を保つ工夫として、ウェットティッシュや霧吹きや密閉容器を用いたこと。

○子ども達の気持ちについて

- ・「ちきゅうとたいよう」「ボーリング（倒れているところ）」「たいようとそら」「おぼけ」「あおじそ（葉脈を黄緑で）」「のぼせたおじさん」を作ったり、色作りにこだわったりと、それぞれの思いで楽しんでいた。

2 授業者（船橋教頭）より

- ・特別支援の必要な児童（決めることが苦手）への対応としてTTを行っている。
- ・子どもの思い（ストーリー）をコミュニケーションし、読み取ることを大切にしている。
- ・学習感想を話す場を大切にしている。

3 質疑応答・意見

意見1 [いろ][かたち][おおきさ]の視点の中で、子ども達は色を混ぜながら発想していた。つまむ・つなぐがうまくいかず、自分が最初に構想したものが完成できなかった子どもも。



意見2 絵本の提示や「オレンジ色の作り方からやってみよう」の投げかけからの流れはよかったが、[いろ][かたち][おおきさ]の視点の提示で、思いが切れてしまったようだ。学習感想は、記録して見せるより、先生が楽しんで聞いてあげればよかったのでは。

意見3 素材の準備がよかったので、子どもは大喜びで意欲をかきたてられたが、[いろ][かたち][おおきさ]の提示で、思いが切れてしまった。制作時間が17分しか取れなかった。

また、マグネットのために重さを調整しなくてはならず、子どもの作りたいという思いが発揮しきれなかった。作ってから、マグネットを入れる方がよかったのでは。学習感想では、子どもの内面がわかるために話をきくなら、話すことを「がんばったこと」「見つけたこと」ではなく、粘土にこめた思いやストーリーを話させられたらよかった。意見を一往復半(教師→児童→教師の感想)させ、先生が思ったことを伝えることで、イメージや語彙を広げてあげることができる。

意見4 マグネットにしたことで大きさの制約を受けてしまった。自分の実践で、自分で絵の具を混ぜながらクッキーを作らせたが、生活経験が生きるテーマだからうまくいった。粘土の素材のよさ(まるめる、のぼす、ひっぱる)を生かす機会があまりなかったので、上手に作らせようというより、子ども達にゆだねる方がよいのでは。

石岡 普段の授業だと、オレンジの作り方をみんなで確かめてから制作に入るが、オレンジの作り方を共有することで、新しい可能性が広がるのではないかと思った。

マグネットにしたのは、条件を限定した方が多様性・可能性が出るのではと考えた。

意見5 混色で思い通りにできた感動、子どもの気づきを蓄積させていけるといい。素材の良さ(感触・変化)を味わったことで、そこで偶然できた形を生かして作れた子がいた。「先生に見せたい」「試したい」「落ちないように作りたい」という思いで取り組んでいた子がいる。こういう思いを生かしたり、自信をもって話せるようにしたりできれば。

船橋 色作りの活動、形作りの活動は、前時までに行っている。また、今までも毎時間、クラスの1/3の児童に話させて、記録を積み上げてきている。

意見6 マグネットのつく大きさのわかりやすい提示がよかった。幅が広くなりすぎると、何を作ってもよいかわからなくなるので、3つの観点、マグネットという枠があるのもよかったのではないか。

石岡 プレ授業で観点を与えずに作らせてみた結果、その場にある色から発想して作品を作ってしまう、混色した色から発想して作る子が少なかったため、観点を与えてやってみた。

意見7 学習感想の時の、気づきをうながす問いかけや、思いを汲んだ上で気づきをうながすのがよかった。

また、教頭先生がわざと失敗して見せて、気づきを促していたのがよかった。

Q1: 次時の作品交流は、どのように行う予定か。

石岡 実物投影機を使い、こめた思いを話すような形で行いたい。

船橋 磁石の特徴を生かした見せ方も考えていきたい。



提言1「小規模校での陶芸粘土を使った作品作り(全学年)」 函館市立本通小学校 前小屋 学1提言者より

「作りたいものを引き出すために」ということで、焼成粘土のよさ、「形が残る」「実際に使える」魅力を生かした実践を続けてきている。小規模校なので全学年一斉授業で行った。

陶芸粘土に触れさせるところから始め、発達段階に合わせて、低・中・高、それぞれの目標で行った。中学年・高学年が、制作の計画・技法の確認などを行ってから、低学年が加わり、上の学年が下の学年に教えるという教え合いの場を作った。人数が少ないので、伝え合いの場を大事にした。

技術的な指導が多くなりがちだが、児童の発想を形にできるように考える、技術と発想のバランスに難しさがある。子供が作りたいものを作るためには、積み重ねと環境整備、準備と指導の積み重ねによって見通しを持たせ、作りたい意欲を引き出すことが大事ではないかと考える。



2 質疑応答

Q 1 : 陶芸以外で全校で縦系列で、教え合い・話し合いの場をもった取り組みはあるか。

A 1 : 野鳥絵画展 (ポスター) への取り組みをした。色の塗り方などを交流させた。

Q 2 : この題材に入る際に、どんなテーマを与えたのか。教師の関わりはどのようにしたか。

A 2 : それぞれの学年に「実際に使えるものを」ということで投げかけている。また、教科書の題材・技法を生かして作れるようにしている。

子ども同士の教え合い、学び合いを促し、直接指導の必要な下の学年の子に多く時間を割けるようにした。また、手順を表示しておくようにするなどの工夫もした。

Q 3 : 完成した陶芸作品に対して保護者さんの反応はどうだったのか。使っているのか。

A 3 : 下の学年のものは使いづらいが、菓子入れや花瓶は使っているとのこと。水漏れするのでワンカップを入れて使用しているものもある。祖父母が使ってくれている家も。

Q 4 : 形作りまでは意欲を持って取り組むが、乾燥・釉薬などの過程で、作品から子どもの心が離れることがあるのだが、愛着を持ち続けさせるために工夫していることはあるか。

A 4 : 時間が経って忘れかけていることはあっても、次の過程で作品に触れると愛着が戻ってくる。完成までの過程で意思通りに完成しない可能性があることは伝えている。

完成まで愛着はもっている。

【提言2】

「夢をかたちにできる「美術」の魅力 (中2)」 新篠津村立新篠津中学校 中村 悠子

1 提言者より

素直な子どもの気持ちを引き出す工夫を伝えたい。

制作の様子から子ども達が何を考えているのか探ること、できあがった作品から思いを汲み取ることを大事にしている。

○「プラスのパワーのステンドグラス (中3)」～進路・最後の中体連、3年生としての迷いと決断

気持ちを引き出すために、制作中の会話を大事にしている。最後に作品に込めた思いを語る鑑賞会を担当も交えて行う。普段から人の作品をけなすことがないよう指導し、この仲間になら自分の気持ちを素直に話せるという雰囲気作りを大事にした。

○「色の栗」(中1)～色と形による抽象表現 初めてのテーマ設定

自分にとって身近なものや気持ちをテーマにするよう投げかけた。まとめに「思いが伝わる解説」を書いてもらうようにしている。伝えたい思いを大事にしている。また、次の授業の冒頭で、「強い気持ちを感じる作品」を紹介し、気持ちを伝えることの大切さを伝えている。

気持ちを引き出すポイントの1つとして、突然やってくる集中の時間を大切にしている。



○会社設立シリーズⅠ我が社のロゴマーク（中2）～想像で会社を設立・ロゴマーク作り

アイディアスケッチを色々かく。「ここはもうちょっとこうしたい」という気持ちを大切にす
るよう伝えている。気持ちを引き出すポイントとして、アイディアスケッチを交流し、仲間の作
品からヒントを得られるようにしている。

○会社設立シリーズⅡ我が社のロゴマーク（中2）～想像で会社を設立・イメージキャラクター
プラスの言葉がけでモチベーションアップをさせるようにしている。「ここをこうしたい」と
いう思いが、作品をよりよいものにすると思う。

○会社設立シリーズⅢ夢のマイホーム（中2）～想像の会社が成功、夢のマイホームをデザイン
伝えたいことの大切さを説くことばとして、千住博『絵を描く悦び』の一節を紹介したい。

生徒との関係作りを大切にし、生徒と、生徒が作った作品と真っ正面から向き合っていきたい。

②質疑応答

Q1：アイディアスケッチのイメージを形にできない子に対して、どんな支援をしているのか。

A1：アイディアを考える→素材にふれてやってみる→うまく行かなかったらやりなおし、の
繰り返しで行っている。素材にふれる→アイディアスケッチの過程で行う場合もある。

意見：悩み考える世代の子どもの話を聞くのが楽しいという気持ちを大切に、実践を積み重ね
て欲しい。

【助言者より】 岡山大学教授 大橋 功

①公開授業について

混色の発見の楽しさ、新たな素材と出会いと発見の面白さ、材料や技法との出会いを狙った造
形遊びの題材。遊びを通して、基礎的な技術や知識を身につける学びを構成している。

子どもの気持ちという視点から見て、マグネットの使用はよかったのか判断は分かれる。もう
少し子どもの達の経験を積み重ねた先にマグネットがあればよかったのではないか。子どものつ
ぶやきや様子を見ていると、関係づけて自分の中に落とし込んでいく姿が見られた。これだけの
粘土があるなら、重さや形の制約のない造形を楽しませてあげて、マグネットはあとから接着剤
でくっつけてもよかったのではないか。

ICTの使用は、先生が黒板にはりつかず、子ども達の中に入るために使うのがよいと思う。

教頭とのTTというのは興味深い。わざとまちがえる・わざと失敗して見せる、ほっといたら
つまずくところで先に失敗してみせるというのは、伝え方のよい工夫だ。

②提言1について

全校で取り組む陶芸は、積み重ねが大事。焼成する意義や価値を知り、材料や技法と出会うこ
とで、「形を作りたい」という気持ちを刺激される。

それぞれの年齢段階に合った「がんばればできそう」な課題設定が、「やってみたい」「生活
に役立たせたい」「ちょっとがんばればできるぞ」という思いにつながり、完成させることで、
使える喜びや満足感を得ることができる。[教え合い]も含め、学校全体としてのよい取り組み
だと思う。

限られた条件の中でもできることを見つけ、子ども達の成長を引き出ししていこうとするのが大事。

③提言2について

子ども達の「見て」に、「上手」とおだてるのではなく、言葉の向こうにある気持ちに応える。
小1は「いいこと考えた!」と口に出すが、中学生は口に出さない。ニヤリや目の輝きに気づき、
見逃さずにきいてやるのが、子どもの「作りたい」という気持ちを育てる。「ここをこうした
い」という気持ちが自己実現。子どもに問うことが、子どもを知ること。こだわりをとらえてあ
げることが、子どもと先生の信頼関係を育てる。

A R C S (Aやりたい気持ち, Rもの・こととの関係性, Cがんばればできそうという自信,
S満足感) 4つの視点が、授業改善の視点になる。




A-2分科会

公開授業	
題材名	「つながる青函,伝えよう魅力」【中2】
授業者	木村 麻岐
学校名	函館市立桐花中学校

提言 1	
テーマ	「bookカバーのデザイン」【中3】
提言者	濱地 文恵
学校名	函館市立港中学校

提言 2	
テーマ	「墨絵の国へ～想像力を働かせて～」【小5】
提言者	栗林 友恵
学校名	旭川市立神居東小学校

【 中学校授業 分科会：A-2 素直な造形 ～ 子どもの気持ち 】

	「つながる青函，伝えよう魅力」		
	函館市立桐花中学校 2年1組 31名 / 指導者 木村麻岐		
	夢	つくる	人
	◎	○	

1 題材について

古くは縄文時代から人や物の交流があったと思われる函館と青森。青函連絡船やフェリーをはじめ、1988年開通の青函トンネルを使用して、東北地方を訪れる修学旅行生も多い。来年3月には北海道新幹線が開業を予定し、これまで以上に多くの場面で人や文化、経済の交流が盛んになると思われる。

本題材は、今後共に発展していく函館（道南）と青森（東北地方）を1つの大きな地域として捉え、その魅力を伝えようという題材である。本題材では、青函の魅力を効果的に伝えるとともに、夢や想像の世界も含めて発想させ、「こんなものがあったらPRできる」「こんな商品でPRしたい」という思いも大切にしていきたい。ポスターやリーフレットのような平面作品や模型のような立体作品など、魅力の伝え方についても表現方法を自由に選択させる。

また、つながる地域の魅力を多くの人に伝えるために、分かりやすさや美しさなどを考えさせ、その伝え方を工夫させたい。函館と青森をつなぐ夢の架け橋となるような発想をひき出すためにも、アイディアの交流や鑑賞の時間も大切にさせたい。これからの地域を支えていく函館の子ども達が、自分たちの住んでいる函館の魅力を知り、青森の地域とのつながりを考えながら制作していくことで、未来への夢や希望を膨らませて欲しいと考えた。

2 生徒の実態

素直に意欲を持って制作に取り組む生徒が多く、つくることに対して前向きである。絵で表すことに対して苦手意識がある生徒もいるが、文字を使った「楽しく伝えるデザイン」では楽しみながらアイディアを練り、意欲的に制作に取り組んでいた。立体作品では、加工粘土などの可塑性のある素材を好み、楽しみながら制作を進めていた。また、1人でアイディアを練り、発想を広げることを苦手とする生徒や自分の思いを伝えることに慣れていない生徒もおり、授業形態の工夫が必要である。生徒が色々な表現方法で、思いを形に表せるように支援していきたい。

3 題材の目標 「青函の魅力」をテーマとし、表現方法や素材を選択して、デザインを工夫するとともに、そのよさを味わうことができる。

4 指導計画

○育みたい資質や能力					
(関) テーマに基づく地域の魅力を見つけ、主体的に活動に取り組む姿勢					
(想) 地域の魅力をPRするため、発想・構想する力					
(技) 表現意図に合わせて、素材や表現方法を工夫して創造的に表現する力					
(鑑) 作品を通して自分の考えを持つと共に他者の考えを理解し、自他の作品のよさを味わおうとする力					
時数	学習活動・内容	評価規準			
		関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
1	○学習課題の把握 青函の共通点や違いについて調べる。 グループで情報の収集・共有。	学習課題を把握し、意欲的に情報収集に取り組もうとする。			
2 3	○青函地域の魅力を見つけるとともに、魅力を伝えるためのコピーを考え、構想を練る。 ◎形や色彩、材料の組み合わせ等も考え、全体や細部のアイディアスケッチをする。	地域の魅力を見つけ、進んで発想・構想しようとしている。	魅力を伝えるために、形や色彩などの効果を考え、単純化や省略、強調、材料の選択の組み合わせなどを工夫し、構想を練っている。	構想した考えをスケッチに表すことができる。	

4	○表現意図に応じて、材料や道具の選択をし、見通しを持って制作する。	主体的に活動に参加し、日々の制作を振り返りながら、今後に生かそうとしている。		材料や道具を選び、見通しを持って創造的に表現している。	
5	■中間交流 伝えたい魅力や制作の工夫、今後の予定などを交流する。				自他の作品から、よさや工夫について考える。
6					
7	○交流を参考に、完成までの見通しを持って制作する。	他の作品のよさや工夫を参考に制作しようとしている。		見通しを持って創造的に表現している。	
8					
9	○制作の振り返り ■グループで交流。伝えたい魅力や作品の工夫点等を交流し、その魅力を考え、よさを味わう。	作者の意図を感じ取り、その良さを味わおうとしている。			作品のよさを味わい、地域の魅力を見つけたり、自分なりの考えを持つことができる。


※■言語活動、◎共通事項に関連した内容

5 本時案 (6/9)

- ・目標 中間交流を通し、自他の作品のよさや工夫について考えとともに、自分の表現を見つめ直し今後の制作に生かそうとする。

学 習 活 動 ■言語活動	○教師の働きかけ ◎共通事項	◆評価 ※支援
● 前時までの確認。	○ 前時までの内容を確認させる。	※ これまでを振り返り、伝えたい魅力を再確認させる。
● 本時の目標と活動を確認。	○ 本時の目標と活動を確認させる。	
自他の作品のよさや工夫について考え、今後の表現の参考にしながら制作しよう。		
■グループで1人ずつ順番に発表し、作品を鑑賞する。 発表が終わったら、付箋紙に作品の良い点やさらに工夫できる点を記入する。	◎色や形、イメージなどで伝えたい魅力や制作の工夫・今後の見通しなどの話をさせる。 ○テーマや工夫点を意識しながら鑑賞するように促す。	※作品をもとにして具体的に話していくよう意識させる。
■付箋を読み上げながら、本人に渡す自分の作品について書かれた付箋は、ワークシートに貼る。		◆主体的に発表や付箋紙の記入に取り組んでいる。 ※グループ活動がスムーズに進むように支援する。 ※魅力が伝わっているか意識させる。
●交流や鑑賞から今後の計画を見直し、ワークシートに記入。	○交流から、さらに工夫できる点がないか見直すように促す。	◆交流や鑑賞から今後の制作に活かせる工夫点を見つけ、計画を見直すことができる。
■交流を通しての参考点や今後の計画について発表。	○具体的な表現方法や計画の変更点などについて発表できるように促す。	
●他班の作品も見る。	○他班の作品についてもテーマや工夫点を意識するよう促す。	
●見直した計画に合わせて制作。	○新たに必要なものがないか確認させる。	※新たに必要なものがある場合には準備させるとともに、表現方法で困っている生徒へのアドバイスをする。
●学習の記録をワークシートにまとめる。	○今日の活動を振りかえさせ、今後の予定を確認する。	※今後活かす部分を見つけ、主体的に活動できたか振り返らせる。

【 中学校提言 分科会：A-2 素直な造形 ～ 子どもの気持ち 】

	「bookカバーのデザイン」		
	函館市立港中学校 3年 / 指導者 濱 地 文 恵		
	夢	つくる	人
	◎		

1 題材について

- ・この題材では、T書店という実際にある書店をイメージして、bookカバーをデザインする。
- ・制作したカバーをどんな本に付けたいか考えさせ、カバーの紙のサイズを文庫用と新書用の2種類から選択させた。
- ・T書店の協力が得られ作品を書店内に展示するので、書店のイメージも大切にしながら、道具や材料に幅をもうけ自分なりの表現を工夫させた。

2 題材の目標

T書店が函館に出来た背景を理解し、そのイメージに合うデザインを工夫させる。また、bookカバーのデザインの特徴を理解し、使用目的に合ったデザインの構想を練り、絵の具やその他の材料の特性を生かし、よりよいデザインにするために考察を重ね、3年生として完成度の高い作品を制作させる。

3 指導計画

○育みたい資質や能力					
(関) デザインの目的や機能に関心を持ち、自分の価値意識をもって主体的に学習に取り組もうとする姿勢					
(想) デザインの機能や構造を理解するとともに、独創性をもって豊かに発想し、イメージと目的を結びつけ構想を練る力					
(技) 表現意図に合う表現方法を創意工夫したり、制作の順序などを総合的に考える力。					
(鑑) 作品のテーマに対する意図と工夫を感じ取り、生活を豊かにする美術の働きについて理解や見方を深める力。					
時数 9	学習活動・内容	評 価 規 準			
		関心・意欲・ 態度	発想や構想の 能力	創造的な技能	鑑賞の能力
1	◎様々な書店で使用されているbookカバーを観察し、その機能や構造を理解し、アイデアスケッチをする。	・bookカバーの機能や構造に関心をもとうとする。 ・どんな本を包みたいか自分なりに考えようとする。	・bookカバーのアイデアを考えている。		
2	◎T書店が函館にできた背景を知り、T書店をイメージしたbookカバーのデザインを考える。 ○アイデアスケッチをする。	・T書店のことでbookカバーのデザインを考えようとする。	・自分のアイデアとT書店のイメージを結びつけ、bookカバーのアイデアを考えている。		・アイデアスケッチをしている。

3	<p>◎作品のテーマとカバーのサイズを決め、ワークシートに記入する。</p> <p>■ワークシートを使い、班で作品の交流をする。</p> <p>◎班のメンバーのアドバイスも参考にしながら下絵を考える。</p>	<p>・作品のテーマを考え、デザインに合うサイズを選択しようとする。</p> <p>・友達の作品の改善点を見つけ、アドバイスをしようとしている。</p>	<p>・アイディアスケッチと友達のアドバイスを参考に下絵を考えている。</p>		<p>・テーマにそうように改善点をとらえている。</p>
4・5	<p>○実際のカバーのサイズを確認し、全体の構図を決める。</p> <p>○下絵を描く。</p>	<p>・構図を確認しようとしている。</p> <p>・集中して作業しようとしている。</p>	<p>・カバーの構造を確認し、デザインの位置を考えている。</p>	<p>・薄く丁寧に下絵を描いている。</p>	
6～9	<p>○ポスターカラーなどで彩色する。</p> <p>◎材料を工夫して作品に生かす。</p> <p>○作品のテーマや見所などをまとめる。</p>	<p>・丁寧に彩色しようとしている。</p> <p>・作品にあうように材料を工夫しようとしている。</p> <p>・作品のテーマや見所などをまとめようとしている。</p>		<p>・丁寧に彩色している。</p> <p>・色鉛筆やパステルなどの画材を使ったり、コラージュをする。</p>	<p>・自分の作品を客観的にとらえている。</p>

4 実践の視点と経過


現在は作品用の用紙に下絵を描いており、bookカバーの構造を考え、絵がどの位置にすれば見栄えがいいのかよく考えて制作している。内側に折り曲げられる部分にイラストを入れたり、カバーに葉を付けるなどの工夫が見られる。用紙は表と裏で質感が異なるため、各自自分の表現に合う方を選択して使用している。

5 今後の課題とまとめ

本研究の「素直な造形～子どもの気持ち」の視点に関わって、生徒の自由な発想を大切にしつつ、bookカバーの構造を生かしたデザインを制作することを重視して授業を行った。また、道具や材料に幅をもうけ様々な材料を準備することで、生徒が工夫しながら自分の表現にあう方法を選択できるようにした。

今回の実践では、2年生のときに行ったパッケージデザイン制作で学んだ目的にあわせてデザインを考えることを発展させた。ただ展示するのではなく、使用することも考え、書店のイメージも大切にして、より完成度の高い作品を作るという意識のもと制作を行っている。課題としては、彩色の段階で自分のイメージをどれくらい作品に反映して表現できるかである。

【 小学校提言 分科会：A-2 素直な造形 ～ 子どもの気持ち 】

	「墨から感じる形や色」		
	旭川市立神居東小学校 6年 / 指導者 栗林友恵		
	夢	つくる	人
	◎	○	

1 題材について

- ・本題材では、黒一色の墨を、水の分量や使う道具を工夫することで、幅広い色で表したり、形やリズムに特徴を出して表したりすることができる。墨汁そのものは単色であるが、水の加減により様々な色合いを感じさせる。また、筆の動かし方によって、かすれたり、にじんだりといった様々な表情を感じ取らせたい。
- ・子ども達が様々な方法を試しながら、自分の感覚や活動を通して形や色などの造形的な特徴をとらえ、活動を展開していけるように本題材を構成した。これは、本分科会のテーマである「子どもの気持ち、夢に沿った造形教育とはどのようなものかを発想・構想・表現・鑑賞などから多面的に考える。」に即していると考えられる。
- ・墨による表現のよさや美しさを友人と語り合い、創造的に学習を深めさせていく。

2 題材の目標 墨と水でできる形や色を試したり、特徴を生かしたりしながら、心地よい調和やリズム感のある絵に表す。

3 指導計画

○育みたい資質や能力					
(関) 墨と水でできる形や色に興味をもち、絵に表すことに取り組もうとする姿勢					
(想) 墨の色の濃淡や様子を試しながら、心地よい調和やリズム感のある絵を考える力					
(技) 筆や用具を活用しながら表し方を工夫しようとする力					
(鑑) 自分や友人の作品や作家の作品を見合ったり話し合ったりして、墨の美しさや表し方のよさ、面白さをとらえる力					
時数	学習活動・内容	評価規準			
		関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
1・2	◎墨絵遊び ・リズム、色を変えて様々な描き方をしたり、多様な道具で書くことを試したりして、墨絵を楽しむ。 (筆・スポンジ・ロープ、たわし、スポイトなど。) ■活動の中で見つけた技法を発表したり、よさを見つけ合ったりする。	・積極的に様々な描き方を試そうとしたり、様々な種類の道具を使おうとしたりしている。 ・よい技法をまねしようとしている。		・墨で様々な描き方をして生まれたい形や色を楽しみ、自分なりの技法を発見して絵に表している。	・友人の描き方を見て、学んだり、よさを見つけ合ったりしている。
3・4	◎絵に表す ・表したい技法に合った紙を選び、自分なりにとらえた楽しさやリズムを組み合わせて、絵に表す。 (相互鑑賞) ■友人の作品を見て、よさをカードに記入し、プレゼントする。	・考えた技法を積極的に使おうとしている。	・試したことを生かして、心地よい調和やリズム感のある絵を考えている。 ・自分の作品にあった作品名を付ける。	・試した技法や紙の大きさを生かして、絵に表している。	・自分の作品の意図やよさを振り返る。 ・友人の作品を見て、すてきなところや工夫しているところなど、気付いたことをカードに書き、伝え合う。

4 実践の視点と経過

<導入時>

本学級の子どもたちにとって、墨を使い和紙に直接絵を描くことは、初めての経験であった。本学級の子ども達の多くは、「上手に描きたい。」「きれいにまとめたい。」と強く感じている。そのため、本題材を通して、「リズムに乗って筆を動かす楽しさ」や「偶然できる色や形の面白さ」を感じさせたいと考えた。遊んだり試したりしながら描くことは、発想を広げていくために大切である。様々なリズムや濃淡で描いた物（複数）を見せると、「おお〜。」と意欲的な声が聞こえてきた。使う道具を紹介し、「どうやったらできるかな。みんなも、技や墨でできる色を探して遊んでみよう。」と投げかけ、墨絵遊びを行った。

- 子どもの気持ちに即して**…①墨汁を入れた皿と水を入れた容器を用意し、濃さを試せるようにした。
②発想を喚起するような道具を用意した。また、子どもが使ってみたいと考えたものは、何でも使ってよいことにした。
③小さな紙をたくさん用意した。手軽に描いて、何枚使ってもよいことにした。
④子ども一人一人に絵のよさを伝え、子どもが考えた技法の価値付けを行った。（発想に自信をもたせるため。）
⑤友人の描いた絵のよさを見つけ合わせた。



<展開時>

導入時で行った墨絵遊びの作品を並べ、見つけた技法の確認をした。これらを組み合わせたり、描きながら新たな発想を広げたりして、1枚の絵を完成させていく。子ども達が発想を広げやすいよう、様々な大きさの紙を用意した。子どもは、刷毛や筆を思いのままに動かしたり、スポンジによるスタンピングやスポイトを使ったにじみなどを楽しんだりしていた。また、楽しんでいる声や、発見したことのつぶやきなどに共感するように努めた。

- 発想を促すために**…①活動の進まない子どもには、一緒に活動し、道具を勧めたりしながら具体的な方法を見付け出した。
②墨の濃淡や余白に目を向け、子どもと表現の意図などについて対話を行った。
③子どものつぶやきから、工夫点などを見付け出し、指導と評価に生かした。
④作品名を考えさせた。また、作品の意図も同時に記入させた。



対話とカードによる鑑賞会を設定した。4～5人の班で鑑賞会を行った後、全体で自由に鑑賞させた。「おほめ券」というカードに友人の作品のよさを書き、交換する活動を行った。

- 認め合う鑑賞会に**…①班での鑑賞会では、「質問」「ほめる」「拍手」などの役割を分担し、肯定的な話し合いができるようにした。
②多くの友人と「おほめ券」を交換することで、自分の作品のよさに気付いたり、自信をもたせたりすることができるようにした。

5 今後の課題とまとめ

本研究の「素直な造形 子どもの気持ち」の視点に関わって自由な発想を重視して授業を構築した。ともすれば、教師の指導は、「上手な作品を作らせよう」というものに向かってしまうことがある。しかし、それは「教師が作らせたい作品」であって、「子どもが作りたい作品」ではない場合がある。子どもが発想したことを受け止め、認め、様々に試させることで、子ども達が自信をもったり、楽しんで作ったりすることを心掛けた。子ども達からは、「こんな形ができた!」「見て。今までで1番うまいったよ。」などのうれしそうな声が多数あがった。

今回の実践では、「上手に描こう」という型にはめた子どもの考えを「自分なりに発想しよう」というものに、少しずつ切り替えられたように思う。しかし、中には「失敗したらどうしよう」と心配しながら活動する気持ちも残っている。今後も、子どもに自信をもたせ、進んで作ろうとする気持ちを育てていきたい。

A-2 「素直な造形～子供の気持ち」分科会	助言者 西岡 裕英（北海道立教育研究所企画・研修部指導主事） 司会者 九千房 政光（北斗市立浜分中学校） 記録者 長峰 詠子（函館市立西中学校）
○ 子供の夢の多面的な発想・構想・創造を語ろう ・子どもの気持ち、夢にそった造形教育とはどのようなものかを発想・構想・表現・鑑賞などから多面的に考える。	

【公開授業】「つながる青函、伝えよう魅力」について 函館市立桐花中学校 木村 麻岐

1 授業者より

北海道新幹線開通に関わり、青森と函館のつながりがマスコミでも取り上げられ、多くのイベントが行われている。北海道新幹線は、来年の修学旅行で実際に利用することになる。青森と函館は、昔から地域のつながりがあるので、今後も一層交流し、発展させたいという気持ちを込めて制作しようと生徒達に話した。

函館の資料の用意し、下調べは1年生の時に行った函館西部地区自主研修を、また青森についての資料はパンフレットなどを取り寄せて制作に役立てた。今日はその制作過程の中間の鑑賞会として、互いの作品を見合い感想を述べ合い、そこから作品をよりよくするヒントをもらい合うことができれば良いと考えた。

授業では、鑑賞意見交換を3人のグループで行ったので、感想やアドバイスが他の2人からしか聞けなかったが、それでよかったのかと思った。また、ポスターやリーフレットなど平面的な資料を多く見せた他の2つの学級は平面作品が多かったが、今日のクラスは青森関係の商品なども見せたためか、粘土や発泡スチロールを使っの立体作品などが出た。

作品は完成後に文化祭会場に展示の予定。市役所等をお願いしてみたが、今のところオーケーはでない。展示できるところを探してみるつもりである。皆さんからご指摘をいただき、今後の授業に生かしていきたい。

2 質疑応答

Q1：自分自身が青森出身なのでこの授業を見せて頂いた。子ども達の作った作品はこれからどうするのか。HPでの発信等の予定はあるか。（空知 T）

A1：本校の文化祭で全員分飾る予定。函館の人や観光客の人たちに見てもらって良さを伝えたいので、全生徒の作品でなくても、期間が短くても飾らせてもらえる場所を探していると生徒達には話した。

Q2：この後、授業を通じて、どのように変わっていった欲しいと考えているか。（渡島 K）

A2：函館の子ども達が自分たちの住んでいる地域を見直す機会になれば良い。また修学旅行で行く青森や仙台等東北地方行くときに、見たい、知りたいことが広がると良いと思う。先ほどの質問にもあったが、HP公開できるなら良いなと思っている。

Q3：子ども達の作品を見ると、レポート、立体、ポスターなどいろいろな材料や技法を使った様々な作品があるが、先生が今回の授業を通して特に子供達のここが伸びていった欲しい、乗り越えていった欲しいという点は何か教えて欲しい。

A3：制作する上で、自分は何が必要であるかを考えて言えるようにしたい。道具、材料をある程度用意すると、すでにある紙類から何となく制作する子供が多い。しかし、「発泡スチロールが欲しい。」とあって、こちらが用意した材料で作っている子もでてきた。あらかじめもっと材量の種類や特質を教えてやればよかったという反省もある。

Q4：制作過程のなかで、生徒同士が自然に仲良く話し合っていることがすごいと思った。中学生なのに、これだけたくさんのお客さんのいるなかで、自然に話し合っているのが印象的だった。

① どのような学級経営をしてたら、このような話し合いができるのか教えてほしい。②本日の講演の中でも話があったように、中学校では3年間を見通してカリキュラムを組む苦労があると思う。授業のなかで生徒達が自由に表現方法を選択していたが、カリキュラムを組む中で、特に技法を指導する順番等、考慮していることがあれば教えてほしい。(札幌 I)

A4: ①学年3クラスしかなく、2つの小学校から進学してきているが、自然な雰囲気の中で仲がよい子ども達である。本校の研修の取り組みで、各教科の授業のなかでグループ学習の形態を取り入れている。そのため授業における話し合い活動のやり方が、1年生の時から身につけているのではないかと思われる。グループ作りを配慮すること以外は、学級活動は大したことはしていない。②最初は前任の先生の指導を引き継いで指導してきた。昨年まで、1～3年生まで立体制作をしてきた。2年生では石膏を彫る制作を行い、それを生かして3年生では石を彫る篆刻につながっている。平面作品では、1年生で扱ったレタリングを3年生で制作する自画像のなかに取り入れている。学年間のつながりを持たせたいと思っているが、勉強不足である。

Q5: 相手の作品についての感想、アドバイスを付箋に書くだけでなく、付箋に書いた内容を相手に読んで渡してるのがいい点だと思った。私の見ていたグループでは、厚紙を使用してちょっとぼろっとした五稜郭タワーを制作している男子に、活発な女子が問題点を指摘していたが、彼はそれをきちんと受けとめていた。また同じ女子生徒が、班内の内気そうな子に対して配慮のある話し方をしていた。感想を伝える際に、相手にふさわしいコミュニケーションの仕方を自然に学んできたんだなあと感じた。グループの人数は3人くらいでいいのではないか。「青函の魅力」って書いてあるが、「青函の魅力」って何か。(函館N)

A5: 生徒達に伝えていたのは、作品を見たときに「そこに行ってみよう」、「こういうのがあったらすごい」と思えるもの、伝えたいことを魅力と考えたい。他のクラスでは、パンフレットにあった中身まで赤いリンゴ、お風呂に浮かんでいるリンゴ等々の例を見てこれはすごいということで作品の参考にしている子がいた。感じられたことを、別の形で他の人に伝えられたらいいねと生徒に話している。

Q6: 生徒達の思いが作品に素直に結びついていて、この分科会の「素直な造形～子供の気持ち」というテーマにしっかりと沿った授業であったと思う。素直な気持ちといえそうかなとも思うが、作品の技能としてのレベルは中学校2年生のものとしては今ひとつではないか。(函館 N)

司会: 隣の分科会の作品も中2の作品としては・・・作品の出来映えではなく、過程が大切なのかなと思う。

Q7: 自分は総合のまとめをつい美術のノリでやってしまいがちである。総合学習でのまとめと、美術での制作とのすみ分けをどのようにしているか。それから随分多様な表現のなかで、技能の到達目標をどの辺に定めているか。ひとつひとつの到達目標を設定しているか、それともまとめて一つにしているか。評定にも絡んでくるので聞きたい。(札幌 I)

A7: 総合のまとめでは、平面に写真を貼って、文字で解説を書いて仕上げさせていた。今回もそのような総合のまとめの形に近寄りがちだった。途中途中、「総合のまとめではないよ。」「美術だよ。」と意識させてきた。色の使い方、文字が書いてあるだけではなく、材料の選び方も含めて美術としてのがんばりや工夫が、まとめでわかるか、違いをどう出すかを投げかけている。参考になる本を見ると、多様な表現をさせなさいとあるので、様々な方法をやらせてみた。例えば、1年生のマグネット作りで加工粘土を体験しており、慣れているので楽しそうに扱っていた。でも技能的レベルは低いかもしれないので、技能的に低い子達は他のところで見取ってやらなくてはと思う。私のなかでは色や形はともかく、総合的に立体と平面を一律に評価するのは難しい。

Q8: 表現方法が多様になればなるほど、制作、指導に時間がかかる。進度に個人差がでる。そこをどうしているか。(渡島 N)

A8：間に合わない子は居残り学習。速い子にはキャッチコピーのはいった台紙作りなど関連した制作をさせるよう声をかけている。今日の授業で立体を作っていた子は、実は前回まで平面制作をしていたが、終わったので別作品に移行した。速い子には突きつめられるところまで突きつめさせたい。

意見：うんと速い子なら、2個作っても良い。(渡島 N)

A8：ちっちゃいものならできる。キーホルダーなんかもすすめている。

Q9：貴重な気づきを取り入れた授業にすごくやる気を感じた。資料のなかの写真を見ると、KJ法で食についてとか、自然についてとか生徒が貴重な気づきを書き出しているの、函館の魅力全体で共有し、精査し質的に高めていく必要があったと思う。これはKJ法でよく使われる問題解決の授業ではなく、造形活動なので、「今回はこのレベルで考えてみよう。」というふうに、レベルをある程度一律化すると、多様化した表現があったとしても、その後で個人指導の仕方も焦点がしぼれるし、指導案も作りやすかったと思う。子ども達の様子を見ると、もうすばらしい作品を作っている生徒もいるし、大間のマグロの色をどうしようかというレベルでぐちゃぐちゃの子もいる。先生は、放課後に個人指導をしながら、子どもとの距離を縮めて苦手な子を支えていくようだが、今日は研究授業なのでちょっと無理があったのではないか。また中間の交流の時間に、グループで討議をして付箋張りをし、言語活動をすることが本当に必要だったのだろうか。(札幌 T)

A9：この学級は能力の低い子もいて、生徒同士の力の差が大きくある。KJ法を使ってよかったところは、グループの中で弱い子を拾っていったところである。グループに紙を一枚ずつ配って、青函の良さを書き出してグルーピングで1時間かかった。次の時間にそれを見直して、各自がやりたいものを拾って行ってワークシートにまとめた。書き出したものは美術室に貼っておき、アイデアが浮かばない子のために、青函の魅力についてふれている新聞を美術室に展示し、いつでも見られるようにするなどして、楽しく作らせるという意味で、遅い子、苦手な子にあわせて作らせた。方法によってはもっと得意な生徒の作品を質的に高められたかと思う。中間交流をあえて行ったのは、子ども達の気持ちを大切にすため、全体の流れを思い出させるためである。授業で交流することにより、互いの良さを発見し、さらに新しいものを作り出す気持ちや「はやくやりたいなあ」という心の変化を持ってほしいと思った。

Q10：話し合いは、自尊感情を高めるためのもの、お互いを勇気づけるためのものだった。生徒達に否定的な指摘はなく、言わずもがなのルールがきちんとできていた。しかし話し合いは長すぎたのではないだろうか。(札幌 T)

司会：自分も去年、附属函館中学校で似たタイプの授業を見せて頂いた。函館の駅弁を作ろうという授業で、総合とクロスするような内容だったが、これからこのようなタイプの授業が増えるのではないかと話題になっていた。次回の函館大会にはどのような授業がされているのか楽しみである。

2 提言1「bookカバーのデザイン」について 函館市立港中学校 濱地 文恵

昨年お菓子のパッケージデザインを、今年は3年生の授業を発展させ、実際の企業と少しでも関わりをもてないかと思った。地元函館に新しくできた「T書店」の協力で、作品を店内に展示して頂けることになった。今回は、漠然とブックカバーのデザインをするのではなく、子ども達も行ったことのあるT書店のイメージを大事にしながら形にすることにした。カバーは文庫用、新書用の2種類とし、生徒達には自分の包みたい本にあわせてサイズを選択させた。最初からサイズもそろえ、アイデアスケッチの段階でブックカバーの構造、上と両端を織り込むことを生かすにはどうデザインしたらよいか、包んだ時を予想させてアイデアを練らせた。道具や材料の選択の幅を広げ、デザインさせたいと考えた。付箋を使って互いに感想を言い合い、「もっとこうした方が良い」というような指摘もあってよいと指導した。昨年の経験もあり、スムーズに進んだ。

作品例1。見たままランプをモチーフにしたもの。最初は折り紙や柄シートも使ったが、ポスター

カラーでインパクトを出そうとした。しかし結局納得がいかず、再度チャレンジ。トランプの数を増やして迫力を出した。

作品例2。トーストをイメージしている。アイディアスケッチの段階ではサンドイッチでいろいろなものが挟まっている感じだったが、本人が立体的な表現にしたいということで発泡スチロールを薦めてみた。本人は目玉焼きの卵とバター of 立体感に力を入れた。他の生徒にも好評な作品である。

作品例3。和をイメージして作った作品。資料集の伊藤若冲などを参考に色も和を意識しており、顔料や水墨画のようなもの、鶴の羽の部分などにラメやアクリルガッシュでつやを出した。

作品例4。イラストの半分が表で半分が裏になっている。表ではりすが一匹本を読んでいるが、裏表紙では他の動物たちも集まってきているというストーリー仕立てである。基本的に色鉛筆だが、空や下草にはパステルを使い、ほのぼのとした作品に仕上げた。

作品例5。制作した生徒は紫が好きで、紫を中心に星空を水彩で仕上げた。触るとわかるが何枚も紙を重ね張りしている。厚みを出さないようトレーシングペーパーの使用を薦めてみた。アクセントとして実際のリボンを貼り付けてしおりを表現した。

作品例6。本を包んだときに見える面にイラストを描いているのが特徴。下の方を切ってサイズを確定してから、イラストの位置を決めた。スマートホンをテーマにし、アプリの部分はシートを用意し、角の丸みを切って表現した。またアップルのマークを本の形にして工夫した。絵の具の扱いが苦手な子なので白いラインが曲がってしまった。その後、紙を切ってスプレーのりで貼る工夫をした。

作品例7は制作の速い子の作品。発想からすぐこのデザインに決定して描き上げた。すべての作品の中で最もT屋の落ち着いたイメージに近い。あか抜けていて中学生とは思えないスタイリッシュな作品になった。

生徒の自由な発想を大切に、bookカバーの構造を生かしたデザインを重視して授業を行った。各自が道具や材料を工夫しながら、意欲的に制作し、多様な作品に仕上がった。作品のコピーを実際の本にカバーとしてつけた。制作の過程でお互いを認めながら活動していたことが、それぞれの作品の良さにつながった。いろいろな道具に興味を持ち、実際に試行錯誤して使い、どんどん作品が変化していく過程に興味深かった。誰かが新しい取り組みをすると周りはそれを肯定的にとらえ、声を掛け合う姿が教室のあちこちで見られた。学級経営の良さや全体の環境が、生徒の発想や構想を助けたと感じた。私自身も毎時楽しく指導することができた。

2 質疑応答

Q1：①地域との関わりを大切にするという大切な課題だと思うが、「T書店」とは他に何かもともと関わりがあったのか。②江戸時代のT屋が写楽を育てた店だという、T屋の歴史踏まえて課題設定をしたのか。③デザインのルールは何かあったのか。シンプルなレタリングだけのもの、絵をしっかり描き込んでいるものも出てくると、時間のかかり方に差が出てくる。それを防ぐためにどんな手立てをとったのか、絵は必ず入れるというようなルールはあったのか。(札幌 I)

A1：①桔梗中学校のN校長先生とT書店さんの関わりをもとに、何回も連絡を取って頂き、ここまでつなげることができた。さらに作って終わりではなく、8月末から2、3週間の間お店の中に展示して頂けそうであり、もしかすると実際に書籍の販売に使って頂けるかもしれない。ただし、紙質の問題があり、確定してはいない。生徒にも話していない。(後日、実際に展示。販売で使用した。)②T屋の歴史については少しだけ触れた。今40代から50代の方が10代の頃に代官山のT屋1号館ができたそうである。「その頃の中学生が大人になってからも、落ち着いた雰囲気を楽しめるような和の文化にも関わられるような店作り」を目指しているという話を子ども達に伝えたので、和の雰囲気のある作品がいくつか出てきているのではないかと。③完成一覧は持ってきてないが、時間差をうまく調整した。作品がシンプルな子が、むしろアイディアをまとめるのに時間をかけていたので、時間的な個人差はなかった。

Q2：完成品はどれか。スキャナで撮って平面上に出したのか。コンピューターを聞いたがる子はいなかったか。手先を使うのが苦手な子がコンピューターでそれなりのものを作ることがある

ので伺いたい。(渡島 N)

A 2 : スキャナで取り込んでプリントアウトしたのは、先生方に本につけた状態で手に取って見て頂くため、作品は生徒の作ったままのもの。コンピューターの使用については生徒からの要求はなく、私の方からも特に言っていない。ただし、絵が苦手な子には切り貼りのコラージュを勧めた。

Q 3 : 特定の「T書店」という書店を授業テーマの扱いで保護者からのクレームはあったか。(函館 A)

A 3 : T書店をイメージさせたが、店名を文字で入れるという指定はしなかったので大丈夫だった。

Q 4 : 非常に完成度の高い作品を見せて頂いた。今までブックカバーの制作指導の経験を踏まえて今回の授業につなげたのか。(釧路 A)

A 4 : ブックカバーを指導したのは初めて。

美術の経験年数はあまりない。ただ子ども達は、昨年お菓子のパッケージデザインをしたので、調べ方やイメージをデザインにつなげることが身につけているのではないかと思います。

Q 5 : すごくいい作品作りで、とてもよい授業。でも先生と話をしていたら、制作の途中で「この作品は良くなりそうだ。」と思ったものが、指導していくうちに先生の望む形になっていかなかったという話を聞き面白いなあと思った。子どもの素直な思い、素直な造形と、指導者の狙っている形が同じ方向に進まない。子どもの描きたいもの、制作したいと望んでいるものと、教師のイメージ、つまり目的意識のぶつかり合い、葛藤である。我々指導者がいつもぶつかるころだと思う。その辺について、濱地先生だけでなく全体から伺いたい。(函館 N)

A 5 : 生徒の作品が先生のねらいどおりに進まない。修正をすべきか否か。今ご意見にあったような葛藤は、設定が子どもに合っていないときに多く見られると思う。でもそうなったときに、共有した経験をやったときは、それを認めなければいけない。村上先生の講演にあったように、これからの授業においては、ただ作るだけではなく、他に伝えていくことを大切にしなければ。そのために、気持ちを交流することができる学級経営をしていかななくてはならない。もし生徒が教師の意図とは違った作品を作ったことについて、自分の理由を説明できれば、また友だちに「それ違うのでは・・・。」と言われたときに、教師が寄り添ってあげることで、その作品は認められるようになるのではないかと。直接思いを伝えていくことが、ますます大切になっていくのではないかと。木村先生の授業でよかったのは付箋をただ渡すのではなくて読んで渡していたことだったと思う。直接に思いを受けとったり、渡したり、直接会話することが大事である。(札幌 M)

Q 6 : T書店の社長さんならどの作品を選ぶと思うか。

A 6 : 最初に先方様には「どういう作品が良いのですか。」と聞いたが、「中学生が作るのだから、中学生の良さを生かしてください。」としか言われていない。子ども達で作ったものは、お店の歴史、それから実際行ったことのある店舗の煉瓦や蔦の葉、ブックカバーであるから本のストーリーに沿ったものなど幅が出ている。個人的に選ぶなら最後の文字だけのシンプルな作品かなあと思うが、ちょっと選べない。

助言者 : プロダクトデザインを扱う場合、業者のニーズの制約のなかでデザインしなければならない。制約のないデザインをしているときとのちがいは、生徒が独特のものとして感じていたのかなと思う。ただし対応しきれなかった子については、先生方が自然にそれについて考えて、寄り添っているはずである。

提言 2 「墨から感じる形や色」 旭川市立 神居東小学校 栗林 友恵

「素直な造形、子どもの気持ち」の視点に関わって自由な発想を重視し、子どもの気持ち、夢に沿った造形活動に関われるのではないかと授業を組み立てた。本校の教育目標が「自ら考え、高め合い豊かに表現する子どもの育成」、それと今回のテーマとの共通点「気持ちを表現する」

を意識して墨絵の授業作りに取り組んだ。自由な表現には、表現してよいという安心感が必要である。また子どもが表現したときに教師が上手、下手という作品主義に走るのではなく、どんな気持ちで描いたか、表面だけではなく、何を表現しようとしたかを深読みすることを心がけた。アクティブラーニングー能動的・協働的学習ーにも意識を向けようと思った。そのためコミュニケーションで授業を成り立たせるよう、教師は一人一人と関わり、また子ども同士も互いにつながれるようにした。

第1次1, 2時間目、能動的学習を大切にしようと考え、墨絵遊びをした。視点と経過では発想、構想を大切にした。①墨絵遊びを通して墨の特性や描くことのおもしろさを感じさせた。②様々な書き方を試させ、試したものはすべて認めた。③子どもが遊びながら出した技法を価値付けた。

制作の様子について。うんとほめて、描きたい気持ちを起こさせた。墨で書くのは初めてだったので、縄文土器のようにひもに墨を付けて紙の上で転がすなど色々試した。たわしを使い、紙がぼろぼろになったが、「それも面白いね。」とほめて指導した。それを見ていた子が「筆でひっかくようにしたら雪みたいになるけれど、ぼろぼろにはならないよ。」とアドバイスしていた。滲みに注目した子が、霧吹きで紙を濡らしていた。さらに別の子は高いところからしずくを垂らした。紙に命中したもの、床にもたくさん模様ができた。墨の濃淡に注目した子は渦巻きを描いて楽しんでいた。描くたびに子ども達の顔がほぐれ、様々な描き方を試す子が増え、交流、学び合う姿を見ることができた。

第2次、3・4時間目最後の時間では、オリジナルの作品を作って味わう共同的な作業を行った。表現に関わるころの作品を黒板に貼って互いの作品を想起させた。前時に見たことのなかったものについてはどうやったかという対話をさせて、表現の意図を引き出した。子どもがつぶやきや工夫点を認めて自信を付けさせた。やはり失敗を恐れる子が多いので自信を持たせることによってお気に入り完成させたいと思った。大きな紙に書くときには、この子は筆を素早く動かすことを楽しんでいた。この子は「紙を切っても良いですか。」と質問をした。指導書に〈大きさも自由で良い〉とあったので、切っても良いと指示したところ、紙を切って地球のような海のような絵を描いていた。スポンジでスタンプングをしたり、垂らす技法を生かしたり、紙の上にひもを走らせたりたわしで墨を散らしたり、縄文土器のような技法を使った。この子は滲み、この子は墨の濃淡を生かしたいとし、テーマは花火にしようかなと決めた。この子は前時には墨を筆で垂らしていたが、このときにはスポイトで垂らすようにした。この後「青いチョークを貸してください。色をつけたいのです。」という、えっと言うような発言があった。子どもの気持ちを大切にしようとして取り組んだ題材なので、墨という白黒の世界でチョークを貸すことを迷ったが、その子どもが、「雪舟は水墨画の人だけど色をつけていたよ。」といったので、それもそうかと思い、着色を認めた。ただし、チョークでは発色が悪いので、パスを貸した。その後、この子は虹を描いた。また、しずくを垂らす方法をとっていた子が、色水を垂らして試していた。雨を描いている子、掛け軸みたいになりたいと作品を細長くした子もいた。

鑑賞の場面では、作品名と作品の意図を簡単に文で書かせた。対話をするように鑑賞会をした。全体で、自由に鑑賞し、「お褒め券」を交換し、互いを認め合う鑑賞会にした。まずは対話とカードの鑑賞会を設定し、4～5人の班で鑑賞会を行った後、全体で自由に鑑賞させた。班内鑑賞では、4色のカードをあらかじめ配り、赤は作品発表者、黄色は質問者、青は作品をほめる人、緑は拍手をする人、1人分終わったらカードを時計回りで渡した。一言しか書けないが「お褒め券」は全体鑑賞で使った。例「〇〇さんの絵を見ると人生を感じます。」「人生、私たちの人生を描きました。たくさんの脇道も描きました。」「ゆうきさんへ、みずうみみたいですごく良いです。霧がかかっているみたいで、これも良いです。」

この作品では下の方だけ色が塗ってある。「〇〇さんへ、色がついた花火も良いけど、黒いの

も良いと思います。」「花火を濃淡、かすれで表現しました。花火には色がついていないので、黒い花火としました。」と書いてくれた。子どもの感想に「めちゃくちゃ楽しかった。」「社会で雪舟を習い、雪舟はすごいなあと思ったけれども、自分たちの絵も良いと思った。」とあった。

この授業を通して子どもの気持ちによりそう指導観が磨けたかなあと思う。子ども達が楽しめる遊びを設定し、自由な発想を大切に。子どもが作りたい作品を作らせる。そうすることにより、子どもの発想を認め、様々に試させるようにする。さらに広がり、自信や意欲につながり、元に戻って楽しい遊びが生まれていくようなサイクルにつながれたらと思う。

2 質疑応答

Q1：用紙はどのようなものを使ったのか。色を使った生徒は全員のどのくらいだったか（函館 N）

A1：練習にはたまたま学校にあった版画用の紙を使った。本番は鳥の子紙を使った。色を使った子どもは全体の半分くらいだった。

Q2：子ども達が非常に生き生きとものおじしないで話し合い、制作している様子が感じられたが、どのような学級経営をしているのか。また、先生の発表の仕方がアクティブラーニングでわかりやすかった。「〇〇と考えているので、〇〇の表現になった。」など子どもの様子が見えてくるような発表の仕方が勉強になった。（旭川 T）

A2：しゃべることに抵抗を感じている子どもが多いので、学級全体ではなく小グループやペアでの活動を行っている。

Q3：私は、日本画の出身で中学校で水墨画を指導している。だから小学校で生徒に素材体験をしてもらおうとすごく良い。感動して見ていた。体験なので墨絵遊びになっているが、墨遊びでかまわない。遊びながら体で覚えていく、小学生は鉛筆でこまこま描くなんてNGだと思う。筆を使って緩やかに体全体で描いたらどんなに良いか。発達段階を考えたいうでもすごく良い内容だと思った。墨一色である必要はない。墨彩画というジャンルもあるので、先生の指導案を拝見していると、墨の濃淡にこだわりがあるので、それからいくと駄目だったかもしれないが、私なら墨、黒、グレーと有彩色の相互作用、黒があるからこそ青が引き立つ、そのためには黒がいる。余白は白、無彩色と有彩色が折り合った貴重な瞬間はすごい意味深い場面だったと考える。あと、墨一色で追っていくのなら、清墨とか奈良県で作っている墨が良い。薄くしたときに青光りするような墨。ただの墨汁とか、いま売られている「洗濯して落ちる墨」は薄墨にしたときに水っぽくなっちゃって全然墨に美しさが出ない。もし、墨の美しさに子ども達をはませたいのなら980円くらいで清墨があるので、それを使ってはどうか。子ども達に墨の濃淡へののめりこみもあったし……。よい墨は膠を使っており、破墨といって、重ねると墨が墨をはじき、偶然の効果の喜びも出てくる。そういう味をしめた子どもが中学校に上がってくればしめしめです。感動した。（札幌 T）

A3：私は墨についてはど素人なので、習字セットに入っているものを使わせた。ただ、洗濯で落ちる墨を持ってきた子には、それを使うのをやめさせて、私の持っていた洗濯で落ちない墨を使わせた。

感想：子ども達のつぶやきを大切にしているところがよかったと思った。子ども達がきっちり満足しきっている作品を完成させたのではないかという様子を見て、嬉しいなと感じた。作品が良い感じにできていたので、その作品を残しておいて、表装するのはお金がかかるから・・・とにかく作品をとっておいて、消しゴムはんこで良いから落款を押させて大人になってから額装して飾れると良いなと思った。（中学校 T）

Q4：最初、墨を使う理由がびんときていなかった。黒いものなら黒い絵の具でも、ポスターカラーでも一緒だと思っていたが、T先生のお話を聞いているうちに墨にこだわる訳がわかった。栗林先生はきっとT先生のおっしゃったようなことを感じ取って、ここであえて墨を使おうと思ったんだろうなあと思った。ふと思うのは、中学校でも習字があるが、習字も墨を使って、美

術でも墨を使って、あえて区別をつける必要もないが、美術で墨を使うときと、習字で墨を使うときと一緒なのかどうなのかなあとおぼろげに思っていました・・・。(函館市 N)

A4：書道と美術とでは、墨は違うのではないかと。字を書くと言うことと、書道の方は本当は同じ墨を使うと思う。書道も創作がある。パン粉を入れたり、小麦粉入れたり、色んなものを入れて造形的な作品になっていく・・・。日本画の世界のたまたま文字を書いているだけであって境目はなくなるようです。私もちょっとだけ書道をやっている、段を取るまでになったが、絵画的な書だと言われた。根本的なところは違っていると思うが、中学校の書は国語科の中にあるので、正しい姿勢で日本の文化としての文字を書くという目的があって、それなりの評価基準がある。中学校美術の場合は、日本の伝統文化を学ぶのが指導要領に入っているから、そのひとつとして、水墨画を私がたまたまやっている。この前教育大で彩色画をやっている、絵の具を使った日本画を取り組んでいた。伝統文化に着目しなさいと言うのは指導要領にあるから、どこかでふれた方が良く思う。でも墨は奥が深い。水墨画の深遠な世界に触れるべき。(札幌 T)

3 助言者より〈北海道立教育研究所 企画研究部指導主事 西岡 裕英〉

「夢、つくる、人」の中で、ここは「夢、つくる」の分科会です。主題を生み出すとか、主題を大切に作っていくところではないかと思う。作るだけではなく、その思いや夢を目で見えるように可視化、具現化していくかということ、色、形、素材を使って私たちの教科の中で身につけさせる資質と能力の2つを特化して話していきたい。村上先生の話にもあったが、今回の学習指導要領の中の初めてのうちのひとつが、感性の部分だが、小学校にもこの言葉が入ってきた。小学校では感性を「働かせ」、中学校では「豊かにし」、高校では「高め」、小中高と関連がある。感性の段階に注目して欲しい。突然中学校3年生になって現れるものでもなく、高校に行ってから現れるものではない。日々の活動の積み重ねによって豊かになっていく、高まって広がっていく、その活動があるという共通理解を持って話を進めていきたい。年に一回集まるここで確認し、各地に持ち帰って各地で児童生徒に良い教育を施して頂けることにつながっていく。

①木村先生へ。テーマがここ函館でなければ必要感がない。地域性を生かすことが大事。先生方が他の土地に持ち帰っていくとき、他の土地でもできないかという視点を持っていくのが大切かなと思う。木村先生の授業からはこういう視点を頂いたと思う。

また新幹線開通直前でなくても、たとえば高架線のうえを歩きましょうというイベントがある。私たちが普段持っている新幹線とは違う点に着目しているから、このイベントは成立する。題材を作るという視点では、示唆に富んでいた。またそれぞれのテーマで作っていったら、青森と函館と言いますと、それをつなげる所は新幹線。先ほど青森出身の先生から聞いたが、ねぶたとねぶたは違うそうで、その違いを何名かが表現していた。

それから「総合的な学習」と似たようなところがあると皆さんが話していたが、最終的なゴールは似ていたかもしれないが、総合的な学習の時間の方は、探求とか、情報収集とか、まとめて資料を分析するとか、社会に出てから使う問題解決する力をつけている。そのゴールは発表なので、そこは似ているが、美術科ではテーマ設定を持ってきただけである。テーマ設定のスタート地点で、子どもにどれだけ夢を持たせるか、期待を持たせるかというところで解釈できるのではないかと思う。その時に今後の授業を考えていくときに、共通事項の点がポイントになる。図工美術共通の学習指導要領で注目すべき所は、図工美術の教科では、色や形、材料、光と影、そういった所で表現する授業だということ。これを授業中にポイントとして持って行くことが大切である(色、空間の構成の仕方が貼ってあった)。

ですから、今日の授業でも生徒どうしが交流する際にテーマ性を理解するというのもあるが、それを色や形という共通の視点で見たときにどうか、そのときに広がりとか深まりとかを、生かせる生かせないかが見えてくる。後ろの方に座っていたT君には女の子から明暗という良いコメントが出てい

た。その生徒はねぶたを描いていたが、色鉛筆で描いていたので、黒いところに浮かび上がるというところがあんまり見えなかった。黒いところをしっかりと塗った方が明るいところの色がパピッと出てくる。それがまさに色、形、素材のもっと深いところで、白と黒、色が入ったときのコントラスト、密度、そういった所だよと教師が意識して指導することで、お互いの話し合いが深まるのではないか。そして美術の時ってそういう話をすれば良いんだというふうになる。同じような視点で、共通事項のところで描いていた生徒が、6名いたので、クラス全員がそのような感性を持てれば良いし、「やってください。」といったときにその視点を思い出せば望ましい。

②栗林先生へ。墨にこだわっていた。実はこれは教科書題材である。中学校にこれから必ずこういう生徒が来ます。ただこれが墨一色なのか、青っぽいかでも違うし、墨をどれだけ薄めてやったのか、経験させてやることによって変わるので、小中で連携してやってほしい。小学校の先生方はそこまで気づいていないかもしれないが、小中の連携を教科の中でやってもらえると、互いに得るものがある。栗林先生の授業ですごく良いところは、授業にとつぷりと浸らせるところ。これを造形遊びで使うことがあるが、資料にあるようにそこには空間との関わりがある。5、6年生でやるのなら机上でやるのでは十分ではない。教室に紙を貼って、あっちこっちに描かすとかしない。ですからこれは(1)にある造形遊びではなく、絵や立体で表すのが正しい。先ほど伺ったら、やはり造形遊びではないとおっしゃった。教師側もしっかり意識して造形遊びで終わらせない、これが大事。青チョーク、青墨という話もあったが、黒の中に色があると教えることもできるし、それが今後の幅かなと思う。机いっばいに紙を広げていたが、どういうスペースを用意するかによって児童の活動の範囲が変わってくる。予備段階から筆で墨を落としている児童を見たところで、もう少しブルーシートを広げた方が良くかなと……。私たちが場を作る。何よりお褒め券という言葉、相互評価で互いの良さにふれる時に学級経営が大切だ。互いをプラス方向で見ることが大切だと思った。

③濱地先生からの提言。ブックカバーについてだが、プロダクトデザインという枠の絞られた狭い中で試作する。その中で思考が速く深くなったその時に、(1)でとらえたら、(1)でいけるのかなという意見もあるが。目玉焼きがあったが、ブックカバーにしたときに成立するかどうか、その時に(2)にしたときにもっと深まりがでたかもしれない。実際に地域興しとして、商工会との連携で商店の包装紙を作ろうという実践があった。実際そこではコンペティションにして、お店からよいと言われたら使ってもらえた例がある。間口を広げてあげることも狭めてあげることもできた。ブックカバーなら好きな本を扱って、国語との連動もできるし、個人の夢にいくこともできる良いアイデアを伺った。

3つの実践ともすごく示唆に富んでいて、ここ函館だからできた実践もあった。これをまた各地に持ち帰って使える題材だと思った。


アクティブラーニングについてのお話を最後に。まさに言語活動はアクティブラーニングです。これを成立させるにはポイントがある。基盤として、児童生徒が互いに安心安全を確保している。間違いが共有できる場所でしかできない。ルール、基本的にお互いを認め会える素性がある、これが大事。「きょうどう」ということば。共に同じと書く共同だったのが、いまは働く「働」の方です。これも共同の方はどっかから依頼する、共働の方はコラボレートと言われている。互いに互いのやるのが易になるのがわかるというのが大事。学び合うは、差があるのが大事。進み方は、わかっている、わかってないがあるのが大事で、みんな均一だと交流しても何にもならない。私達が日本で行っている一斉的な授業は、海外から着目されている。その中でより多様な表現をどのように見ていくかが大切。N先生から、教師が引っ張っていきいたいというのに生徒がそちらに進んでいかないという話がでたが、例えて言うと、高校野球の名門校で優勝したが、卒業したら野球など見向きもしない生徒がでてしまうチームと、大して成績を残さなくても、その後ずっと野球に関わっていきいたいと思える生徒ができるチームの違い、どちらを目指すか、そのあたりである。美術を愛好する心情をつくっていくわけですから、自ずと答えが出ている。

A-3分科会

公開授業	
題材名	「花火が ドドン！」【年長】
授業者	清水 里奈／白幡 久姫
学校名	函館短期大学付属幼稚園

提言	
テーマ	「つくる・ひろがる・かかわる 楽しさ」
提言者	藤谷 貴代
学校名	北海道教育大学附属函館幼稚園

【 幼稚園授業 分科会：A-3 素直な造形 ～ 子どもの気持ち 】

	「花火が ドドン！」		
	函館短期大学付属幼稚園 ふじ・うめ組合同 32名 / 指導者 清水 里奈 白幡 久姫		
	夢	つくる	人
◎	○	○	

1 題材について

・この題材では、色紙等を使って、自分なりの夢のある打ち上げ花火を製作させる。自分の考えやアイデアを生かすことで、楽しさがあふれ出る夢の花火を表現させたい。教材を工夫してあつかうことで、発想を活かし、感性豊かな打ち上げ花火の形を表現させるようにしていきたい。特に、自分の思いにもとづくイメージと形を意識させて製作させることで、園児の発想・構想の力を育みたいと考えている。

2 園児の実態

・年長2クラス、男児10名、女児22名、計32名のクラス構成である。

進級当初からふじ組・うめ組交流しながら、いろいろな活動を合同で行うことが多く、仲良く一緒に遊ぶ姿が見られる。活動に対しては意欲的で心一つにしながら、年長としての力を発揮している。

3 題材の目標 楽しい夢の打ち上げ花火をイメージし、色紙等の特性に触れながら、工夫して自分なりに表現させる。

4 指導計画

○育みたい資質や能力 (関) 色紙等の素材を味わい、テーマにそって表現し工夫して作ろうとする姿勢 (想) テーマにそって、形や飾りをイメージして発想する力 (技) 形や飾りを作るために道具を選択し、工夫して表す力 (鑑) 友だちの作品の良さを見つける力、またそれらについて話す力				
時数	活動・内容	評価規準		
		関心・意欲 ・態度	発想や構想の 能力	創造的な技能 鑑賞の能力
3 1	○色紙等に触れる。 ・遊びの共有化 切る 貼る 丸めるなど ◎テーマについてイメージして、形や飾りを発想する。	・色紙等の素材のおもしろさを味わおうとする。 ・テーマにそって自分なりに考えていこうとする。	・テーマにそって打ち上げ花火をイメージして考える。	・テーマに合った素材を選択する。
2 本時	◎色紙等で造形遊びをする ・使う材料を選択し、花火の製作をする。	・夢の打ち上げ花火を工夫して作ろうとする。	・色紙等に触れたり、道具を使ったりして形や飾りをイメージして考える。	・形や飾りを作るために道具を選択して色紙等で表現する。

	○話し合いをする。 ・できた作品について、感想を伝えたり、話し合う。	・友だちの作っている花火に興味 ・関心をもつ。			・自分や友だちの作品の良さを見つける。 ・できあがった花火を見て感動を共感する。
3 発展	○「花火ゴマ」を作る。	・回る花火ゴマを工夫して作ろうとする。	・回した時のことをイメージしながら考える。	・コマ作りにあつた素材を選択し、回るコマを工夫する。	

5 本時案 (2/3)


- ・目標 (1) いろいろな材料を使い、工夫して花火を作ろうとする。
- (2) イメージをふくらませながら表現する楽しさを味わうことができる。

時刻	環境構成	予想される幼児の姿	援助・留意点
8:50		◎登園する。 ・所持品の始末をする。	・挨拶を交わし身支度を済ませ座るよう声がけをする。
9:00	・いろいろな材料を準備し、各コーナーに用意しておく。 (教材準備) キラキラテープ モール 折り紙 スズランテープ 紙テープ 色画用紙 セロテープなど	◎花火を製作する。 ・好きな材料を使い花火を作る。 ・イメージをふくらませながら楽しんで作る。 ・完成した花火を台紙に貼る。	・花火のイメージがふくらむよう、今までの活動を振り返りながら、声がけや援助をする。 ・花火ができあがってきたら台紙を広げて、雰囲気作りをする。
9:40		◎話し合いをする。	・楽しく作ったことやいろいろな表現の仕方を話し合い完成を喜び合う。 ・次の遊びに広がるような言葉掛けをする。
9:50		◎片付けをする。 ◎降園準備をする。 ◎降園する。	・友達と協力して片づけるよう声がけをする。 ・楽しい夏休みを過ごし、2学期に期待を持てるような話をする。 ・挨拶を交わし降園する。

《評価》

- ・いろいろな材料を使い工夫して花火を作ることができたか
- ・イメージをふくらませ、表現する楽しさを味わうことができたか

【 幼稚園提言 分科会：A-3 素直な造形 ～ 子どもの気持ち 】

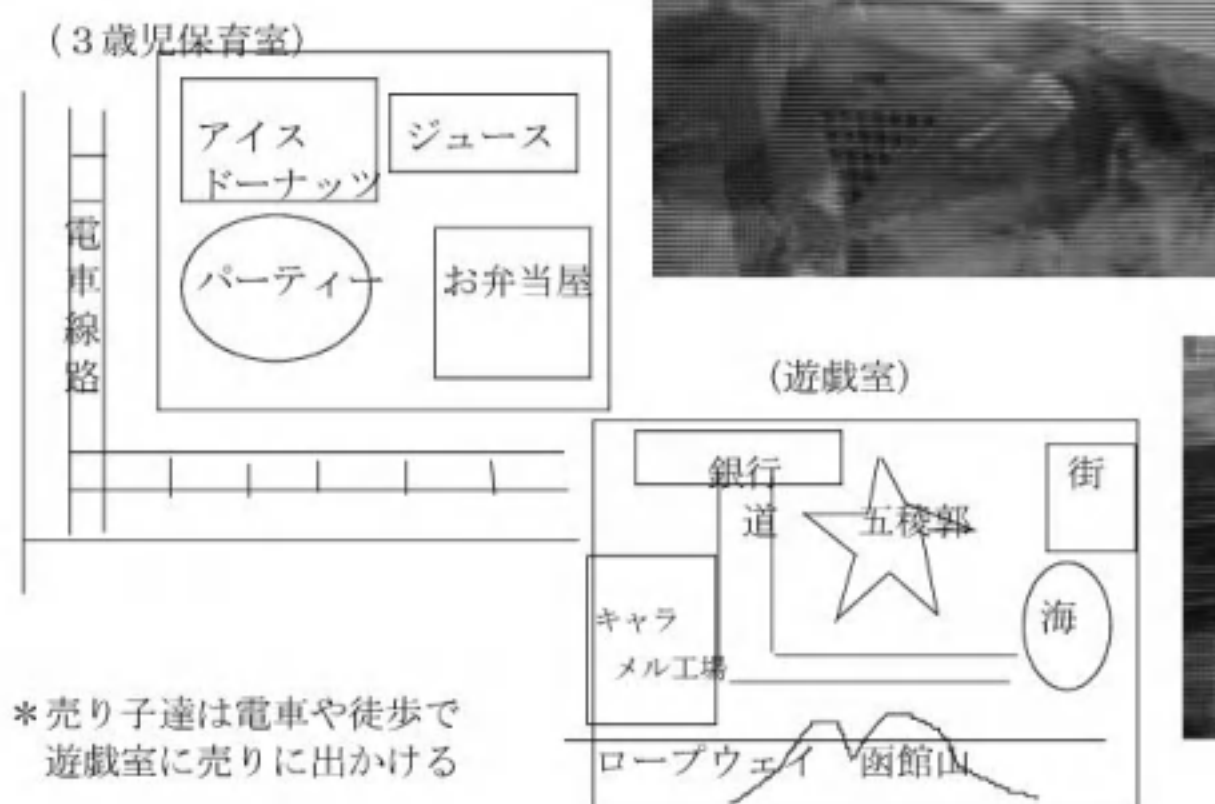
	「つくる・かかわる・ひろがる 楽しさ」		
	北海道教育大学附属函館幼稚園 / 指導者 藤谷 貴代		
夢	つくる	人	
○		◎	

1 はじめに

子どもの「生き生きとした活動」は、体験や経験、環境、人間関係等を基盤とした「感情」により生まれる。本園では「生き生きと活動する子」の育成をめざし、昨年度から幼稚園から小学校へのなめらかな接続をめざしたカリキュラムの作成をすすめている。この中で、幼児の体験から起こる感情や「人と人とのつながり」で育まれる経験が、生き生きした活動を生み、なめらかな接続に必要な意気込みや成功体験の積み重ねに繋がることがわかった。

そこで、昨年7月から10月にかけて、3歳児の「色水ジュース遊び」から「パーティーごっこ」や「おみせやさんごっこ」に発展した事例を紹介し、表現領域の活動としてどのような造形体験を重ねたかを報告する。

2 環境構成



3 事例

(1) 同年齢による遊びの広がり「ジュースやさんからパーティーごっこへ」

3歳児は、色への興味や関心をもち、色の美しさを感じ取る遊びとして、色水のジュース作り遊びをした。色水を作ったり、混色の不思議さを体験した。3歳児はお互いにジュースを見せあったり、友だちの真似をすることで、自分もやってみたくて主体的に作る様子がみられた。

やがて、3歳児達はジュースにあう食べ物を作りたいという意欲をもった。作ったジュースに用意してあったコーヒーフィルターを入れると、柔らかな色に染まった。これをアイスに見立てアイス作りが始まった。用意しておいた茶封筒や小包用紙を使って子ども達はチキンやドーナツを、色紙やお花紙を使って手巻き寿司やおにぎりを作り始めた。また、ジュースの容器にストローをさすことで、リアルさが加わった。

リアルさは子ども達の個々の思いを広げ、友達との交流に繋がり、やがてクラス全体のパーティーごっこへ発展した。教師はパーティーのために、環境を再構成し、積み木や机を準備した。

(2) 異年齢への遊びの広がり「パーティーが移動販売に」

同時刻に、4歳児の保育室では秋の木の实を使ったアクセサリーを、お遊戯室では5歳児が積み木を使って函館の街町を再現していた。

3歳児はできたものを他の部屋に持って行き、様子を眺めながら、お弁当を食べる遊びを始めた。

やがて、異年齢の友だちにも「食べて（みて）もらいたい」気持ちが芽生え、子ども達は箱にドーナツやジュースを詰め、4歳、5歳児に渡しにいった。異年齢の友だちが自分達の思いのこもった作品を受け取ってくれことで、3歳児達は「喜び・楽しさ」「もっと喜んで貰いたい」と感じ、更に運んだり、作ったりする活動を繰り返した。教師は「喜んでもらいたい」という思いを尊重し、運びやすいように専用の箱を用意して、活動を援助した。

遊びが展開すると交流が主になり、造形活動自体は停滞してきた。そこで教師が新たな表現の刺激として、色水に石けん水を加えて振り、ジュースがフロートに変化する活動を見せた。子ども達はこれを取り入れることで、造形活動は再活性化した。また、異年齢の子ども達も興味をもち、造形活動に参加し始めた。

(3) 異年齢との協同性の大切さ「みんなでお店屋さん」

食べものを運んでくる様子を見た5歳児は、自発的に3歳児のためにお店のコーナーを作った。すると3歳児だけでなく4、5歳児も順に売り子やお客になった。また5歳児は紙粘土を四角く切りセロファンにくるんだ「キャラメル」を作ってお店を開いていた。5歳児の活動に興味をもった3歳、4歳児は、仲間に入れて貰い一緒に活動した。年齢を超えて関わりをもつことで、5歳児が作った電車ごっこを一緒にしたり、4歳児の松ぼっくりアクセサリーの作り方を教えあう様子もみられた。このように、異年齢の子どもと関わることで、子ども達の発想は広がり、ルールを生み、共同性をもった遊びに変化していった。

4 おわりに

本研究の「素直な造形 子どもの気持ち」の視点に関わって、子ども達の表現を生かした「関わり合い」に着目してきた。子ども達が「人、もの、環境」を介して関わり合い、課題に対して能動的に活動し、経験や体験を積むたびに、子ども達には大きな成長がみられた。

また、教師は活動が停滞した時にタイミングを捉えて、ジュースに泡が出るように材料を加えたり、活動しやすいように箱を用意した。今までの活動よりも魅力的な環境や活動を加えることで、子ども達の興味関心はより喚起され、主体性と発想の広がりを生み出した。「もてなしてあげたい」「だから作りたい」という「他者を喜ばせる気持ち」は、能動的な造形活動、素直な造形につながったのである。

このように、子ども達の夢は、「生き生きとした活動」を繰り返す中で表現されるのである。



A-3 「素直な造形～子どもの気持ち分科会」	助言者 堤 勝幸（函館市教育委員会教育指導課指導主事） 司会者 渋谷 恵（函館市立戸井幼稚園） 記録者 渡辺 香（元町白百合幼稚園）
---------------------------	--

○分科会テーマ「子どもの夢の多面的な発想・構想・創造を語ろう」

・ 討議の柱

子どもの気持ち、夢に沿った造形教育とは、どのようなものかを発想・構想・表現・鑑賞などから多面的に考える。

【公開授業】

1 「花火がドドン！」について 清水 里奈・白幡 久姫（函館短期大学付属幼稚園）

①授業者（清水）より

題材「花火がドドン！」，活動内容は、「打ち上げ花火を制作しよう」ねらいは、「いろいろな材料を使い工夫して花火を作る」，「イメージをふくらませながら表現する楽しさを味わう」という2つのねらいをもって保育を進めてきた。活動の経過は，年長になり，こいのぼりや桜のちぎり絵などの活動の中で色々な素材に触れながら制作を楽しんできた。今日使った素材も今まで子どもたちが何度も使ってきた素材を使用した。7月の夏祭りごっこで，品物づくりやおみこし制作をし，遊びを進めていくうちに，手持ち花火へと遊びが展開した。その後，お泊り会で実際に花火や手持ち花火を経験することで，「わー！すごい」「きれいだな」と友だちと感動を共有したことが，今日の活動にもつながった。

感想として，固定化した丸い形の花火だけではなく，工夫しながらいろいろな形のものを作っていた。作りながら，「ドーン」「ヒュー」などの声も聞かれて楽しんでいた姿があった。また，一つでは足りず，もう一つ作る子もいたり，個性豊かな花火ができ，飾るときには友だち同士で「これはこうなってるね」など，話し合う姿も見られてよかった。作っている子と作り終わった子との差があり，少しだらけてしまった部分もあったが，出来たものを見せ合ったり，片づけて待ったりと，子どもが臨機応変に動く姿があった。



②授業者（白幡）より

子どもたちが夏の雰囲気を楽しみながら，楽しんで花火を作れるようにピアノでサポートをした。今まで経験してきた制作，桜のちぎり絵では，折り紙を折って切って作るという少し難しいものだったが，それを思い出し，花火に取り入れていたことに感心した。活動を振り返りながら楽しい花火作りが出来たと思う。改めて，この花火作りをして，子ども一人ひとりの感性の素晴らしさに気付いた。丸だけではなく，色々な形，色がみられて子どもたちも私達も楽しく行えた。「夢・つくる・人」のテーマにあった花火作りが出来た。

③意見交流

- ・子どもたちが部屋に入ってきた時，とても元気がよく笑顔で，これから楽しもうという気持ちが伝わってきた。今の時期に，ピッタリの花火作りということで，今までの経験もあり，取り組みやすい題材だったと思う。出来たものを先生に見せた子が，「わー！すてきね」と言われて喜び，友だちにも見せると，「すてきね」「私もやってみる」と作っていた。出来たのを見て「すてき！」と友だち同士で，共感し合うやりとりが見られていた。
- ・作れなくて困っていた子に，先生が来て教えていたが，いなくなるとまた手が止まってしまう子がいた。イメージをふくらませながら表現する楽しさを味わうというねらいだったので，そういう子にはどんな援助をしようと思っていたのか。もう少し先生の援助があればよいと思った。
- ・制作活動は子どもたちにとって得て不得手はあるが，それぞれの子がそれぞれの思いで，用意していた素材を使って考えていた姿は素晴らしいと思った。
- ・自分が作ったものを見た友だちが，作り方を聞くと教えてあげたり，友だちが作ったものを見て刺激を受け，自分も作ってみようとしたり，自分なりに工夫する姿があった。子どもたちのやりとりの中

で、刺激を受け合っていたのではないかと思います。

- ・環境構成、声掛けが参考になった。花火をテープを使ってとんでいるようなイメージで作っている子がいた。これも、環境の構成や先生の声掛けがイメージを引き出した結果なのだと思います。
- ・友だち同士で認め合ったり、友だちの良いところを取り入れて自分なりに工夫するなど、子どもたちの素直な気持ちの入った作品が出来ていたと思う。ちょっと困っている子に対する先生の入り方も良く、手伝う、見守るという場面が子どもたちの自主性を損ねないようにしていたと思う。
- ・一人一人が、自分の思いの花火を作っていたのではないかと思います。素材の種類がたくさんあったが、自分の思いの教材を使っていたと思う。それぞれ個性のあるものを楽しみながら作っていた。
- ・グループが6個あったが、グループごとの特色があった。大人目から見て気になる子がいたが、周りの子たちの力もあり作っていたのを見て、互いに助け合いながら作ることができると感じた。
- ・作品を見ると同じものがなく、それは一人ひとりが個性を発揮していたからだと思う。私達は花火にこだわってまとめようとするが、子どもにとっては、花火という題材の中から思い描いた色々な気持ちがあるかもしれない。教師が、その子どものつぶやきを聞き、共感し合うことで、その子の感性を豊かにしていくことにつながる。そういう意味でも、それぞれの先生が子ども一人ひとりの個性を認め、協力し合っている姿はよかった。題材が「花火がドドン」となっているので、平面に貼ってしまうのではなく、例えば針金やひもでぶら下げる、又、部屋全体を花火の会場になるような環境構成を作るともっと子どもたちに感動を与えたのではないかと思います。子どもたちが感性豊かに育つためにも、子どもたちの発想や気づきを教師がどれだけ引き出せるか、広げられるか環境構成が大切となる。最後の表現という所で、体ごと花火を表現するような方法もあるのかなと思った。
- ・子どもたちが思い思いに作り上げていて楽しい活動だった。その中で、以前の制作の中でやっていた経験が活かされていて、継続した活動の中での制作が出来ているのだと感じた。出来たものを飾っている時に先生がピアノを弾くと、まだ作っている途中の子が、口ずさんでいる姿があった。きっと頭の中でイメージを湧かせながら作っていたのだと思う。



④質疑応答

Q1：今日のグループ構成はどのようなグループだったのか。

A1：今日は2クラス合同でおこなったが、普段はクラスごとに活動しており、1クラスに4つのグループがある。そのいつものグループで行った。欠席の子もいたので人数調整はしたが、いつも活動しているグループ。そのため、子どもたちが共感している言葉のやりとりや助け合っている姿がいつものように見られたのではないかと思います。

Q2：導入場面を見られなかったが、どのような導入を行ったのか。

A2：「花火がドドン」の題材に向けて、これまで制作の流れの中で花火に向けて活動を進めてきた場面が多かった。今日は特に導入はせず、どんな花火があるかの問いかけに子どもが少し応じる程度で台紙の説明しかなかった。それは、今までの活動の中で、打ち上げ花火や手持ち花火をしたり、手持ち花火作りをしたり、たくさんの経験があったので、じっくり集中して作る、イメージを膨らませながら造形を楽しめるように今までの活動の経過も導入とした。イメージが膨らむまで、少し時間のかかる子や手の止まる子もいたが、友だちとのやりとりの中で、徐々に花火を作るというイメージが湧いてきたのではないかと思います。子どもたちの声を拾いながら行った。

Q3：夜空の台紙を出したタイミングが、花火を作った後だったのはどうしてか。

A3：夜空を出すタイミングは、指導案を作成する中で色々と話し合った。最初に貼ってあると、作ったら貼るというのがわかり、楽しみが半減するのではと思い、作っている過程で様子を見ながら、夕

イミシングを見て出した。出すことで子どもたちも注目し、作ったものをみんなで飾り、お泊り会の花火をイメージしながら、きれいだねと共感する時間もあり、最後に出したのがよかったと思った。

2 提言「つくる・ひろがる・かかわる楽しさ」について 藤谷 貴代（北海道教育大学附属函館幼稚園）

本園が目指す保育像は、生き生きと活動する子を核とし、元気に遊ぶ子、よく考える子、友だちを思う子、進んでやろうとする子、と具現化し保育を進めている。子どもの生き生きした活動は、体験、環境、人間関係を基盤とした感情、感性より生まれる。本園では、生き生きと活動する子の育成を目指し、昨年度から幼稚園から小学校への滑らかな接続を目指したカリキュラムを進めている。その中で、幼児の体験から起こる様々な環境や人と人とのつながりが含まれる提言が、生き生きとした活動に滑らかな接続に必要なことだとわかった。

昨年7月から10月にかけて、同年齢による遊びの広がり、異年齢への遊びの広がり、異年齢との協同性の大切さという事で、3歳児の色水ジュース遊びから、パーティーごっこ、お店屋さんごっこに発展した事例を紹介し、どのような造形活動を重ねてきたかについて報告する。

○事例1・・・同年齢による遊びの広がり

3歳児が色水への興味や関心も持ち、ジュース作りを行った。色の美しさ、不思議さ、混色する遊び、ストローをさしたり、飾る表現の美しさ、不思議さを体験した。作ったものを見せ合ったり、まねをすることで、自分もやりたい、新しい食べ物を作りたいと活動が膨んだ。そこで子どもたちが考えたのが、ジュースに合う食べ物を作る事。思いついた食べ物、アイスクリーム、チキン、ドーナツ、ハンバーガーなどを作っていた。ジュース屋からパーティーごっこへと発展する。ジュースの容器にストローをさすことで、より本物に近い感覚になった。出来た食べ物などを子どもたちが準備し、自分たちが今まで経験した中でもっとも楽しいパーティーという活動を始めた。パーティーを通して、同年齢で関わりあう楽しさを共有することもできた。教師は、パーティーのために、どんなものがよいか子どもたちに確認して、一緒に机や積木を用意し、環境を再構成した。パーティーごっこの楽しさで、もっと新しい食べ物が作りたいという気持ちを引き出して活動がどんどん広がった。出来たものを自分たちの部屋で食べる遊びをしていた。やがて、4・5歳児のクラスに持っていった。

○事例2・・・異年齢への遊びの広がり

自分たちで食べて遊んでいるうちに、4・5歳児にも食べてもらいたい、作った作品を見てもらいたいという気持ちになる。箱にジュースや食べ物を入れて4・5歳児に渡しに行った。異年齢の友だちが、自分たちの思いのこもったものを受け取ってくれたことで、もっと喜んでもらいたいと感じとり、運んだり、作ったりする活動を繰り返した。教師は、子どもたちが運びやすいように箱やケースを用意するなどの援助をした。遊びが展開していくと、交流が主で造形が停滞していった。そこで、教師は色水に石けん水を加えてフロートにした。造形活動が再活性し、異年齢の子どもたちも興味を持ち、遊びにどんどん参加し始めた。

この時期、4歳児は拾い集めていたどんぐりやまつぼっくり、枝を使って、やじろべえやバック作りをしていた。その様子を見て、3歳児は興味を持ち、一緒に作ったり、4歳児に作り方を教えてもらう姿が見られた。5歳児は、8月に宿泊保育で函館山にのぼり、町の様子を眺める機会があった。

また、路面電車に乗る体験もした。これらの体験をもとに、遊戯室に函館の街を再現する制作活動を展開した。ダンボールで函館山、積木で五稜郭タワーや線路を作り、街並みが出来てくると、紙粘土でキャラメル工場もできた。キャラメルの売り買いが始まると、お金が必要になり銀行ができた。このように、異年齢児も交えながら総合的な遊びへと発展した。

○事例3・・・異年齢との協同性の大切さ

食べ物を運んでくる様子を見た5歳児が、自発的に3歳児のためにお店コーナーを作った。コーナーが出来ると、3歳児が自然な形でお店屋の人になり販売のやりとりがみられた。やがて、4・5歳児も順番に売り子やお



客さんになり、お店屋さんごっこが展開していった。5歳児もキャラメル作りをしてお店を開いた。興味を持った3・4歳児も仲間に入り一緒に遊んだ。

5歳児は、廊下にビニールテープで線路を再現し、路面電車を走らせた。また、乗り降りしやすいように工夫をしていた。路面電車に興味を示した4歳児は、一緒に線路を作り始めた。興味を持った子どもたちは、5歳児が作った路面電車に近寄り、進んで声をかけて入れてもらっていた。このように、異年齢の子と関わる事によって子どもたちの発想が広がり、協同性を持ったものに変化していった。



○まとめ

本研究の「素直な造形～子どもの気持ち～」の視点に関わって、子どもたちの表現を生かした関わり合いに着目してきた。子どもたちが、人・物・環境を介して関わりあい、自主的に作る活動を通して、楽しさが生まれ遊びが広がった。教師は、活動が展開した時にタイミングをとらえて、子どもと一緒に環境を整えることで、子どもたちの興味や関心はより歓喜され、主体性と発想の広がりを生み出した。

そして、楽しさが次の遊びへとつながっていく。今回の研究から、子どもの楽しさを生む遊びは、年齢を超えて次の遊びへ発展し、連動していくことがわかった。特に、子どもたちが思った、もてなしてあげたい、

だから作りたいという他者を喜ばせる気持ちは、主体的な造形活動、素直な造形へつながり、次の遊びの原動力になった。子どもの夢は、生き生きとした活動を繰り返す中で表現されていくと考える。昨年度の活動から、遊びが「～をしたい」「～してあげたい」など、思いによって発展していくことがわかった。本園では、今年度、小学校との滑らかな接続を目指してをテーマに研究している。幼稚園の遊びは、小学校の遊びの基盤になる。これらの遊びを小学校の学びにつないでいくために、幼稚園ではどのようなことを意識し、子どもを育てていくかを現在研究している。

②質疑応答・意見交流

Q1：遊びが展開していくという発想のイメージが授業の中にあったと思うが、道具や素材は教師が用意していたのは、何をさせようと思って、そこに造形とは違う何か目標があって作らせているのか。

A1：環境をまずは整えることが最優先。子どもがどんな思い、感情、発想を持つか、予想はつきづらいが、物を用意しておいて、この中からできたものを全て拾ってあげようという気持ちでいる。普段から、封筒や紙などは環境としておいてある。子どもたちもどこに何が入っているか知っている。

・食べるものをみんなで協力して作ろう、作ったものでそれを活用してお店屋さんの活動をしようという今回の活動、生活科の観念とすると素晴らしい。図工というのは、子ども一人ひとりの発想を教師が、どれだけ引き出せるのか、引き出して作ったもので、子どもたちがお店屋さんごっこやろう、一緒に作りたいというのもそれも達成であって、一番大事なのは、先生が一つの素材を使って、何を子どもに感じてほしいか。一つの素材であっても、丸める、破る、ねじるなど、子どもはそれぞれ違うものを作る。その子どもの発想をみんなに広める、教師が共感する。最後には作ったもので遊ぶ。これが造形活動だと思う。幼児の発想は想像もつかない素晴らしいもの。同じ物をみんなで作って助け合う、共有し合う楽しさか、素材で何か作り出す楽しさか、そこを先生一人ひとりがおさえられているとよい。

3 助言者より 堤 勝幸（函館市教育委員会 教育指導課指導主事）

①授業について

特別支援クラスに携わっており、気になる子に目が向く。今日も、気になった子がいたが、先生方の支援の中で、しっかりイメージを膨らませて、自分なりの造形活動を楽しんでいる姿が見られた。今日の授業だけではなく、それまでに先生方がそういう雰囲気クラスの中でしっかり作って、思考が広げ

られるような工夫を常にしてきたのを感じた。先生方の視野が素晴らしく、べったりつくのではなく、子どもが思考するときには少し距離を置いてあげる。でも、安心感があるように何か助けを求めた時には、手助けが出来るような位置にいなければいけない、先生方の動きを見ていて素晴らしいと思った。

今、函館市の小中学校では、問題解決的な学習を意識してやっている。目当てがあって、なぜ目当てを作るのか、その子たちが一時間のなかでどんなことをするのか、しっかりと見通しを持たせ、イメージを持たせている。自分たちでどんなことが出来るのか確かめてみる、一人でやってみよう。一人でやった後に、協同でみんなで行っていき、その中で、思考が広がるかもしれない、変わるかもしれない、その活動を大切にしていっていき、最後にまとめをしっかりとしていこう、次につなげていこうという形で進めている。アクティブラーニングを、協同性をキーワードに行っている。歩き回って動くのがアクティブラーニングではなく、頭の中がアクティブとなるように先生方が工夫している。

幼稚園はすべてアクティブラーニングと考えた時に、先生方が実践されてることはしっかりと私達も学んでいかなければいけない事かなと思う。色んな子どもたちの考えを拾ってあげることも大切と考えた時に、評価だけにとらわれなくて、多様な子どもの考えや思考を拾ってあげる、凝り固まった考えではなく、教師自身が共感できることが大切と感じた。幼稚園の評価は2つと考える。一つは、子どもをしっかり見てあげる、その姿を見取ってあげる評価。もう一つは、支援者側が子どもにしていることがあっているかどうか評価する。この2つが大切になってくるのではないかな。

②提言について

環境の再構成がキーワードになってくるのではないかな。子どもたちの姿を見て、思考をとらえて再構成していくだけの柔軟性を支援者側がしっかり持つ必要がある。それにつながるが、微調整をしていくのも大切。新たな表現に刺激を与えているのも大切と感じた。異年齢の協同性、同年齢だけではなく、異年齢との一緒に活動も大切。その中で、コミュニケーションも含まれている。

造形活動で、子どもの気持ちをとらえる、子どもの気持ちを大切にすることはどういう事かを考えた。

造形活動は、見たことではなくて、体験したことを表現しているのではないかなと感じることがある。

見たことはなかなか表現できないが、体験したことはうまく表現しやすい。もちろん、見たことを表現する子もいるが、午前の授業でも表現することの大切さ、体験ということも十分に時間を確保しながらやっていくということも大切と感じた。教材をたくさん提示して、好きなものを使ってということもよいが、それをどう使うか工夫することで思考も膨らむ。また造形活動は、ただ作って終わりではなく、作ったこと、自分の思いを伝えることで完結するのではないかなと感じた。自分の気持ちを話して、納得して自信になってそこで初めて造形活動が完結する。幼児教育においても、そういう部分は発達段階においても大切と感じた。幼稚園の先生が行っているような支援が、小中学校でも充実していれば特別支援という言葉も、もしかしたらいらなくなるのかもしれない。そういう部分も感じさせられた授業であり、造形活動だった。




B-1 分科会

公開授業	
題材名	「想像の塔」【小3】
授業者	赤坂 巖男
学校名	函館市立青柳小学校

提言 1	
テーマ	「ビッグネームカード」【小5】
提言者	松田 恭子
学校名	函館市立中の沢小学校

提言 2	
テーマ	「色の列車をつくろう」美術専科ができること【中1】
提言者	齊藤 悦子
学校名	北斗市立上磯中学校

	「想像の塔」		
	函館市立青柳小学校 3年1組 36名 / 指導者 赤坂 厳 男		
	夢	つくる	人
	○	◎	

1 題材について

この題材では、建ててみたい想像した塔を、ペットボトルなどの空き容器を土台に紙粘土と様々な材料を使って制作させる。(日文 図画工作 3・4上 ハッピー小もの入れ～P36・37, ねん土マイトウン～P46・47 参照)

自分の思いに基づくイメージを、材料を工夫して取り扱い制作させることで、児童の発想・構想の力を育み、感性豊かな夢あふれる塔を表現させたいと考えている。また、鑑賞では、「想像の塔」と小さい「わたし」(日文 図画工作 3・4上 ここがお気に入り～P38・39 参照)を組み合わせることで、新たな目線で自分と友だちの作品の良さに気付かせたいと考えている。

2 児童の実態

図画工作に関しては、全体的に興味関心が高く、他教科で集中できていない児童でも、意欲的に造形活動に取り組むことが多い。

油粘土で立体作品を制作したときは、大胆な表現で広がりが見られたが、写生会で描いた風景画などの平面作品では、表現がコンパクトになりがちである。また、観察が不十分であったりていねいさが足りなかったりして、表現が雑になってしまう傾向も見られる。

3 題材の目標

自分が建ててみたい「想像の塔」のイメージを広げながら、紙粘土や空き容器などを組み合わせて、形や色、飾り方を工夫して、立体に表現させる。

4 指導計画

○育みたい資質や能力					
(関)「想像の塔」をイメージしたり立体に表したりすることを楽しもうとする姿勢					
(想)「想像の塔」のイメージを、粘土などでどのように立体にするか構想する力					
(技)「想像の塔」のイメージに合わせ、粘土などで工夫して立体に表す力					
(鑑)自分と友だちの作品の良さを見つけ、感じ取る力					
時数	学習活動・内容	評価基準			
		関心・意欲・態度	発想や構想の能力	想像的な技能	鑑賞の能力
6					
1	○学習課題について知る。 ◎テーマについてイメージして、形を発想する。 ・イメージスケッチをかく。	・イメージスケッチを自分なりにかこうとする。	・テーマにそって自分のイメージを形にしている。		
2	◎自分のイメージを立体に表すための材料を選択する。 ・設計図をかく。	・設計図をイメージに合わせてかこうとしている。	・自分なりの「想像の塔」を考えて絵や言葉で表している。		
3 4 本時 5	○材料を工夫しながら「想像の塔」をつくる。			・材料の特徴を生かしながら、工夫して表している。	

6	<p>■友だちと作品を見せ合いながら話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分と友だちの作品の良いところを見つける。 ・作者の思いを想像したり, 思いを語ってもらったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や友だちの作品に興味・関心を持って味わおうとしている。 			<ul style="list-style-type: none"> ・自分や友だちの作品の良さを見つけている。
---	--	--	--	--	---


※ ■言語活動, ◎共通事項に関連した内容

5 本時案 (4/6)

- **目標** (1) 「想像の塔」のイメージを広げながら, 形や色, 模様や飾りなどを工夫してつくる。
(2) 自分と友だちの表し方の違いや良さを感じ取って, 伝え合うことができる。

学 習 活 動 ■言語活動	○教師の働きかけ ◎共通事項	◆評価 ※支援
<ul style="list-style-type: none"> ●本時の学習内容を確認し, 学習の見通しを持つ。 ●本時のめあてを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習の見通しを持ち, 活動への意欲を高める。 ○本時のめあてを確認させる。 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>「想像の塔」をつくろう!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・くふうして表す。 形, 色, もよう, かざり ・友だちと伝え合う。 よいところ, アドバイス </div>		
<ul style="list-style-type: none"> ●工夫して制作する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分で考えた「想像の塔」のイメージについて問いかけ, 表現したいことを確認しながら活動できるよう助言する。 ◎形, 色, もよう, かざりなど表現の工夫について問いかけ, 児童自らがそのよさに気付くよう助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆自分の思いを大切にしながら制作している。 ※設計図は手元に置いて, 確認できるようにさせる。
<ul style="list-style-type: none"> ■随時途中作品を見合い, 説明や気づき, アドバイスを伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎友だちと互いの作品を見合いながら, 表現の工夫や思いを交流し, イメージやアイデアを広げられように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆作品の良さを話し合っている。
<ul style="list-style-type: none"> ●意見交流から思い付いたイメージやアイデアを基に, 表現を広げる。 		<ul style="list-style-type: none"> ◆意見交流を参考にして, 自分の思いを大切にしながら制作している。 <p>※制作しながらの意見交流をしやすいするため, グループは3~4名の構成とする。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ●本時の学習を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習を振り返らせ, 次時の活動へ意欲をつなげる。 	

【 小学校提言 分科会：B-1 育む造形 ～ 学びの気持ち 】

	「ビッグネームカード」		
	函館市立中の沢小学校 5年 / 指導者 松田 恭子		
	夢	つくる	人
		◎	○


1 題材について




- これは、自分の名前の文字を切り抜き、穴のあいた部分に色紙をはることで文字が着飾ったように見えるネームカード（名刺）づくりを行う題材である。文字の周りに自分の好きな物をつくってはるなど、装飾を楽しむこともできる。
- 子どもたちは、自分の「名前の由来」を調べたり、「好きな物事は何か」ふり返ることから活動を始めた。そして、色紙を思い思いの形に切り取り、組み合わせ方を考えて自分が好きな物をつくってはりながら表現活動を進めていった。
- 切り抜く前の文字を墨と筆（毛筆）で書いたり、カッターナイフを使って切り抜いたり、扱う用具を工夫し、子どもが、図画工作科においてそれぞれの用具を使うことの良いさを実感できる場を設けた。

2 題材の目標

切り抜いた名前に色紙で模様をつけたり、自分の名前に関係の深い物事や好きな物を発想し、想像力を働かせながらつくってはったりする活動の楽しさや面白さを味わうことができるようにする。

3 指導計画

○育みたい資質や能力 (関) つくりたいものに対する思いをもち、色や形の組み合わせを考えながらつくろうとする姿勢 (想) 自分の名前のイメージや好きな物事などからつくりたいものを発想する力 (技) 色や形の組み合わせ方など、表現方法を工夫しながら自分の思いに合ったネームカードをつくる力 (鑑) 表現方法を交流しながら互いの意図や特徴などをとらえ、それらを自分の表現に生かそうとする力				
時数 8	学習活動・内容 ■言語活動 ◎共通事項関連	評価 規 準		
		関心・意欲・ 態度	発想や構想の 能力	創造的な技能 鑑賞の能力
1	○参考作品を鑑賞する。 ○「自分発見カード」をかく。 ・自分の「名前の由来」を調べたり、「好きな物事」をふり返ったりしながら、「自分発見カード」にまとめる。	・提示された参考作品を見て、題材に対する興味をもとうとする。	・「自分発見カード」をかきながら、ネームカードに対する思いをひろげようとする。	
2・3	○名前を書いて、切り抜く。 ・墨と筆を使って半紙に自分の名前を書き、白画用紙に転写して切り抜く。	・自分の名前を毛筆で書いたり、カッターナイフで切り抜いたりする活動を通して、ネームカードに対する興味をひろげようとする。		・カッターナイフを適切に使い、毛筆で書いた文字のよさを生かしながら名前を切り抜くことができる。

4	<p>○名前に色紙をはる。</p> <p>・台紙になる色画用紙の上に名前を切り抜いた紙を置き、文字に色がついたように色紙をはっていく。</p> <p>◎表現活動に対するイメージをもち、形や色の組み合わせを考えながらつくる。</p>	<p>・自分のイメージに合ったネームカードをつくり出す活動を楽しもうとしている。</p>	<p>・ネームカードを楽しく飾ることのできる模様や物を想像しながらつくっている。</p>	<p>・自分の思いに合った色紙を選び、形や色の組み合わせを考えながらネームカードをつくることできる。</p>	<p>・色紙の組み合わせ方など、表現方法について交流しながらつくっている。</p>
5~7	<p>○好きな物をつくってはる。</p> <p>・名前の周りに、自分の好きな物を色紙で作りながらはっていく。</p> <p>■互いの表現のよさに気づき、自分の表現活動に生かすことができるように交流しながらつくる。</p>				
8	<p>○ネームカードを見せ合う。</p> <p>・自分の表現活動をふり返ったり、友達の名カードを見たりすることで、互いの表現の楽しさや面白さを感じ取る。</p> <p>■表現方法の工夫について、語り合いながら鑑賞する。</p>				<p>・表現方法の工夫について交流することで、互いの作品の楽しさや面白さを見つけている。</p>

4 実践の視点と経過

- ・ 題材に対する思いをふくらませることができるように、名前の由来を調べたり、自分の好きな物事をふり返ったりしながら、「自分発見カード」にまとめる場を設けた。
- ・ カッターナイフを使う場面では、安全に配慮し、扱い方に慣れることができるよう助言した。
- ・ 発想をひろげていくことができるように、一人一人の子どもたちの表現活動を共感的に受け止め、必要に応じて材料や用具を準備したり、表現方法について助言したりした。
- ・ 思うように発想をひろげることができなかったり、活動が停滞したりする子どもには、色や形の組み合わせ方や用具の扱い方について助言したり、活動の手がかりを見いだすことができるよう友達と語り合いながらつくることを促したりした。

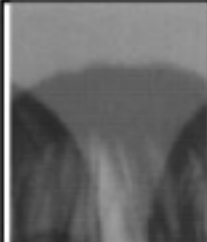
5 今後の課題とまとめ

- ・ 本題材は、ある程度手順を決めて行うことで、子どもが表現活動を行いやすい内容となった。
- ・ 特技、趣味、好きな○○、生まれた季節など、自分自身をふり返って「自分発見カード」をかくことは、表現活動における手だてとして活用することができ、有効な手段となった。また、自分の名前の由来を調べることで、親子のコミュニケーションにもつなげることができた。
- ・ 図画工作科における言語活動として、子どもの思いをどう引き出すのか考えさせられる題材となった。子どもが、自分の言葉で思いを語るようにするためには、教師の語りかけが大切である。今後も、友達や先生と思いを伝え合う活動を多くの場面で取り入れることで、一人一人の子どもが、自分の表現活動に自信をもって取り組んでいくことができるようにしたい。
- ・ 学級の人数が多く、十分な活動場所を確保することができず、子どもたちの表現活動がしづらい状況になってしまった。安全で伸び伸びとした活動ができるような場所を設定すべきであった。

【 中学校提言 分科会：B-1 育む造形 ～ 学びの気持ち 】

「色の列車をつくろう」～美術専科ができること～

北斗市立上磯中学校 1年 / 提言者 齊藤悦子

	夢	つくる	人
		◎	○

1 題材について

題材名「色の列車をつくろう」 (1年)

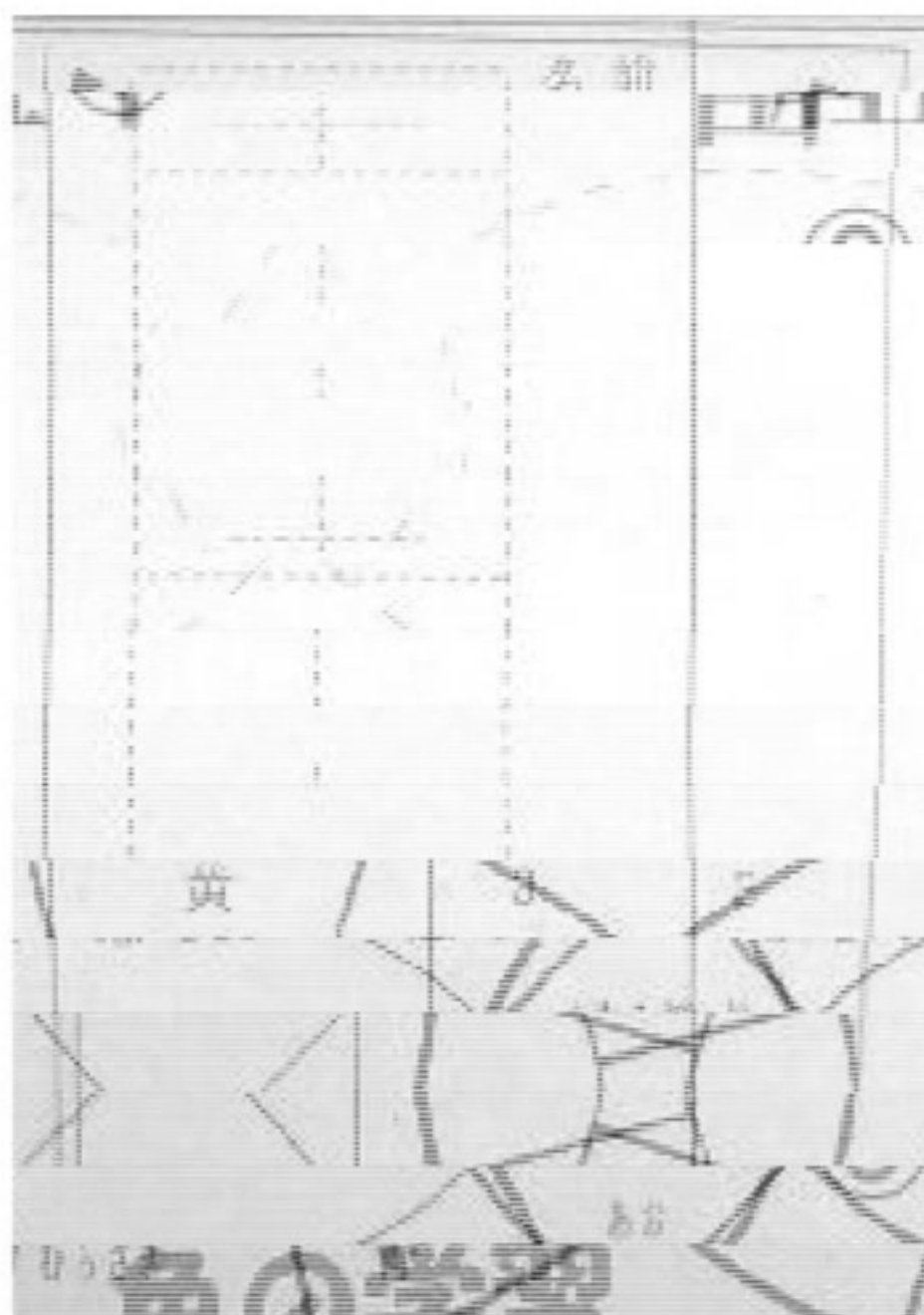
- ・この題材では、色の三要素をはじめとする色彩の基本的性質について理解させながら絵の具での着色が活動の主となる。
- ・道具の使い方、色の作り方を示すことで、制作過程でモチベーションを下げずに取り組めるようにした。
- ・後片づけ後の時間差や早く終わった場合に備え、「自分の顔」「レタリング」も「色の学習」の画用紙に取り入れた。

- 2 題材の目標 色の性質や配色についての知識を学び、絵の具の特性に触れながら、道具を適切にあつかい、美しく着色させる。

3 指導計画

○育みたい資質や能力					
(関) 身の回りの色に興味をもち、色の性質や感情を理解しようとする。					
(技) 色の作り方を身に付け、制作の順序などを考え、見通しを持ちながら表現する。					
(鑑) 友だちの作品の良さや美しさに気づき、個の作品から集団の作品の良さを感じ取り見方を広げる。					
時数	学習活動・内容	評価規準			
		関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
5					
1	○色の三要素を知る。 ・色彩の基本的性質について理解する。 ◎色を発想する。	・色のおもしろさを味わおうとする。			
2～4	◎着色をする ・道具のあつかい方を確認する。 ■色の作り方について友だちの互いの意見を聞き合う。(言) ・できあがりを見てもらう。	・色の三要素を完成させようとする。 ・友だちの色の作り方に興味・関心をもっている。		・色を無駄なく作るために道具をあつかい方に留意して表している。	

5	○鑑賞する。 ・他の作品から色づくりや着色の美しさを感じ取る。 ◎色彩の特徴	・自分や友だちの作品の美しさに関心をもって見たり、話したりしている。			・個の作品から集団の作品の良さを感じ取り見方を広げている。
---	--	------------------------------------	--	--	-------------------------------



①は、レタリングの練習後自分の名前を明朝体でかく。

②は、点線の円の大きさをめやすに、身分証明書を見ながら自分の顔を描く。

③は、下の部分は色のためしぬりに使用し、最後にカットする。

展示の時は、列車のように学級の仲間の作品を後ろにはってつなげていく。

4 実践の視点と経過

「平成21年度全国中学校美術連盟 全国公立中学校美術科教員配置状況調査 集計」において、北海道全学校数657校の内、専任教諭配置校は、192校で28.9%であった。未配置校は、75校で11.4%であった。配置状況不明校は、390校であった。

「中学校美術ネット」によると、全国的に美術の授業時間数の減少に伴って、美術科教員が各校一人配置、複数教科の兼務など美術科教員が減少しており、地域の研究会も衰退するなど、様々な問題が各地域で増加・深刻化し、美術科教員は孤立し、美術の授業改善のための時間と機会が確実に減ってきている。また、約20年間で美術科教員数は2/3にまで減少。教科別にみても美術科が一番教員数が減少している。美術科教員の年齢構成は、45歳前後を境目に急激に教員が減少、美術が一番若い先生が少ない教科であり、一番平均年齢が高い教科と報告されている。

実際、函館・渡島の2015年度の中学校美術科教員配置状況を調べてみると、専任教諭配置校は、函館市で27校の内14校で51%である。渡島は、22校の内9校で40%である。渡島の西地区の4町で、専任教諭が0%である。渡島北地区で中学校が5校あるが、専任教諭いる中学校は1校で、初任者である。

専任教諭が配置されていない学校は、非常勤講師を迎えることができれば幸運な方である。ほとんどが他教科の教員が兼務している。専任教諭が地域に、または近くの中学校にいればいろんな事を相談したりできるであろう。しかし、函館・渡島でも難しい状況にあるのが現状である。実際、新採用の美術科教員がほとんどおらず、美術科教員の年齢構成は、45歳前後を境目に急激に教員が減少しているのは、函館・渡島も同じである。

専任教諭がいない渡島の中学校に以下のアンケートをとった。

●「初めて美術科を担当した時、困ったものは何か」

- ①年間指導計画など委員会への提出書類 ②教材の内容 ③教材の準備・購買
④各教材のアイディアプリント ⑤教科書の利用 ⑥毎時間の授業の進め方
⑦作品へのアドバイス ⑧作品の評価 ⑨鑑賞授業 ⑩テスト作成 ⑪4視点の評価
困ったという解答が多かったのは、③・④・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪であった。

●「①～⑪の内容について今までどのようにしてきましたか。」

知り合いの美術科に頼んだ人が少数。ほとんどが前任者からの引継であるが、その前任者も専任教諭ではなくなっている。そして、全員が独学であると答えた。

●「美術科専科に聞いてみたい事や、資料でほしいもの、教材の進め方、作品の制作手順など協力してほしいことはありますか。」

- ・作品の制作手順や作品の評価する時の視点のポイントなど、まとめた物があれば助かると思う。
- ・以前の担当者が美術としての取り組みがされていなかったため、「これでいいや」という気持ちでなかなか作業ができません。生徒が夢中になって取り組める教材や授業の展開の工夫を知りたい。また、鑑賞の授業も困っています。
- ・負担です。美術は好きですが、小さい規模の学校でいろいろな業務が多岐にわたっている。専任教諭の増加を道教委へ提示して下さると有り難いです。
- ・「専任の教諭以外に教科を任せられる」という制度自体が間違っていると思うので、その辺を提言してほしい。
- ・どんな授業をされているのか、テスト作成や評価などについて聞いてみたい。数年やっているのになんとなく流れはつかめましたが、自信をもってやれている訳ではない。もっと子どもに色々な事を教えてあげられたらと思っています。

今後、函館・渡島で専任教諭が大幅に増加することは期待できないと思われる。今ある美術研究会が専任教諭が、美術科を兼務している先生方に資料提供する場を大きく発信することで、地域を越えて繋がりが学び合い、そしてそれがさらに子どもたちのよりよい学びへと繋がっていくと考える。自分の経験から専任教諭がいない学校の先生方の悩みや困っていることを考え、美術科専任教諭としてお手伝いできることを実践してみようと思った。

この春、同僚の音楽科の教諭が小規模の中学校に赴任され、美術科を全学年受け持つこととなり、私が、授業づくりを協力させてもらえることとなった。本人がすぐほしいものは、1学期各学年、何を教え、どんな手順でものづくりをするのかという実践内容であった。4月から授業が始まるので、春休み中に、教材の準備・購買、各教材のアイディアプリント、教科書の利用、4月～5月くらいまでの授業の進め方をレクチャーした。6月には、作品へのアドバイス・作品の評価・鑑賞授業の資料・テスト

作成・4観点の評価などを話し合った。生徒の作品も途中見させていただいた。その先生は、授業をする前に自分で練習していた。その努力のかいあって、生徒へのアドバイスも自信を持って行うことができたようである。また、今年度より本格的な美術の授業を受けて、生徒も生き生きと授業を受けていると聞いた。1学期のめどもたち、一安心している様子が伺える。次回はこの夏休み中に2学期の打合せを持つことになっている。

5 今後の課題とまとめ

本研究の「育む造形 学びの気持ち」の視点に関わって、初めて美術科を受け持つ先生が「これならやれそう」と思えることを重視して授業を構築し提案した。しかし、学校により用意できる道具や材料がなかったり予算の関係や生徒の特質も考えて教材を用意しなければならないこともわかった。新学期が始まる前に、相談にのったり準備を整える助言の必要性を感じた。また、アンケートに協力してくれた先生方で、協力要請のあった学校にも同じように関わっていきたいと考えている。

美術研究会としては、困っている先生方が最も近くにいる専任教諭に相談できたり美術研究会が行われる日程の案内などを配布して作品交流やアドバイスの機会を設けるなどしていきたい。生きた授業をするためには、やはり指導者が直接見たり聞いたりすることが一番伝わるはずである。

専任教諭が増えないことに嘆いているよりは、私たちが持っている資料やアイデアをどんどん渡し、協力することで、生徒が美術の授業を楽しみにしてくれたり、つくる喜びを味わえたら最高だと思う。

<p>B-1 「育む造形～学びの気持ち分科会」</p>	<p>助言者 橋本 忠和（北海道教育大函館校教授） 司会者 岩館 こずえ（函館市立赤川中学校） 記録者 加賀 幸来（函館市立深堀小学校）</p>
<p>○分科会テーマ 「授業づくりを研修・研鑽しよう」 ・討議の柱 教師の学びと授業づくりを軸として、教科書題材や教材開発などの実践上の課題や工夫、目標の実現状況を捉える評価や指導法等、授業力の高め方などについて考える。</p>	

1 公開授業：「想像の塔」授業者・赤坂巖男(函館市立青柳小学校)

①授業者・赤坂巖男より

○授業の構想・工夫について

- ・想像の塔は、秀学社から出版されている発想のトレーニングを目的とした中学校教材『イメージの博物館（発想の題材集）』からインスピレーションをうけ構想した。
- ・限られた年間授業時数の中で効果的に教科書の内容を指導し、力をつけていくのは至難の業と感じ、単元3つを組み合わせる今回の題材を実践しようと試みた。技能面では、「ハッピー小もの入れ」「ねん土マイタウン」、鑑賞面では、「ここがお気に入り」を意識し、題材を工夫した。
- ・3つの課題を別に指導すると14～15時間かかるが、今回の題材では6～10時間で1つの題材に集中して行うことができる。

○反省について

- ・トレーニングされておらず、グループ発表の部分、制作しながら児童のカードに書き込む部分に困難があった。
- ・伝え合う場面、お互いのよさを認め合う場面。友達の鑑賞用紙の活用に困難があった。
- ・鑑賞カードの書き込みもできず、グループ発表や、カード記入にもこれから課題が残る。

※題材の工夫や言語活動についてよい方法を聞きたい。

<質疑応答・意見感想・その他＝Q&A>

Q1（厚沢部小）

- ・紙粘土を使用する上での準備の周到さが参考になった。（おしぼり保存袋）
- ・始業時の挨拶をしない児童や、聞こえにくい発表でもやり過ごす児童、カード記入時、名前を書くという指示が通らず、書いていないなどの児童がいたが、普段の様子について知りたい。

A1（赤坂）

- ・今年1学級に統合された。普段は落ち着きがないが、今日は緊張のため静かで、発表や活動も活発ではなかった。本校でも伝え合う部分の研究を進めているが、まだ話を落ち着いて聞ける状態ではなく、グループ討議や全体でも訓練中で課題となっている。

（厚沢部小）

- ・これから関係性が構築されていくのであれば、鑑賞やアドバイスなど立ち入ったものはまだ難しいと理解した。

Q2（室蘭小）

ミニチュアの写真をぜひ使用してみたい。

今日の題材について、細かい部分で色々な条件・制約があれば聞きたい。



制作風景



グループ発表



全体発表



過去・児童作品例

- ・ペットボトルをいくつまで使用していいのか。縦使用が多いが、横はいいのか。
- ・ねん土の混色は、マーブルやしっかり混色もいるが、どちらでもいいのか。

A 2

- ・材料は、ペットボトルを基本とするが、その他の容器も可。(その他の容器も実際に集めた。過去の参考例としても紹介。) 縦に使う制約もしていないが、使用状況を見ると 500 ミリのペットボトルが多かったため、中心に来るのは、1.5 リットルや2リットルが理想だと伝えた。ペットボトルの横使用がいなかったのは、「塔は高い」ということを伝えたためではないか。
- ・カラー粘土は、直接絵の具をチューブで入れるよう指導した。マーブルにしたり、しっかり混色している児童もいたが、混色方法がわからずマーブルになった子はなく、各自自由に行っていたと思う。
- ・飾りは、主に女子がスパンコールやビーズを使用したがるので、自分のイメージに近づくよう、効果的に使用することを指導した。

Q 3 (岩見沢中央小)

- ・最初の設計図と実際の作品に違いのある児童がいたので問うと、材料が不足し、こうなったと言っていた。それは教師が助言をしたのか、児童自身が材料の制約の中で作り変えたのか尋ねたい。
- ・なぜ3年間この題材を使っているのか理由を聞きたい。児童の変容が大きく見られた作品なのか、教師の題材に対する思いを聞きたい。

A 3

- ・児童が自分のデザインを変更した理由は、おそらく、教師が空き箱を使用すると強度が弱くなると全体指導したため、材料の性質上実現するのは困難と判断したからだと思う。もう少し時間を確保し、深く話せたら彼の方向性も定まったのではないかと反省した。
- ・3年間この題材を使用している理由は、児童の変容が感じられたからではない。過去に、教師が返却した作品を目の前で児童に処分された経験から、自分の作品に愛着をもってほしいと感じたことにある。この作品は、自分自身を作品の中に入れて構想できるので、愛着が持てると感じた。実際鑑賞時も楽しそうで眼も輝いている。児童に直接確認していないが、心に響くものがあるように思う。

Q 4 (札幌伏見小)

- ・題材との出会わせ方はどうだったか？
- ・粘土を2種類(最初から色がついている粘土と混色して作る粘土)使用していたがその意図は？
- ・小さい自分は題材の中でどうやって登場させるのか？

A 4

- ・題材との出会わせ方は、特に意識してない。児童の実態として、写生会や理科の観察で、写生物をよく見て描くことが技術的に困難だったり、観察力が伴わなかったりするのにも、休み時間自由な発想で物事に取り組んでいるとき、主体的に楽しく活動できるということがある。その点で「想像」という題材で扱いたいと児童にも伝え、最初に見せたのが、中学校教材『イメージの博物館(発想の題材集)』だった。「みんながすごいお金持ちで実際に塔を作るとしたらどうする。」と話した。
- ・本来、混色していくという形で授業を進めていたが、今回は、水道の関係などにより、普段とは違った形で進めた。児童にはあらかじめ伝えていたが、実際行くと、用意した色と自分のイメージが合わず、残念な気持ちにさせてしまった児童も出て、反省している。
- ・児童には、「塔が完成したら、塔の前で記念撮影するが、どうやってする？」と伝えた。実際、作品が完成してからミニチュアを置く予定だったが、制作途中にミニチュアを取り入れることでイメージが広がっていくのではないかと考えた。さらによりイメージを膨らませたいと思い、早い段階で設計図の方にも小さな写真を貼った。

Q 5 (札幌北郷小)

- ・ミニチュアの自分がいることで、作品の中に行ってみたいという想像がしやすいことがいい。児童の思いが現れやすい手立てとしていい。
- ・3人ぐらいで活動していたが、グループ分けの意図はあるか。
- ・意見交流カードを活用している子どもが少なく感じたが、どのような意図で取り入れたか？作業の中断にもなり、方法も友達からのアドバイスを書くのか、班で書いてもらうのか伝わりにくかった。

A 5

- ・グループ編成は、仲が悪いわけでもなく、図工に関し能力的な差も特に感じられないので、出席番号順に機械的に行った。今回は機械的でよかった。
- ・意見交流カードは、どこまでできるか不安だった。予想外に発表がなく、慣れていないことを大勢の前でやるとやはり難しい。発表も含め、これからの授業で伝え合い認め合う場面をより作っていくのが課題だと再確認した。

司会者（岩館）

- ・言語活動について、美術でも取り入れようとしたとき、苦労したという似た経験はあるか。
- ・今回のようなカードの有効な活用方法など、それ以外でも意見をもとめる。

Q 6（Y氏）

- ・言語活動ありきではなく、言語活動が思想を広げ、次につなげることを大切にしなければ、美術の言語活動にならない。形に捕らわれず、3人の児童のささやき合う声を取り出す手立てを生み出す力として、言語活動を進めていくのが教師側に大切。
- ・今回の授業では、児童に素材（紙粘土）を与え、色々な色を生み出して発想していくのか？ペットボトルと紙粘土での造形的な面白さに着目して使用するのか。曖昧だった。
- ・3年生の発達段階を考慮し、授業の焦点を絞る必要がある。どの児童も使用している素材は同じだったが、児童が見つけれないものは教師側で用意し、それを使用して、児童が試行錯誤し「こんなのできたよ。」という授業にもなるのではないか。授業づくりをする上で「材料経験」なのか「こどもということ」なのかを考えていく必要がある。

Q 7（札幌市内・小）

- ・言語活動は、書くことだけではなく、自分や仲間が発想や構想の能力を後押しするものにならないといけないのではないか。授業検証の知見は、3年生の発達段階を考えた上で、本当に必要な要素が一貫して、児童の発想や構想の能力を後押しするものになっていたかどうかではないか。
- ・授業改善のポイントは、児童が「次はこうしてみようかな」と思ったことではないか。最後、1時間の造形活動を振り返り、結果を発表し合い、児童らが納得した中から出てきたつぶやきでも十分、児童のプラスになるのではないか。トレーニングではなく、書き言葉と話し言葉の質の違いを考え、よりその学年の心の発達段階にあった言語活動を考えることが重要なのではないか。
- ・題材の出会わせ方は、教師のイメージの中に児童を押し込めるのではなく、教師のきっかけにより活動したくなる外的なものにすることが大事なのではないか。例えば、今回の題材は「自分の夢とか願い」をペットボトルという主材で表現することだと思うので、児童の夢や願いを膨らませるような出会わせ方が大事だと思う。参考例を見せるということに限らず、たくさんの材料を集め、「この材料を使って、夢の塔を作ろうと思うのさ。」と働きかけるなど出会わせ方にも工夫が必要。
- ・用具は、低学年でも扱いやすいリサイクルばさみ等がセットされていたら、高さだけではなく、広がりという面でも広がったのではないか。
- ・話し合いでは、「ぼくだったらこんな塔を作ってみたい」を言語活動とし、その願いに基づいて考えたとしたら、友達作品を見てアイデアも広がり、児童の中で変容も出てくるのではないだろうか。どのような力を働かせたいかということも含め、出会わせ方も大事なポイントだと思う。
- ・今回は、実際にある題材「想像の塔」から始まったが、色々な膨らませ方が考えられる。今日の授業で、改善策や、言語活動で苦労した点などを含め、意見を求める。（司会者）

Q 8（札幌伏見小）

- ・言語活動の部分だが、カードがなくても言語活動が成立していたのではないだろうか。向かい合う場の構成が、相手の手元を見たりできる支援として有効だったため、書く必要がなかったのではないか。造形活動を突き詰めると、おのずと言語活動が付いてくるのかもしれない。
- ・つぶやきなどでも十分意思の疎通が図れるというのも確か。（司会者）

助言者（橋本 忠和）

- ・授業の中で、「ぼくの色はこれでさ〜」と隣の児童にずっと話しかけている場面があった。話しかけられた児童は「そんな色はもっときれいにすればいいんだ…」「ぼくは、これでいい」とつぶやいて

- いた。これがまさに言語活動であり、場の構成（三角形や四角形）が生きている証拠だといえる。
- ・意見交流カードは、記入するとき周りを見ている児童もいたので、作品を意識してみる手立てになっていたと思われるが、量、やらせ方、つぶやきをどう拾うかが不足していたかもしれない。ワークシートの書き方として、各自でテーマ（色づくり名人、つまんだりひっつけたりする名人、形名人など）をもっていたとしたら、具体的に発表できかもしれない。
 - ・スペースタワーと言いながら、構想図ではコロニーになっていた児童がいた。彼はおそらく、この中に入りたかったのだろう。ペットボトルを二つに切って、中にコロニーを作ったらどのような授業が展開されただろう。児童が授業づくりのヒントになる。

2 提言1・齊藤悦子より「色の列車をつくろう」～美術専科にできること～（北斗市立上磯中学校）

○美術科の状況

- ・平成21年度全国公立中学校配置状況での美術専科の教員は、道内に28.9%で、なぜか北海道のみ657校中、390校の配置状況がわからない事態。（6年前調査により現在は増加していることが予想される）再調査すると約20年間で美術科教員は、3分の2にまで減少しており、45歳前後を境に美術科教員がいないという現状がわかった。渡島2003年の教職員住所録では、当時専科が15人いたが現在は9人、6人減という12年間で5分の3に減少している現状。
- ・専科不在の学校で、美術科の授業は成立するのか疑問を持ち、複数兼務又は、非常勤講師がいる学校の近隣で9校（長万部地区）に簡単なアンケートを配布した。現状は、音楽兼務5人国語科2人数学科1人で、引継ぎをすると前任者も専科外のほぼ独学で授業を実施していた。アンケートからも解決したい思いが伝わり、専科外を持たされたとき似た経験をしていたので、共感できた。また「年間を通して教材がほしい」という思いを酌み、実践しようと思った。

○教える喜びは作る喜び

- ・不安を抱いたまま授業をしないよう、「年間を通しての教材」を構想したが、混乱を防ぐため4・5月の授業内容から、教材専科としてアドバイスした。1年生は、オリエンテーリング終了後「手のスケッチ」を提案したが、形をとらえるのに難がある実態がわかり、手の構造や手を描く指導法も伝えた結果、改善され、専科外の先生や生徒達からも喜ばれた。
- ・色相環の指導では、画用紙に枠を印刷し、展示法は列車型にするなど、指導課程から細かく伝え、初展示が実現した。他学年からも参考にしたいと声が上がった。
- ・2年生の幾何学模様の構成では、教師が色鉛筆で練習した後、生徒に指導することなどを伝えた。

○授業に合った教材さがし

- ・3年生は、刃物の使用や立体作品が未経験という実態があり、「おめん制作」を提案した。下描きやデザインは任せ、ビーズなどを使用させて指導するよう伝えると、自分の好きなものを取り入れた作品を仕上げることができた。

○美術科教師にできること

- ・美術科教員が兼務し、専科不在の学校が増加すると、掲示物がない寂しい校舎になったり、美術科に対し面白味を感じない生徒や保護者が増加したり、さらにはニーズが問われるのではないかな。

○未来を育む造形教育の活動として

- ・兼務している専科外の先生方を誘い込んで活動する。アンケート9人中4人が美術の教材教授を要望、2学期から過去の例同様に協力する予定である。
- ・1人で指導することで偏りが出ぬよう、美術科研究会中学校教員の繋がりを深め、美術の魅力や生徒の美術が好きという思いを深められるよう、発信していきたい。



生徒作品



生徒作品

- ・このような未来を育む造形教育へつながる活動を渡島以外にしていれば、実践例を教えてください。(司会者)
- ・自身、免許外教員と組み、同じ教材で授業を行うとき、教材をどのようにレクチャーしたらよいかと苦勞した経験がある。似た経験や実践例などを聞きたい。

<質疑応答・意見感想・その他=Q&A>

Q1 (岩見沢小)

- ・空知でも、同じような状態がある。各校の少人数化で美術教師が美術を持たず、仲間の大半が特別支援学級をもっている。音楽や技術教師が美術をもち、免許を持っているのに教えられない。年に1度、美術をもっている教員に積極的に声をかけ、研修会参加を要請しているが、上手いいかないのが現状。
- ・免許外教員の悩みは、教育課程や授業のネタや評価などだが、美術科教師は、教科指導の根本である「作り出す喜び」を伝えたいと思う。免許外教師にただ作ればいいのではないことをいかに伝えていける場を設定できるかで悩んでいる。他の管内でもよい実践があったら聞きたい。
- ・今日の全体講演の手前でやっとやってもらっている状態が現実かもしれない。(司会者)

(岩見沢小)

A1 拠点校でもネタがなく、美術科教員は違和感をもっている。現場では反対の中、結局、統廃合せざるを得ないと行政側も悩んでいる。

Q2 他の地域で、何か問題はあるか。(司会者)

(青森・特別支援小)

A1 中学部生徒は、全校3人なので、美術は理科教師が行い、専科はいない。特別支援でも困っている教師が多い。

A2 (十勝小, O氏)

- ・中学校教員は、ほとんど特別支援をもっている。大規模校でも美術兼特別支援の教員が大半で、専科のみは少ない。

Q3 サークル等の活動で、免許外教員のための講習会などを開催している方はいるか。(司会者)

(齊藤悦子)

A1 過去、市内で教えてほしいと要求されたことはあったが、深刻に受け止めておらず、渡島に赴任し、少なさを実感した。また、9校にアンケートを実施し、作品作りや作品交流を促し、初めて全員が「実は、免許外で3年間の指導計画に悩んでいる。」という実態を把握できたことから、自身からのヘルプは難しいと感じる。美術研究会の方にも協力を求めながら、継続したい。

- ・教師が自信をもって指導すると、生徒も美術が楽しいと感じるので、教師の働きかけは大事だ。
- ・函館市の約6校が、3校で1校ずつに統合され、2校になる。美術教員もまた余るが、距離を考えると非常勤が持てない場合もある。すると免許外教員がやり続けなければならないのが現状だろう。3・4年後、仕事隊形が変化していくのではないかと思う。
- ・渡島と函館で冬期、小・中合同作品展を開催しているが、免許外教員の学校はあまり出品しない。平面作品が多いが、前回渡島の作品が10年ぶりに出品されており、こちらから働きかけると出品を促せるのではないかと少し期待している。他の管内でも似た活動があれば、参考にしたかった。

(司会者)

- ・現実問題、作らせるだけ、形にするだけが精一杯な悲しい現状がある。全体講演で紹介された解説付き展示は、制作者の意図が観覧者にも伝わるという利点はあるが、中3の生徒を紹介された作文を書くレベルまで指導する時間はどの位あるか、表現力、文章力を美術で磨くわけにはいかず、難しい。

Q4 (Y氏)

- ・行政の問題になると難しいので、実際その中で何とかするしかない。実技研修だけではなく、日常的に授業の中で教材を使い、活性化や仲間づくりに繋げていくことが大事ではないか。少人数でも集える場があるので、積極的に使用し、動くことが大事。

3 提言2・松田恭子より「ビックネームカード」(函館市立中の沢小学校)

○授業の構想・工夫について

- ・ビックネームカードは、教材や資料からヒントを得て、それにアイデアを盛り込み、深化させ実践。
- ・自分をアピール・紹介できる大きな名刺を題材にしたいと構想した。切り抜いた自分の名前に色紙で模様をつけ、名前に関係深いものごとや好きなものを発想し、想像力を高めさせながら作ったり貼ったりする活動の楽しみや面白さを味わうことができるよう考えた。毛筆の文字を生かし、カッターを使用しながら、扱う用具にも工夫した。



○授業の流れ

- ・1時間目…自分発見カード(名前の由来, 生まれた季節, 星座, 血液型, 好きな色, スポーツ, 遊び, 食べ物, アニメ, 特技趣味, マイブームなど, 自分はこういう人間だというものを)を思い出せる限り書く。理由は、制作のきっかけづくりや、表現活動の手がかりになるのではないかと思ったこと。教師自作の例を示し、「大きな名刺ができるとおもしろいね。と呼びかけた。
- ・2, 3時間目…名前を毛筆で書き切り抜く。(難しい漢字は平仮名, カタカナに変換可) 数枚の毛筆作品から1つ選択し, 白画用紙に文字を転写した後, カッターで切り抜き, 好きな画用紙の上に貼る。(転写に難がある場合は, 鉛筆で輪郭をなぞり, 裏転写する方法を指導) カッターの安全な使用法や技術(刃を直角にすると紙が痛まない。)と指導。
- ・4, 5時間目…名前の文字を飾ったり, 周囲に好きな形を切り抜いて飾る。
- ・6, 7時間目…自分はこんな人間だという絵柄を工夫して作る。
- ・完成したネームカードを学年で見せ合い, 気付きをメモして相手に伝えたり, 自分のクラスで交換したり, 発見を発表したりした。交流時「これどうやって作ったの?」等の声が聞こえ, お互いを知る良い機会になったのではないかと思う。



○反省・感想について

- ・この題材は、手順に沿って制作するので、作業の不得意な児童にも見通しを立てやすかったと思う。
 - ・自分自身を振り返り、発見カードを書くことで、特技や趣味、好きなものや生まれた季節など、表現活動の手がかりとして意欲を持てたのではないかと思う。
 - ・自分の名前の由来を家族に聞いて作るという制作過程が、親子のコミュニケーションにも繋がったのではないかと思う。
 - ・自分の好きなものを制作するだけでなく、何をどう作ればよいか迷っている児童は、「〇〇君同じの作ってたよ。」と友達の活動をヒントに語り合いながら、楽しく自分の活動につなげていた。
 - ・学級が大人数なので、机や椅子を避け、広い場所でのびのび作業をさせるとよかったと反省した。
- ※自分の思いを自分の言葉で伝え合う活動をするには、教師の働きかけが重要だと感じた。これからも、友達や教師と思いや願いを伝える場を取り入れ、児童自身の活動に自信をもって取り組めるよう考えていきたい。児童作品を見て、来場者の方も改善法などアイデアを聞きたい。

<質疑応答・意見感想・その他=Q&A>

Q1 (札幌塔南小)

作品の仕上がりが丁寧で、興味関心・意欲の高さが覗える。同じようにやってみたいと感じた。

- ・上の紙を白にした理由はなぜか。他の色も試し、一番生える色でもよかったのではないか。

A1 (松田恭子)

- ・悩んだが、飾りが生える色は、白だと感じた。別の個所で児童が望んだ色画用紙を使用しているし、周囲の飾りでも十分児童が自分だとわかると思った。

司会者(岩館こずえ)

- ・他に文字を使った題材，あるいは文字教材の悩みなど意見を求める。

Q 2 (札幌伏見小)

- ・画用紙の大きさを机に収まるよう半分にすると，授業時数の節約になるのではないかと思った。自分は名前で，好きなものを表現するという題材を実践したが，人により絵にしにくい名前もあり，難しかった。ピックネームカードは，名刺という部分でとても表現的でよい。
- ・名刺をスキャナなどで縮小し，児童に配布してもよいのではないか。

助言者 (橋本 忠和)

- ・「1年間の思い出」という題で卒業制作するとしたら面白い。来校した保護者もめくって喜ぶと思う。短時間の題材として，自分の好きな写真や絵を使用しコラージュしたりもできそうで，非常に広がりのあるよい教材だ。

4 助言者 (橋本 忠和) より

○発表者・分科会参加者への助言

- ・想像の塔で，^{※1} 21世紀型学力を考えると，問題解決能力は，教師からペットボトルを与えられ表現しようとしたり，組み合わせ解決しようとしたりする力。発見力は，見つける・気付く力で，主題を築くとき知らずにやっている。思考力は，あの小さい人形 (自分自身) を使用し，メタ認知 (振り返り) を入れたこと。美術を言語表現で例えると，バーバルコミュニケーション+ノンバーバルコミュニケーションに代わる有効な手段として，言語以外の作品で伝えることではないか。この人形 (自分自身) は，美術で本来不必要な言語を強引に使用しなければいけない時，児童が友達と関わる中でノンバーバルコミュニケーションを伝え，広げられるものではないか。

この人形を表現活動のきっかけとして作品制作しようと考えた時，児童は「実は制作中にこんな物語が生まれて変更した。」と物語に基づいた説明や制作過程，表現の説明ができるのではないだろうか。

この人形1つで，交流が活発化する可能性があるのではないか。

- ^{※1} 21世紀型学力・能力 (①基礎力 (情報に関する基礎的な力) ②思考力 ③行動力) 次回の指導要領では，②を重視していくと明言。②は，問題解決能力，発見力 (見つける気付く) を思考力で育てると記載。

- ・提言Bピックネームカードは，物凄くメッセージ性が強く，色々アレンジできそうで，教科書題材を飛び越えた教材開発だと思う。台紙を白にして正解だと思うが，そういう段階でビジュアルシンキングストラクチャーVTS (俗にいう対話的学習における教師の問いかけ) という手法が参考になる。VTSは，教師の発問が3つある。①どんなできごとができていますか？②それはどこからわかるか？③もっと発見ないか？VTSは，本来教師の言葉がけだが，この手法に基づき児童が説明すると，例えばめくる前に「私の作品は，どんなできごとができていますか。」と問いかけ，質問し合い，最後めくって納得，というような友達に説明するときにもつかえる。言語活動として，子ども達がやりとりをした後，教師が表現には多様さがあり，色々なやり方，標識，広さがあり全て許される自由な世界だということを示していくとよい。発表時，友達からアドバイスとして反対意見がでたとしても，自分と友達の感じ方には違いがあることを知ることができる。ただし，人間関係が構築されていないと傷つく児童もいるので，注意が必要。
- ・ピックになると床で作りたがるが，カッターの使用に関して教師がおさえればOKだと思う。
- ・提言Aの12環色の色列車は，掲示もでき，取り組みやすそうだ。もう1つ工夫例としてサマー，スプリング，ウインター，オータムでカラーを考えさせ「あなたの列車は何カラー？フォーシーズン列車」などもできそうだ。授業の中で人間の顔はイエローとブルーに分かれており，服選びのとき参考になるという話をすると，児童が絵を描くときに「おれの顔はどっちだろう」と考えられたり，デザインの色は服選びなどでも役立つことがわかる。



児童作品例

○分科会全体を通じてのまとめ

- ・親として不安なことは、自分の子が、作品も含めきちんと評価してくれるかということ。教師自身も「きちんと評価できるか」と不安ではないか。評価をするため、例えば、中学校に求められる色・色彩とは、色が持つ感情、最大の目的は「主題を見つけて」だが、小学校では、色づくり、自分の今の色を墨汁でやろうなどの取り組みがある。教師は、果たして「自分を見つめること」を見抜く力、形にする力があるのか不安があるだろう。
 - ・金沢では、行政の取り組みが凄く、「21世紀美術館」、「学芸、芸術家、工芸家を育てる村」の運営、能や俳句を統括する組織が確立され、赤レンガ倉庫を24時間アーティストに貸し放題、絶えず使用中の状態にある。実際、金沢では芸術大学なども各地そういう風潮ができてきている。
 - ・福井県には、実際に教育委員や教員が観光課の教育委員会と連携し、行政の教育面で「美術のアートキャンプ」などを企画している。
 - ・ある拠点校の方がアート教育コーディネーター、芸術コーディネーター化して活動することが必要ではないかと論文を書き、実践している。
 - ・姫路市では、作品展の賞を左右する重鎮という方がいるが、引退となった時、後続の新任が約200人救い上げないと将来的に大変ということに気づき、団塊世代が中心になり自主研を立ち上げた。最初は、プロがやっているが数年たつと、次世代が「わたしがやる」と言い出す。私も、この地域で数年間役目を果たしていない大学の存在に着目し、昨年度から月1、2回僕の研究室の隣にある演習室を自由に開放し、勉強会を行っている。次世代にやる気を起させる環境づくりが大切。去年からやっとそういう動きができてきているので、大学がお役にたてればと思う。ぜひ、使ってください。
- 司会者（岩館こずえ）
- ・最後生活の中の美術ということで締めくくったが、本日出された意見（作品との出会わせ方、広げ方、言語活動）などを基にさらに研究を進めていきたい。






C-1 分科会

公開授業	
題材名	「しかべ・アース・アート～人がつながるアートの空間」 【中3】
授業者	藤本 大介
学校名	鹿部町立鹿部中学校

提言 1	
テーマ	「母校の歴史に名を刻め」のその後【中3】
提言者	櫻井 純
学校名	函館市立的場中学校

提言 2	
テーマ	「表現にこめた思い」【小6】
提言者	中川 治
学校名	札幌市立本郷小学校

【 中学校授業 分科会：C-1 ひろがる造形～つながる気持ち 】

	「しかべ・アース・アート」～人がつながるアートの空間		
	鹿部町立鹿部中学校 3年A組 26名 / 指導者 藤本 大介		
	夢	つくる	人
○	○	◎	

1 題材について

彫刻家のイサム・ノグチ氏は、古墳や古代遺跡、日本庭園などから着想を得て、「地球」を彫刻の素材とした表現活動（通称「アース・アート」）を追求していた。このアース・アートの定義は、都市空間の一角が、「美的な観点から総合的にプロデュースされた空間」を創る表現活動とされている。

イサム・ノグチ氏は、美術（彫刻）作品を、広く市民の触れあう場所、すなわち一般に知られる「公園」をアース・アートの題材として取り扱った。市民や子供たちが集い、遊び場になることで設定された空間が芸術作品として完成することを目指した。その完成形の一つが札幌市のモエレ沼公園である。

本題材は、イサム・ノグチ氏の表現活動（特にモエレ沼公園）から着想を得て授業を構成した。題材名を「しかべ・アース・アート」と銘打ち、ノグチ氏が提唱するアース・アートの意味や目的を踏まえた上で、生徒が、自分達の住む町鹿部町を舞台に、人々が集い楽しめる空間を考案し、作品（縮尺模型）として制作することを活動の中心とした。そして制作におけるテーマや工夫した点などを全体に提案（プレゼンテーション）することを、本時案として設定した。

今回の研究実践テーマの一つ「ひろがる造形～つながる気持ち」に関連し、町内の小学校、そして本校の中学校から公園の具体的なアイデアをアンケート形式で公募し、それを受けて公園の具体的なテーマ、スペース、遊具などの構想を話し合いながら深めてきた。また、鹿部町役場の地域観光科の担当者との連携し、本題材を「鹿部町町おこし運動」と関連させ、町を活性化させるための中学生からの提案という形で進めてきた。そのため、本時には、地域行政の方面からの助言を取り入れる場面を設定した。

このように、地域や、人との「つながり」、そしてそこから自分たちの発想を「ひろげる」ことを重点に、今回の授業構成を行った。

2 生徒の実態

小学校から1学級の構成で進級・進学を続け、互いの事を尊重し理解し合っている学級の雰囲気を感じられる。鹿部町に愛着があり、町内に新しい「集いの空間」を作ることに関しては、興味関心が高い。美術における制作意欲も総じて高く、イメージを摺り合わせる話し合い活動の段階から、熱心に取り組んで来た。本時案に関わっての既習事項については、考えの根拠を基に自分の考えを伝える「発表」の部分で、他教科（国語科など）でも重点をおいて取り組んできている。

3 題材の目標

自分たちが住む町において、人々が集い楽しめるような公園のデザインを、地域や人とのつながりの中で考え、様々な材料で作品を工夫して作ることができる。

4 指導計画

○育みたい資質や能力					
(関) 「アースアート」の意味や目的を理解し、意欲的に公園デザインの構想に取り組む姿勢					
(想) みんながより良く集い、楽しめる空間としての公園デザインを発想する力					
(技) 考案したアイデアを、様々な材料や技法を用いて表現する力					
(鑑) 作品のテーマや制作内容を分かりやすく伝える力や他のグループの発表を聞き取る力					
総時数 (7)	学習活動・内容	評価規準			
		関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
1	<p>○鑑賞</p> <p>彫刻家イサム・ノグチ氏の作品を観て、感じる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「アース・アート」の意味を知る。 ■「モエレ沼公園」の鑑賞を通して、ノグチ氏の制作意図と意思を感じて、考えや感想を話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イサム・ノグチ氏の作品や考え方に興味をもち、良さを味わおうとする。 	/	<ul style="list-style-type: none"> ・イサム・ノグチ氏の作品を観て、模写の形で自分なりに表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を観て感じた思いを、自分の言葉で話すことができる。

2	◎ 構想 ■鹿部町に、みんなが集い楽しめるような公園デザインを考える。 ■公園デザインの6つのテーマを、各グループに分け、各グループで具体的な遊具やスペースを考える。	・鹿部町の特色やアピールポイントや地域色を生かした公園を考えようとする。	・鹿部町の特性を踏まえた上で、独創的な遊具等をデザインすることができる		
3~5	◎ 制作表現 ・各グループで、公園の各エリアの縮尺作品を制作する。 ・色々な材料を工夫して制作する。	・グループ内で協力しながら制作活動にあたりようとする。	・鹿部町の特性を生かしたデザインを構想することができる。	・材料や技法を工夫して構想を具体的に表現することができる。	
6	○ プレゼンテーション（準備） ■各グループごとに、作品の紹介と説明の準備を考える。	・説明内容を、分かりやすく整理しようとする。			
7 本時	○ 全体プレゼンテーション ■グループごとに、作品の紹介と説明を、役割分担に応じて行う。 ・各グループの作品を合体し完成させる。 ■全体説明（代表）と講評（役場担当）	・グループ作品の特徴を、分かりやすく整理し、伝えようとする。			・互いの作品の良さや工夫したところを認め、味わおうとする。


※■言語活動、◎共通事項に関連した内容

5 本時案（7/7）

- ・目標 (1) 制作についてのテーマや、内容などを分かりやすく発表することができる。
- (2) 他グループの発表に関心を持ち、よさや美しさを感じ取ろうとすることができる。

●学習活動 ■言語活動	○教師の働きかけ ◎共通事項	◆評価 ※支援
●本時の目標及び活動内容を確認する。	○本時の目標及びプレゼンテーションの発表内容を確認した上で、学習の意欲づけを行う。	
学習目標：思いや考えを伝え合おう ～夢のしかべ・アース・アートの完成		
<ul style="list-style-type: none"> ■グループ毎に、プレゼンテーションを行う。(全6班) ■カメラ、PCを用いて視覚的に分かりやすく説明内容を提示する。 ■全てのグループの発表後、6つのエリアを合体させ、一つの共同作品として完成させる。 ■代表から総括、まとめを話す。 ■鹿部町役場の担当者からの講評を聴き、発表の反省や感想を各自振り返りシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○事前学習で、発表内容を以下の項目に設定する。 <ul style="list-style-type: none"> ①担当エリアのテーマ ②役割分担 ③エリアの特徴・アピールポイント ④遊具やスペースの紹介 ⑤質疑応答 ◎各グループの発表がスムーズに流れるように、適宜声かけや支援をする。(教師・役場担当) ○各グループの良い点を認め、評価する。 ◎制作や発表における成果と課題に関して、生徒たち自分の声や発想を大切に、広げる関わりをする。 ○各グループの表現の良さを認め合う雰囲気づくりができるように配慮する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆発表内容を整理し、分かりやすく説明を行う事ができる。 ※カメラやPCの基本的な使用方法を事前に学習しておく。 ※発表形式や流れを事前学習で確認しておく。 ◆発表に関心を持ち、よさや美しさを感じ取っている。 ※各エリアが合体する状況を見やすくする棚を用意する。 ◆制作ワークシートと、振り返りシートを基本に、活動と発表の評価をする。

【 中学校提言 分科会：C-1 ひろがる造形 ～ つながる気持ち 】

	「母校の歴史に名を刻め」のその後		
	函館市立深堀中学校 3年 / 指導者 櫻井 純		
	夢	つくる	人
		○	◎

1 題材について

- ・開校 50 周年記念のモニュメントを制作するにあたり,形や設置場所などを生徒自身が考えることにより知的好奇心を刺激し,学校とのつながりをより強くもたせた。
- ・校地内の既存のモニュメントを提示し,言葉から形を,または形からイメージを発想しながら心の動きをサポートした。
- ・条件に応じた作品を作るために,コンセプトやイメージを明確にしながらか話し合いや制作を行うようにした。させる。
- ・自分たちの制作意図を生徒や教師に視覚的に伝え合うことで,知性を働かせながら感性を刺激する。

- ### 2 題材の目標
- 記念モニュメントのコンセプトやイメージを明確に形にし, 周囲に伝えるために表現方法を工夫させたり, 言語活動を活発に行わせる。

3 指導計画

○育みたい資質や能力					
(関) テーマに基づいた表現の多様性に気づかせ,学校とのつながりをより意識して授業に取り組もうとする姿勢					
(想) 言葉の持つイメージや,形から感じとるテーマなどを豊かに発想・構想する力					
(技) 自分のイメージを具体的に形にすることが出来る創造的な技能					
(鑑) 自分の制作意図を伝え合うためのコミュニケーション能力を高め,自他の作品の違いや価値を共感する力					
時数	学習活動・内容	評価規準			
		関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
11 (2年時)	○50周年モニュメントを考える。 ○石膏ブロックを使って,エスキースを作る。	テーマに沿って自分のアイデアを形にしようとする。	テーマに合った形を考えている。	道具や素材を生かして,創造性豊かに表現している。	自他の作品について,その良さを見つけている。
6 (3年時)	○設置場所などの環境計画を立てる。 ◎グループで模型等を制作する。 ■それぞれの計画を発表し, 交流し合う。	言語活動等を取り入れて,積極的に制作意図を伝えようとしている。	条件に応じた作品を構想し,よりわかりやすく伝えるように考えている。	班員で協力し,テーマに応じて表現しようとしている。	客観的に作品を選び,その良さを見つけている。

4 実践の視点と経過

当時勤務していた学校で開校 50 周年記念行事があったため、最高学年として 50 周年を迎える当時の 2 年生に、母校が刻んで来た歴史を祝福する意識をより高め、一人ひとりが 50 周年行事に関わったという気持ちを持たせたいと思い、美術の授業の中で取り組めるものはないか考えた。グラウンド周辺には過去の卒業生の卒業記念モニュメントがあり、モニュメントは日常生活の中にとけ込んだ風景の一つであったため、新たに 50 周年記念のためのモニュメントを考えるということは、生徒にとってもそれほど違和感がないと思い、題材として取り上げた。

モニュメント制作を行うことに対する関心はとても高く、どの生徒も意欲的に取り組んでいた。石膏ブロックを使い、モニュメントの形を考え、個人でエスキースを制作する授業を行った。

その後、本格的に予算がつき、実際にモニュメントを建設することが可能となったため、2 年時に作ったモニュメントエスキースを、校地内のどこにどのように設置するかをグループで考え、プレゼンするという授業を 3 年時に行い、第 60 回全道造形教育研究大会でその様子を公開した。

この実践では、設置環境計画をグループで考え発表するという授業であったため、互いの意見を交流させなければ活動が進められず、考えを深めるために周りからの言葉をどうやって解釈し、自分はどうのように考えるのかを伝えることが出来るコミュニケーション能力を高める必要性があった。その中で、お互いが意見を出し合って交流することで教師からのアドバイスだけでは深めることが出来なかったアイデアや発想を深め、自分自身の作品を振り返ることが出来るような能力を身につけることが出来たように感じる。

更に、いかに自分たちの設置計画の良さを最大限に伝える事が出来るかを工夫するため、モニュメントの模型を制作したり、OHP やプロジェクターを使って視覚的に訴えるなど、既習事項をしっかりと生かしてプレゼンできた班が多く、1 年時からの積み重ね、または各教科での学習とのつながりなどを感じる事が出来た。

2 年時の個人でのモニュメントエスキース制作で終わるのではなく、その後モニュメント設置の条件などを考え、各班でモニュメントを設置する意義などを話し合うことにより、より母校への愛着を感じた。これからの後輩や地域にも自分たちの思いをつなげていくことを考えることができたように思う。更には、モニュメント設置に関しては、予算の関係から業者に依頼することは難しく、生徒と提言者自身によって制作することとなり、大変な面も多かったが、より「自分たちの手によって作り上げたモニュメント」という思いが強くなった。また、設置に際して、PTA が協力してくれることとなり、台座や設置工事を負担していただいた。設置工事には、その工務店に働いていた卒業生が担当し、モニュメントを中心として生徒、保護者、卒業生、そしてこれからの入学生と、つながり、ひろがりを作る授業が出来たと感じている。

5 今後の課題とまとめ

本来、2 年時のモニュメントの具体的な形を個人で考え制作する授業で終了するつもりであったが、思いがけずモニュメント建設の話が現実化したため、二カ年計画の授業展開となった。そのため、個人からグループ、そして全校、その後続く後輩、地域と広がっていくことを考え、3 年時の授業を構築した。

課題としては、言語活動の難しさと大切さをどこまで生徒一人一人に考えさせることが出来たかという点と、評価の点である。プレゼンは活発に行われたが、話し合いとしての質を高めることは出来なかった。言語活動によって、みんなで作品を作り上げていくための教師の働きかけが不十分であったと感じている。

また、評価に関しては、グループ学習の難しいところであり、自己評価などから判断することが多いが、それでどこまで一人一人の深まりを拾うことが出来たかは、今後も考えていきたい部分である。





「表現にこめた思い」

札幌市立本郷小学校 6年 / 指導者 中川 治

夢

つくる

人

◎

1 題材について

本題材は、ピカソの『ゲルニカ』を鑑賞し、その作品に込められた思いやメッセージを読み取り、作者の表現の意図を知る題材である。

その後、ピカソの『ゲルニカ』での学習を生かし、修学旅行先の向陽館で高橋要の作品を鑑賞する。『ゲルニカ』での鑑賞から、自分なりの作品の見方をもち、高橋要の作品を深く鑑賞し、友だちと交流し合うことで、美術館の世界観や作家の芸術と向き合う生き方に思いをもっていくのである。

2 題材の目標

作品の形や色、大きさなどから、美術作品に込められた思いやメッセージを読み取り、作者の表現の意図を知り、美術作品に対する鑑賞を楽しませる。

3 指導計画

○育みたい資質や能力

(関) 美術作品をよく見て、形や色、表されている内容などを味わおうとする姿勢

(想) 作品の形や色からイメージを膨らませ、作品の物語を考える力

(鑑) 美術作品に込められた、作者の表現の意図や特徴などを感じ取る力

時数	学習活動・内容	評価規準			
		関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
3					
1 教室	<ul style="list-style-type: none"> ○ピカソの『ゲルニカ』を鑑賞しよう。 ・作品に使われている色、描かれているものは何かを見つける。 ・作品から感じるイメージを交流する。 ・作品の物語を3場面に分けて想像する。 ・物語を交流し、作品の世界観を深める。 ・作品に込められた思いを読み取り、表現の意図を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲルニカを意欲的に鑑賞しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲルニカから想像する物語を発想しようとしている。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ゲルニカで使われている色や描かれている形から、作品のイメージを広げ、作品を味わおうとしている。
2 美術館	<ul style="list-style-type: none"> ○高橋要の作品を鑑賞しよう。 ・お気に入りの作品をデジカメに撮る。 ・お気に入りの作品から物語を3場面に分けて想像する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館の作品を鑑賞し、お気に入りの作品を見つけようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お気に入りの作品から物語を発想しようとしている。 		<ul style="list-style-type: none"> ・お気に入りの作品に使われている色や描かれている形から、作品や美術館のイメージを広げようとしている。
3 教室	<ul style="list-style-type: none"> ・作品の物語を交流し、美術館の世界観を深める。 ・作品や美術館に込められた思いを読み取り、表現の意図を知り、高橋要の生き方に思いをもつ。 				

4 実践の視点と経過

本郷小学校では、修学旅行で旭川方面に向かう。深川に廃校になった向陽小学校の校舎がある。その校舎を画家の高橋要が美術館兼アトリエとして活用している。想像の海をテーマに作品を制作し続け、館内は高橋要の作品で彩られている。体育館には超大作もあり、見る人の心を打つのである。昨年度までは、修学旅行のコースには入っていなかったものを、今年度新たに加え、子どもたちに鑑賞の機会を設けた。しかし、ただ美術館に行き作品を見るだけでは、深まりがない。学習として位置付け、題材を計画的に進めていくのである。



題材は日本文教出版の教科書にもある『表現にこめた思い』である。作品を鑑賞し、作品に込められた作家の意図などを感じ取る授業である。学習で取り上げた作品は教科書にも掲載されているピカソの『ゲルニカ』である。ゲルニカは有名な作品であり、子どもたちの中でも作品を見たことがあったり、その背景を知っていたりする子がいる。

題材の導入で子どもたちの興味関心を引くために、4分の1サイズのレプリカを用意する。子どもたちはレプリカとはいえそのサイズの迫力に目を奪われる。すぐに「気持ち悪い。」

「よくわかんない。」といった声が上がった。そこで、子どもたちに「この絵の中で使われている色は何かな。」「描かれているものは何かな。」と問う。子どもたちからは、「黒、灰色、白。」「変な人がいる。」「よくわからないけど馬かな。」「ナイフもあるし、花もある。」「窓みたいなものがある、あれ？これって室内？」とどンドンと作品に描かれているものを見つけていく。そして、作品の世界を考え始めるのである。作品を知っている子は、戦争をモチーフにしてために、このような表現にいたったことに気付く。しかし、それでは作品に対する思いが深まらない。



そこで、「この作品の物語を考えよう。」と問いかけるのである。場面を3つに分け、どのような展開になるのかを考えていく。ある子は、「パーティーの最中に動物に襲われた。」というものや「なぞの男が訪問し、その家に不幸をもたらした。」など描かれているものをヒントに物語を想像していくのである。物語について交流することで、この作品が惨劇や不幸を表していることに確信をもっていく。白黒で描かれていること、ものの形がおかしいこと、この作品が描かれた背景には戦争があったことなどを知ること、ピカソがゲルニカを描いた意図と自分の物語を重ね合わせるのである。

そして、形や色から物語を想像し、ピカソの意図を知ることで、高橋要の作品も鑑賞してみたいという思いにつながっていく。

5 今後の課題とまとめ

本研究の「ひろがる造形～つながる気持ち」の視点に関わって、作家、美術館とのひろがり・つながりを重視して授業を構築した。ピカソから高橋要へ、教室から美術館へ、美術作品から自分の生き方へとひろがり、つながるのである。

今題材でピカソのレプリカは大谷大学からお借りしたものである。札幌市では、大谷大学からレプリカをお借りし、授業を行うことができる。しかし、まだ十分な活用には至っていない。また、高橋要の向陽館は北海道を代表する美術館であるといっても過言ではない。そのような美術館を十分に学習をつなげていくことが、今後の課題である。



C-1 「ひろがる造形～つながる気持ち分科会」	助言者 花輪 大輔（北海道教育大学札幌校教授） 司会者 高島 純（七飯町立大沼中学校鈴蘭谷分校） 記録者 森 泰司（函館市立光成中学校）
○分科会のテーマ「地域や人、他分野とのつながりを考えよう」 ・北海道のネットワーク、地域の人々や社会との出会い、他分野とのコラボレーションなど、ひろがり・つながりの造形を考える。	

【公開授業】

1 「しかべ・アース・アート～人がつながるアートの空間」 藤本 大介（鹿部町立鹿部中学校）

①授業者（藤本先生）より

この分科会のテーマ「地域や人、他分野とのつながりを考えよう」という枠組みで教材研究を進めていく中で、自分たちの住む鹿部という地域とのつながりを考えた授業にしてはどうかと先輩からアドバイスをいただいた。そこで最初は、鹿部町にゆかりのある芸術家の作品や芸術エリアを探したが、中学生に合うものを見つけられなかったため、鹿部町をテーマに何か制作してみようということでスタートした。

自分自身が彫刻家のイサム・ノグチさんがつくったモエレ沼公園が好きで、プライベートでもよく行っていたということもあり、イサム・ノグチさんの提唱する「アース・アート」、ただ遊具を作るだけではなく空間自体を芸術作品としてつくり、そこに人が集うという部分に共感していたので、鹿部町に人が集える新しい空間を子どもたちが考えるということでスタートした。

しかし、鹿部町に実際に公園をつくる場所は想定できなかったため、今回は鹿部町につくるということにはしたが、どこにつくるかということは架空のままにした。

人と人の想いをつなげるという面で、まず小学生と後輩の中学1・2年生全クラスにアンケート取り、どういう公園があつたらいいかという意見を集め、そのアイデアをもとに話し合った。また行政とのつながりという面で、鹿部町役場観光商工課の澤田麻衣さんに来ていただき、行政の立場から意見をいただいた。

一番の目標は、町の人が集える美しい楽しい公園をつくらうということで授業を進めてきた。

導入としては、モエレ沼公園を鑑賞し、そのあとに自分たちはどうするかという話し合いに5時間もかかってしまった。結果的には6つのテーマに絞られた。

また、キャラクターを外部から持ってきたりするのではなく、鹿部町に根差したものから発想を広げてアイデアスケッチをするように指導した。

話し合いに5時間かけたので、実際に制作に入る時は、スムーズに進んだ。資料には材料からの発想・制作と書いてあるが、多種多様な材料から自分たちで発想をどんどん膨らませて、最初のアイデアスケッチからもっとよいものに変化していった。

作品が完成したので、今後どこまで実現するかはわからないが、鹿部町役場と連携し、鹿部間欠泉の横の空間に人の集まる空間として中学校から提案する予定。また、町の公民館に展示をして、町民にも見てもらう予定。

今日の発表で各グループから工夫したところを発表していたが、一番の目標は人が集まる空間をつくることだったので、子供たちの発表の中でお年寄りや小さな子供が使いやすいように工夫している点がたくさん出ていたのでよかったと思う。

短い時間の中での制作だったので、作品の質を追求することはできなかったが、空間づくりという目標や話し合いの内容を考えると子どもたちは非常に頑張っていたと思う。



②質疑応答

○アンケートの集計結果がどのようなものだったのか教えてほしい。

⇒アンケートの内容は、どんな遊びをしていますか、遊んで楽しい場所や遊具は、こんな場所や遊具があったらいいという内容を書いてもらった。小学校1年生から中学2年生までいるので、回答の内容は多種多様だった。

アンケートは原文のまま子供たちに見せた。鹿部には子供向けの公園や遊び場があまりなく、総合体育館で遊んだりしている状況。海水浴場もなく、海で泳ぐこともできない。遊園地などに行った経験が少ないので、すべり台など自分が遊んだことがある遊具を書いている子供が多かった。

○作品には様々な材料が使われているが、初めに先生が用意されたのか、生徒の意見で先生が用意されたのか、生徒が自分で持ち寄ったものなのか教えてほしい。

⇒材料は、ストローや割り箸、画用紙など安価なものを多く使っているが、色を塗ることで作品として形にすることができたと思う。材料の中には、「子供たちが先生これ持ってきてもいいですか」と言って持ってきたもや、作りながら必要なものを言うので予算内で用意したものがある。できるだけ学校にあるものやお金のかからないものを用意した。

○作りながらデザインが変わっていったことに関して、指導案では評価項目の中で構想を具体的に表現することができるという点で書いてあるので、その点をどのように評価したのか教えてほしい。

⇒一番最初のアイデアスケッチから大きく変化した子はいなかった。変わった部分がある子もアイデアスケッチに変更部分をメモしていた。さらによくしていこうという工夫なので、構想の変化は評価としてマイナスとは考えていない。

○まちおこし運動と連携するために苦労されたことはどのような点か。

⇒指導案には鹿部町町おこし運動と書かれているが、数年前まで堤防に絵を描いたりなど中学生ができることを行政から依頼されて行ってきたが、ここ数年はなかった。町と連携するために観光課と話をしたが、コストの部分が重要で、次年度の予算を立てる前年度から計画を立てておく必要がある。具体的な計画を早めに話していく必要があるので難しいと感じた。

鹿部町は教育と行政のつながりが深く、気軽に話ができるので早めに話をしていけば協力していただける。



③助言者より

本授業は美術と社会とのつながりをテーマとして考えられている。全道の研究大会で中学校3年生の公開はめずらしく、中学校3年生は義務教育の集大成ということで今回みることでよかった。今日は子供たちが一生懸命に準備をして、その成果をきちんと発表できていた。さらに ICTP を活用して

いるところもよかった。また、行政の人がゲストスピーカーとして来てくれたり、地域の小学校と連携したり、ものすごくエネルギーのかかっている授業だと思って参観した。先生の一生懸命さも生徒に伝わっていた。

特に今、学習指導要領でも地域素材、地域の題材化ということが内容の取扱いと配慮事項に書かれているので、非常に価値のある実践だった。

今日は子供の発表が中心だったが、特に心を動かされたのは、「たらこのベンチでぜひおにぎりを食べてほしい」と言ったところで、その子の形や色に込めた想いが出ていてよかった。

今回、授業者の先生は「アース・アート」に取り組まれたが、「アース・アート」は基本的には土木工事に匹敵する大規模な制作のプロセスを伴うということなので、「アース・アート」の方向を向いた空間デザインの授業だったと思う。

デザインは基本的に目的に向けて計画を立てて、問題解決のために思考概念を組み立て、視覚的・触覚的な媒体により表現するというのがデザインの基本的な枠組み。よく小学校や中学校では、コンポジションの問題になって、視覚伝達に向かっていくことが多いように思うが、中でもデザインの過程においてトレードオフという考え方がある。トレードオフとは、片方の意見を通せば、片方のよさが犠牲になるということ。道徳のモラルジレンマに似たところがある。子供たちが吟味をしている過程で葛藤するが、その葛藤こそが批判的思考を伴って子供たちを育てていくことになる。

先生と子供たちの事前の準備に非常にエネルギーがかかっている授業であったので、そのエネルギーの向かう方向がこういう方向に向いていたら少しちがっていたなということをお話したい。

今日は発表会の要素が非常に強かったが、実はこの発表会は観賞会であり、6班あるので他の5班は鑑賞者の位置にいた。その子供たちは他の班の作品を見て、自分の中に意味・価値をつくることができたと思う。

美術は大きく表現と鑑賞の領域に分かれているが、それら二つを繋ぐのは、表現では自分の外側に、鑑賞であれば自分の内側に何かをつくる創造のプロセスを教育すること。

評価のワークシートも態度形成を重視されていることが授業を見ても伝わってきたが、態度形成以外のよさや美しさが共通事項に関わってきてもよいと思った。子供たちが考えて考えて吟味し工夫したことが、作品化された物よりも尊い。目に見えるものよりも目に見えないものの方が尊いということなので、それを目に見える作品をきっかけとして、子供たちが見つけられるとよりよい授業になったのかなと思う。



2 提言者 櫻井先生（函館市立的場中学校）より

前回の函館大会のときに「母校の歴史に名を刻め」というタイトルで授業をした。今日はその後の話をしたい。

周年行事に関わって、子供たちに何かできることはないかと考え、「記念モニュメント」を考えるという授業を行った。個人で制作を行い、その後、設置場所などを考えて班でプレゼンを行うという授業だ

った。

2年生の時に記念モニュメントのコンセプトを考え、石膏ブロックを使って形を作った。抽象を題材として制作するのは初めてということと、削って作るカービングという技術に生徒たちははじめ戸惑いもあったが、刃物を使う危険な作業ということもあって、集中して制作することができた。

安田侃のビデオを見せて、モニュメントが実際に屋外に設置するものとしてどういう形がいいのかイメージさせながら制作を進めた。

3年生になって、設置条件を整えてプレゼンを行った。個人で制作した作品にタイトルをつけて観賞会を行い、実際のモニュメントにふさわしい作品をいくつか選ばせ、4つの班で話し合ったことをプレゼンした。その後、生徒から支持が多かったモニュメントを実際に作ることになり、それが「支」というタイトルの作品。

生徒と私が作品を制作し、台座と設置工事はPTAの協力で行った。工事を行った工務店には、卒業生もいたので関わってもらった。完成したのが3月14日で、制作した3年生が3月15日に卒業し、私もその年で転勤となったが、関わったPTA会長さんや卒業生が今もメンテナンスをしてくれている。実際に2度、色を塗りなおしている。

この授業を通して、伝えることの大切さをすごく感じた。はじめは個人で制作していたが、観賞会でお互いの作品の意図を伝え合い、そこから今度は班でプレゼンを行い学校とのつながりを持ち、それをPTAや卒業生に伝えることで実現したということだったので、今回伝えることの大切さを感じた。伝え方も言葉で伝えるだけではなく、形で伝えたり、色んな伝え方があると感じた。

もう一つ、美術が生活に関わっていることを子供たちが感じる事がすごく大事だと思った。自分が好きな色や洋服の組合せ、料理の盛り付けでおいしそうに見える組合せなど普段の生活で子供たちがやっていることの中に、理論や法則があることを美術の授業で学んでいくことで、より深まりを持たせることができる。今までなんとなくですまされていたことが、実はこういうつながりがあると気付くことだけで、美術の授業でただ絵を描いて終わるのではなく、美術が生活と密着してる教科なんだと気づくきっかけを与えることができる。

発表の方では、総合的な学習で行っているプレゼンテーションの方法や技術の時間で行っているコンピュータの使い方など他の教科とのつながりを持つことができた。

また、卒業生やPTAなど学校関係者とのつながりを持つことで、モニュメントを制作することができたので今回紹介させていただいた。

①質疑応答・意見交流

○白尻中学校の教員の時に、何か記念になるものを残したいということで、4クラス分の作品を校庭に残した。その時の生徒たちが、今でも同期会を開いて集まっている。そこで皆さん、美術を担当したら子供たちの願いと将来共につなげるモニュメントを大いに作ってほしいとお願いしたい。

②助言者より

今回の周年行事のモニュメント制作はイベント型の造形活動という。

前回の発表で、石膏ブロックを削って彫刻作品を作っているとあったが、きちんとした彫刻の授業をやることはすごく大事な事。小学生のときには、モデリングを中心にやっていくが、中学生ではカービングの授業がきちんと位置づくべきだと思っている。篆刻の持ち手の部分をもって彫刻に代えられる先生もいるが、きちんとした石膏を彫っていくという授業はやはり大事だと改めて思った。牛乳パックと石膏の粉を使うと、この世に存在しなかった形を存在させるところから授業をスタートさせることができる。今まで存在しなかった形ができ、この形の中に掘り出されるべき形があるはずだということから授業をスタートしていける。モデリングより、カービングを重視していきたいと思う。FRP等を子供たちが触る機会もほぼないので、ぜひ素材体験も含めて授業を考えてもいいと思う。

特に北海道は、アルテピアッツァやモエレ沼など抽象彫刻家で著名人が結構いるので、子供たちが生

でそれを見ることも可能だと思う。

3 提言者 中川先生（札幌市立本郷小学校）より

「表現にこめた思い」という題材を使い、「地域や人、他分野とのつながりを考えよう」というテーマに合わせて何ができるか考えた。6年生を担当しているので、修学旅行で深川にある向陽館へ行くことにした。ただの見学にならないためにということで、ねらいを明確にして、子供たちが美術館に行った時にしっかりとねらいをもって活動に取り組めるようにしたいと考えた。

そのねらいというのは、形や色から作家の表現の意図を考えるというもの。

つながりという点では札幌には大谷大学があり、「ゲルニカ」の4分の1のレプリカを無料で借りることができた。そのゲルニカを見て、何が描かれているかを見つけ、その見つけたものから物語を作ってみようという授業を行った。物語は3つの場面に分けてワークシートに記入させた。

北海道の研究部長の湯浅先生から図工でやってはいけない3つのことがあると教わった。ひとつは、汚いものはだめ。そういうものを表現させたり、言葉にしていけない。2つ目はキャラクターを真似ることはだめ。3つ目が恐怖を感じるものはだめ、血だとか死だとかそういうものはだめだということを知った。分かりやすので年度のはじめに子供たちにも話しているが、今回のゲルニカに関しては、死などそういうものを感じる場合は言葉にしていけない、物語の中に使っていいと話した。そうするとやっぱり、そういう表現がワークシートにダイレクトに書かれていた。

それぞれの子供にそれぞれの物語があるが、戦争の絵だと言わなくても、子供たちの物語の中で何か災い起きて、人が死んだり、不幸が起きている。実はこの絵をピカソが描いた時に戦争があり、戦争ってというのは不幸なものだという鑑賞の授業になった。

向陽館では、高橋要さんの作品が展示されており、ご本人から作品の解説をしていただいた。

1時間くらいしか活動の時間はなかったが、初めにグループごとに行動し、そのあと子供たちは自分でお気に入りの1枚を探して写真に撮る活動を行い、ワークシートに物語を作っていた。抽象的なゲルニカと異なり、具体的なものが描かれているので、説明的になってしまう傾向があった。

修学旅行から帰ってきて、物語の交流を行い、作家がこの美術館を作った思いを感じ取らせることができた。

今回、ゲルニカと高橋要さんの作品について同じワークシートを使用したけど、それがよかったのか、もっと他に方法があれば教えていただきたい。

①質疑応答

○物語を3つの場面に分けた理由を教えてください。

⇒小学生には起承転結は難しいと感じたので、分かりやすくするために3つの場面設定にした。

○美術館でも3つの場面に分けた理由を教えてください。物語の発表をするのであれば、メモ書きでも十分ではないか。

⇒ゲルニカのときと同じスタイルにしたほうが、子供たちの戸惑いが少ないと思った。時間があまりない中で新しいことに取り組ませることができないと考えた。

②助言者より

鑑賞について、美術館を活用することの重要性が言われて久しい。しかるべき作品をしかるべき場所で鑑賞することは重要。小さな町でも文化センターなどで大きな作品を鑑賞することができるので、鑑賞の授業を実施できる。今回、中川先生が修学旅行で子供たちを美術館に連れて行ったことに敬意を表したい。

鑑賞の指導方法には、作者の意図や思いを超えて考えを広げていくオープンテキストと作者の意図にクローズアップしていくクローズテキストがあり、今回のゲルニカはクローズテキストの手法で、高橋要の作品についてはオープンテキストの手法が使われている。子供たちに自分のお気に入りの作品を選択させ、物語を考えさせることにより、作品と子供たちの距離がより近くなっている。

鑑賞の導入として物語をつくらせるのはとても有効。アビゲイル・ハウゼンが提唱した鑑賞の発達段階には5段階あり、初めの段階の「物語を作る」という段階を実践しているので、小学校6年生にはとても合っている指導方法。

美術館に言って、作品のキャプションを読み、その内容を確認するような鑑賞の授業は鑑賞の授業といえるのか疑問なので、今回のような鑑賞の工夫は大切。

4 助言者より 全体を通して

美術という教科の目標に立ち戻って指導することが大切。よさや美しさの価値が分かり、よさや美しさを感じることができなければ、そのまま一生分からずに過ごしてしまうかもしれない。

中学生へのアンケートで美術は大切ではないと考える生徒が3分の1、美術は役に立たないと考える生徒が2分の1という結果。しかし、美術は人生を豊かに生きるために必要なもの。

「感動」とは心が感じて動くという字を使っているが、その感動を動かない安定した姿に変えることが美術の役割。美術は作品づくりが目的ではなく、それを手段として人間的な成長を図ることが目的だと考える。

まとめとして次の3つの視点からお話をしたい。一つ目が教科経営について、二つ目が図工・美術における言語活動について、三つ目が共同制作についてです。

一つ目の教科経営について、小学校では担任の先生が学級経営と教科経営を一体化して行っているが、中学校では教科の先生が教科経営を行っている。年間計画を作成するときに自校の教育目標の実現、目指す生徒像の実現を念頭に入れることが重要。児童・生徒の実態に応じて、どのような題材をどの時期に配置して、どのような力を身につけさせるのかを考えることが大切。

二つ目の言語活動について、小学校の先生は、国語と図工の授業を両方やっているのでも、切り替えを上手にやっている。中学校の国語の先生が道徳の授業をやると、道徳ではなく国語の授業のようになってしまうことがある。児童・生徒が充実した言語活動を行えるようにするには、学校全体が一体となって指導することが必要となる。各教科で、「教科の言葉」を積極的に使用することも大切。

三つ目は共同制作について、文科省では最近「協働」という言葉が使われているが、美術では昔から共同制作が取り上げられている。共同制作において懸念されることは、児童・生徒が将棋でいう指し手と駒の関係になってしまうことである。個が埋没してしまわないように指導することが大切。





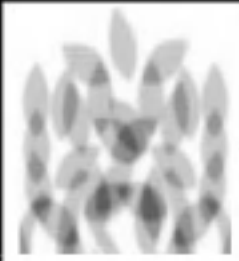
C-2分科会

アートプロジェクト公開	
授業名	北海道 夢ツリープロジェクト
授業者	函館・渡島大会研究部
参加者	弥生小学校児童／市内美術部生徒

提言 1	
テーマ	地域の美術館とつながりひろがる ~発想を得て表現し,発表しよう~【中3】
提言者	更科 結希
学校名	北海道教育大学附属釧路中学校

提言 2	
テーマ	「チーム北海道」を形に ~人と人のつながりづくり~
提言者	舘内 徹
学校名	札幌市立あやめ野中学校

【アートプロジェクト 分科会：C-2 広がる造形～つながる気持ち】

	「北海道 夢ツリープロジェクト」の実施について		
	第65回全道造形教育研究大会函館・渡島大会 実行委員会 研究部		
	夢	つくる	人
○		◎	

1 経過

今大会のテーマ「夢・つくる・人～未来はぐくむ造形教育～」を決定した際、5つの視座から造形教育を考えていくことにした。その1つ「私たち、北海道のクリエイター」としての造形教育・北海道をひとつの地域、チームとしての造形教育を考えよう。」をベースに、3つの研究実践のポイントのうち、三つ目の「ひろがる造形～つながる気持ち」に関連させ、大会の活性化と全道ネットワークを使用したアートプロジェクトを立ち上げていくこととした。

第55回函館大会では、地域に視点をおき、その中で、地域人材の活用と、地域に根ざした造形教育を視点を、当時、函館で情報デザインの分野で活躍していた方と地元大学生と地域の小中学生がコラボレートした。ここでは、地域とデジタルアーカイブを連携させ、地域における美術の教育活動あり方を考える機会を設定した。(第55回函館大会紀要参照。成果については、アンケート結果を踏まえて大会集録に掲載している。)

今回の大会では、そのような経過をふまえ、子どもと教師が、北海道という広い地域を1つに感じ取ることができることを提言していきたいと考えた。オール北海道を対象としたアートプロジェクトとしては、大会初の実践であると思う。

実施に向けては、北海道の各地区サークルの協力が必要であり、造形連盟の総会で説明した際には、各地区から協力への賛同の声を聞かせていただいた。協力をいただいた全道地区の皆さんには大変感謝している。

2 ねらい

研究主題「夢・つくる・人～未来はぐくむ造形教育～」の研究実践の視点の1つ【ひろがる造形～つながる気持ち】と関連させ、地域や人、他分野とのつながりある造形教育を考えるアートプロジェクトとし、北海道をひとつの地域、チームとしての実践としたい。

3 アートプロジェクト概要

全道各地の子どもたちの夢や希望を一枚の葉「フューチャーリーフ(未来の葉)」に描いてもらい、集まった葉を函館・渡島の子どもたちと共に、「夢ツリー」(大会のシンボルツリー)に飾り付け、全道の子どもたちの夢を共有するような表現活動にしていく。

○「夢ツリー制作」参加者

会場校の弥生小の子どもたちと市内中学美術部の生徒若干名【サブリーダー】

○指導者 大会研究部教師 若干名

【手順】

①全道各地区の小中学生に、「フューチャーリーフ(未来の葉)」参加者を募集する。

・全道各地区サークル毎に参加希望校別に参加人数予定と学校担当者名を集約する。

②参加地区サークル毎に参加者の「フューチャーリーフ」を送付していただく。

③函館の児童・生徒により、夢ツリー（大会のシンボルツリー）をつくり、全道の子どもたちの夢を共有しあう場とする。

④大会当日、制作の様子を公開する。 → 分科会提言

※その他

各地区サークル毎に「フューチャーリーフ」参加の案内と集約、材料費と送料の負担を協力していただいた。また、フューチャーリーフは、返却できないので、その旨をご理解いただいた。



事前準備に取り組む中学生たち

4 プロジェクトの実施にあたり

ねらいをふまえたプロジェクト実施のキーワードは、次のようになる。

①当日の時間内でできるプロジェクト

②造形を楽しむプロジェクト

③夢を共有するプロジェクト

④人がつながるプロジェクト

北海道という広い地域において、人的交流、造形的交流手段を考えたとき、距離的、物理的な課題が多い。


しかし、長年にわたり積み上げてきた地域のつながりある全道の研究会の協力体制を生かすことで、様々な取り組みが可能となると考えた。様々な通信コミュニケーション手段を活用しながら、地域をつないでいく全道大会のあり方の一つの実践としてとらえていただきたい。

今後、その成果や課題については、参加協力していただいた皆さんからの忌憚のないご意見・ご感想をいただきながらまとめていきたいと考えている。今後の授業などへの展開を期待したい。

(文責：佐々木善憲)



【 中学校提言 分科会: C-2 ひろがる造形 ~ つながる気持ち 】

	「Answer Art ~作品の声を聴く~」		
	北海道教育大学附属釧路中学校 3年 / 指導者 更科結希		
	夢	つくる	人
		○	◎

1 題材について

本題材は、鑑賞活動と表現活動を合わせた創造活動の設定と、それを促すための主題の設定場面や主題の表現をするための構想場面に着目し構成している。中学3年生の表現分野の学習において、主題を自ら生み出すことと、自分の意図に合う表現を行う際に、具体的な表現効果について考えていくことが重要となる。これまで、表現活動の題材において鑑賞は創意工夫を広げるために、様々な表現方法があるということに触れるために取り組むことが多かった。そして、表現活動では生徒全員が共通した素材を扱い、生徒が想像した形に近づけていくと行った活動を多く扱ってきた。鑑賞と表現が互いに連動し、生徒が共通した主題のもと個々の主題を生みだし表現していく場面を作ることで、互いが意見を共有しあえる環境をつくり、表現していく作品が生徒にとって、価値ある作品になっていくのではないかと考えた。

本題材は、着想を得るための媒体として、釧路市立美術館所蔵の作品「A tale of the woods(2)」を設定し、その作品の鑑賞活動から感じ取ったことや考えたことを基に、鑑賞作品への返答となる作品を生み出す活動とした。主題を自ら生みだし、主題の実現に向かった構想や創造的な活動を工夫しながら改善し表現していくことは、柔軟に素材を扱えるよう既習事項についての確認や作品の構想を生み出しやすい場面の設定が必要となる。そのため、主題の着想を得る媒体として物語性を感じる共通の鑑賞作品を用意し、鑑賞活動を組み込んだ。そして、素材の持つ意味や効果について授業の場面に随所に取り入れるよう工夫した。

また、本校の生徒の実態として、「鑑賞時に作者が表したいことをどのように工夫して表現しているか意識している」、「鑑賞で作品から感じ取ったよさや美しさなどを言葉で表現することが好きか」といったアンケート項目において課題を抱えており、言語活動を効果的に取り入れた学習を進めるため、構想の場面において効果的な交流場面の設定について重点をおく授業過程とした。

この題材では釧路市立美術館と連携し、鑑賞授業の設定や生徒の完成した作品と鑑賞作品を同時に展示するなど、新たな取り組みについて模索した。

2 題材の目標

鑑賞作品から対象の様子や表現を読み取り、着想を得て、自らが表現したいことを構想し、構成を工夫しながら創造的に表現することができる。

3 指導計画

○育みたい資質や能力

(関) 対象作品から鑑賞したことを基に、イメージを広げ主題を生みだし、主体的に表現の構想を練り、材料の特性を生かして意欲的に表現しようとする姿勢

(発) 対象を深く見つめ感じ取ったこと、考えたことから主題を生み出す力。主題から創造的な構成を工夫し、表現の構想を練る力

(技) 自分の表現意図に合う材料の特性を生かし、表現方法を工夫し、制作の順序などを総合的に考えながら創造的に表現する力

(鑑賞) 対象の形や色、情景などから作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り、自分の価値意識を持ち鑑賞する力

時数	学習活動・内容	評価規準			
		関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
1	○釧路市立美術館所蔵作品の市成太煌の「A tale of the woods (2)」を鑑賞する。 ■作品を読み解くための視点として対象・色・情景について個人やグループ討議を行う。	・鑑賞作品から感じ取ったことを基に意欲的に自分の考えをまとめることができる。			・形や色彩などの特徴や印象などから、作品の意図や創造的な表現の工夫を感じ取りながら鑑賞することができる。
2	◎作品から読み取ったことをまとめ、作品から強く感じたメッセージや物語の続きを想起しながら、返答作品の着想を考える。		・対象を深く見詰め感じ取ったこと、考えたことをもとに自分にとって印象に残る場面について考えることができる。		
3	○鑑賞時にまとめた考えを元に、鑑賞作品への返答となる表現について構想する。 ・着想を得て、主題を生みだし、アイデアスケッチをする。	・主体的に自分の考えを基に主題を考え、意欲的にアイデアスケッチを行うことができる。	・対象を深く見詰め感じ取ったこと、考えたことなどから主題を生み出すことができる。		
4	○自ら考えた主題を元に、作品の構想を練る。 ・表現したいものをどのような【形態、素材、表現方法】で表していくか考える。 ■他者の批評的な意見を参考にし、自分の考えをより深めていく。	・他者の構想について、より良くするためのアイデアを持ちながら交流することができる。	・主題から創造的な構成を工夫し、表現の構想を他者の意見を基に更に改善していくことができる。		
5 6 7	◎主題や構想を基に、素材や制作計画を改善しながら作品を制作する。 ・20×20×20 cmの中に収まる作品として表現する。 ・色、対象の形や素材に着目しながら、どのような表現効果が最適か常に振り返りながら制作していく。	・意欲的に素材や色彩の表現効果について考えながら制作することができる。	・自分の考えに近づく表現を行うために常に構想を見返しながら制作することができる。	・主題を表現するために、素材の効果を意識し、制作手順を立て、表現方法を模索しながら表すことができる。 ・表現手段が最適か常に振り返りながら表現することができる。	
8	○鑑賞作品と生徒の作品を同時に展示し、鑑賞をする。	・作品から感じ取ったことや考えたことを基に自らの考えを深める活動を行うことができる。			・作者の作品から意味や意図を考え鑑賞することができる。 ・構想段階におけるアイデアと完成作品との関連について目を向け鑑賞することができる。

4 実践の視点と経過

(1) 着想の基になる「A tale of the woods (2)」の鑑賞の時間から

釧路市立美術館所蔵の作品を、施設内のシアタールームに設置し、鑑賞授業を行った。鑑賞作品の選択では、物語性のある作品であることや、色から受け取るイメージや描かれた内容が想像しやすいものであることを念頭においた。(写真1は、全体の場における対話型鑑賞を行っている場面)

鑑賞の方法は対話を生かし、作品に描かれている内容や作品から受ける印象、作者の想いについて考えを深め、感じ取ったことをまとめていく時間とした。また、個別に考えたことを他者との意見交流を通し、更に深める時間を設けた。また、鑑賞活動を基に着想を得て、作品を生み出す過程があるため、この時間の中で、鑑賞作品から自分がメッセージとして受け取ったことなどを具体的に記述する場面を設けた。



写真1 鑑賞授業の場面

(2) 着想を基に主題を生みだし、他者の批評的な意見を参考に構想を練る

個人の作品の構想場面では、鑑賞から着想を得て主題を生みだし、アイデアスケッチを行い、素材や表現方法について考えた。その際、更に自分の作品をより具現化するための手立てとして、他者による批評的な意見を受け取る場面を設定した。言語を用い交流する際、これまで批評的な視点で他者の作品を視ることは行っていなかった。そのため、作者がどのように表現しようとしているのか、また構想のアイデアスケッチから作品にどのようなねらいがあるのか両面から捉えることに重点をおき、交流する場面を設定した。(写真2は、グループによる他者の構想カードを見合い、批評的に他者の構想について意見を述べている活動の風景) この授業で取り組んだ構想カードは図1にあるように、アイデアスケッチと共にどのような素材を使い表現するかを記した。裏面には、生徒の作品のねらいや構想を文章で表したものを添付している。交流場面では、アイデアスケッチの描かれた面だけを見て、他者はど



写真2 交流場面

のような表現をしたいかコメントを記入する。その後、裏面の作者のねらいを文章で読み、受け取ったイメージと異なる印象や素材の扱いについて改善すべ

き意見を、繰り返し書いていくという方法で進めていった。今回の表現では、着想の基となった作品と合同展示を行うことを事前に話をしているため、少なからず自分の表現が人に伝わることを念頭においているため、この交流は自らの構想をより良くするためには必要な学習過程であったと判断する。

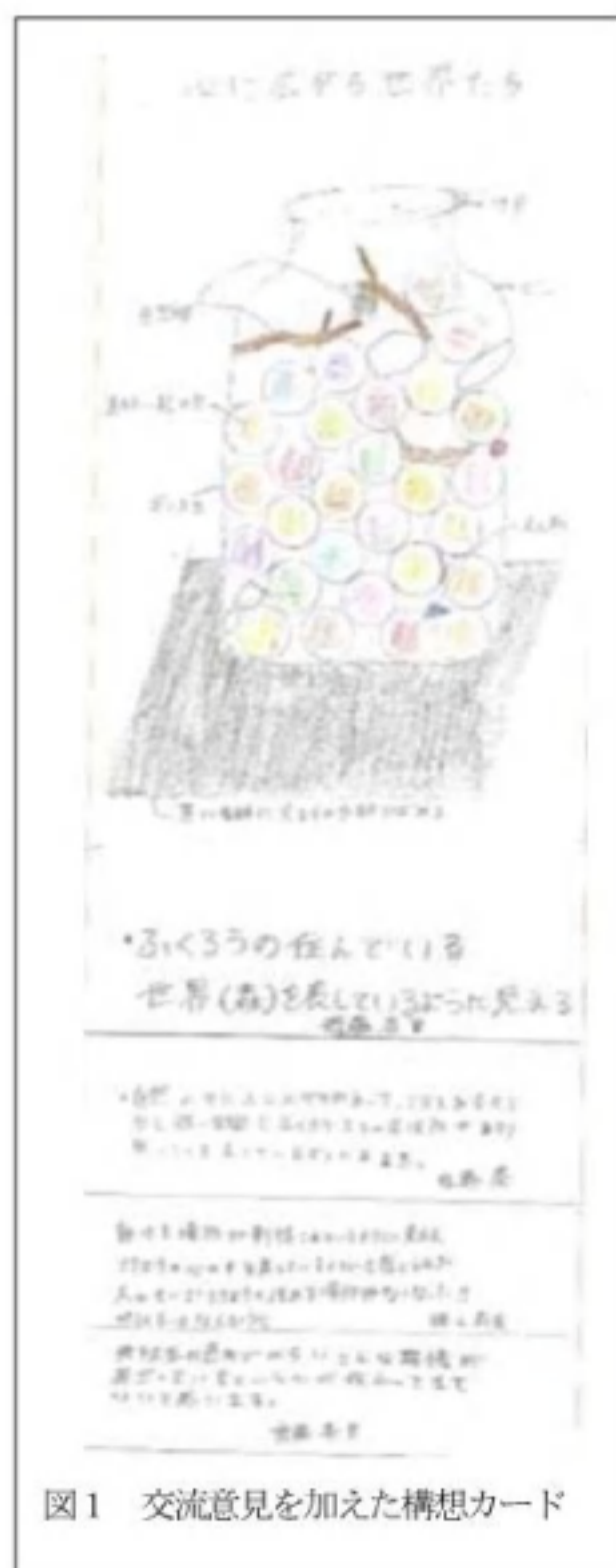


図1 交流意見を加えた構想カード

(3) 手順や素材を選択し制作する

生徒の表現活動においては、構想の中で素材の持つ効果について考える場面を設定した。材料は生徒によって異なり、表現方法も異なる。そのため、本過程においては最初に制作手順について立案させ、その後表現活動を行った。制作時間は3時間と短いですが、合同展示をする関係もありサイズを指定してその範囲内での作品の表現である。

授業の場面では、個別に対応をしながら時には、素材の変更や実際に扱ってみて失敗した経験を別な方法に転換させる場面などもあり難しい時間ではあるが、ほとんどの生徒が構想の場面において素材の扱いや効果について考えを交流しているため、迷いもなく活動に取り組んでいる場面が見られた。

5 今後の課題とまとめ

本題材は、今年新たに取り組んだ内容だったため、授業構成やそれぞれの過程において改善は必要であった場面もあった。例としてあげれば、作品の大きさや素材の選定場面での交流方法などが挙げられる。

しかし、釧路市立美術館と連携しこうした題材を考える事ができたのは大きな収穫であった。まず、着想を得る場面で使用した鑑賞作品への返答作品というテーマを設定したことから、一般市民に向け作品を発表することができたところにある。

生徒の作品の発表の機会多くは、校内展示などにとどまる。その効果も大きいですが、中学生が何を考え、つくることができるのかを、多くの人々に知ってもらおうといったことが、生徒に与える影響も大きいものと考えます。

これからも、様々な関係機関と連携し、地域に発信していける題材を模索し続けていきたいと考えている。



写真3 水墨と絵の具を合わせた表現



写真4 針金による立体表現



写真5 コラージュによる平面表現

【 ネットワーク提言 分科会：C-2 広がる造形～つながる気持ち 】

	「チーム北海道を形に～人と人のつながりづくり～」		
	札幌市立あやめ野中学校		発表者 館内 徹
	夢	つくる	人 ◎

1 『ネットワーク部門』の変遷

北海道造形教育連盟の組織の中には『ネットワーク』という部署があります。20年ほど前に私が造形連盟の活動に参加したときには既に、全道造形教育研究大会の日程の中に『ネットワーク会議』という会が設定されていました。(実際には他の分科会会議と平行して設定されていたので人が集まらず、流会していたと記憶しています) 私は”研究部のネットワーク担当”という所属がいつのまにかついていたのですが、それがなんなのか知らずにいました。



地区ごとの情報交流の重要性が認識されたのは、学習指導要領の改訂(授業時数の減少なども含む)や全国造形教育研究大会の札幌開催の準備をすすめなければならなくなってきたころからだと思います。研究部の一部から”ネットワーク部”に昇格し、「春/夏/秋」の会議が設定されることとなりました。『ネットワーク』というと、「インターネットなどを活用したデジタルな取り組み、バーチャルな活動が中心な

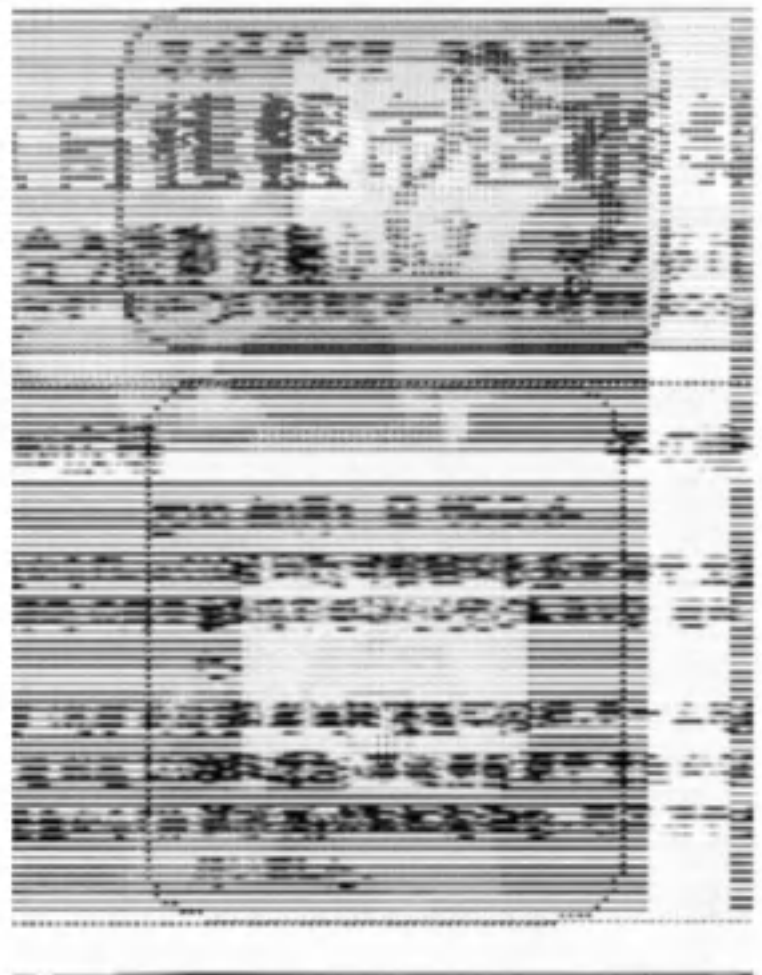
のではないかと、初期の頃は思われていました。確かに長年北造ネットワーク部長を務めてきた小林知広先生は、北海道造形教育連盟のホームページを立ち上げ、また「メーリングリスト」といったネット上での情報交換の場を整備してきたりと、時代の要請にあった形をつくりあげることに貢献いたしました。しかし、それはネット上ですべて「完結」させるためではなく、ここを入り口として造形教育連盟の活動を広げようという意図がありました。

この『ネットワーク』という部署は全国のほかの研究団体には存在しません。北海道という特殊な環境が作り出したものです。ご存知のように北海道は広大です。他の都府県とくらべて、広範囲な地域、それぞれの地区の歴史や地域性をみると、一つの地区としてくくるのは困難です。『北海道』として、全国に向けて研究活動を発信するには、やはり自分たちの足下をしっかりとさせることが必要です。『ネットワーク部』はこうした考えのもとに活動がすすみました。

2 ネットワーク部門の活動の目的

各地区サークルの取り組みは独特です。それぞれの地区の歴史的な背景や環境により、他地区がうらやむような活動があります。ネットワーク会議で活動が紹介され、「うちでもやりたい。どのように準備しているのか?」「うちの地区でもやってみたい」「うちの地区の催しに参加して、実際に体験してみては?」というように発展していくこともありました。それ以前には考えられなかったことです。美術館や他施設との連携、校種を超えた連携(幼小、小中、中高など)、作品展や美術部関係の取り組みの情報もありました。

また、地域のかかえる問題点なども紹介され、同じ問題をかかえる地区同士の取り組みやアドバイスなどもありました。市町村合併による学校の統廃合、それによる教員の減少。免許外の先生方への支援。孤立する図工・美



地区紹介パネル

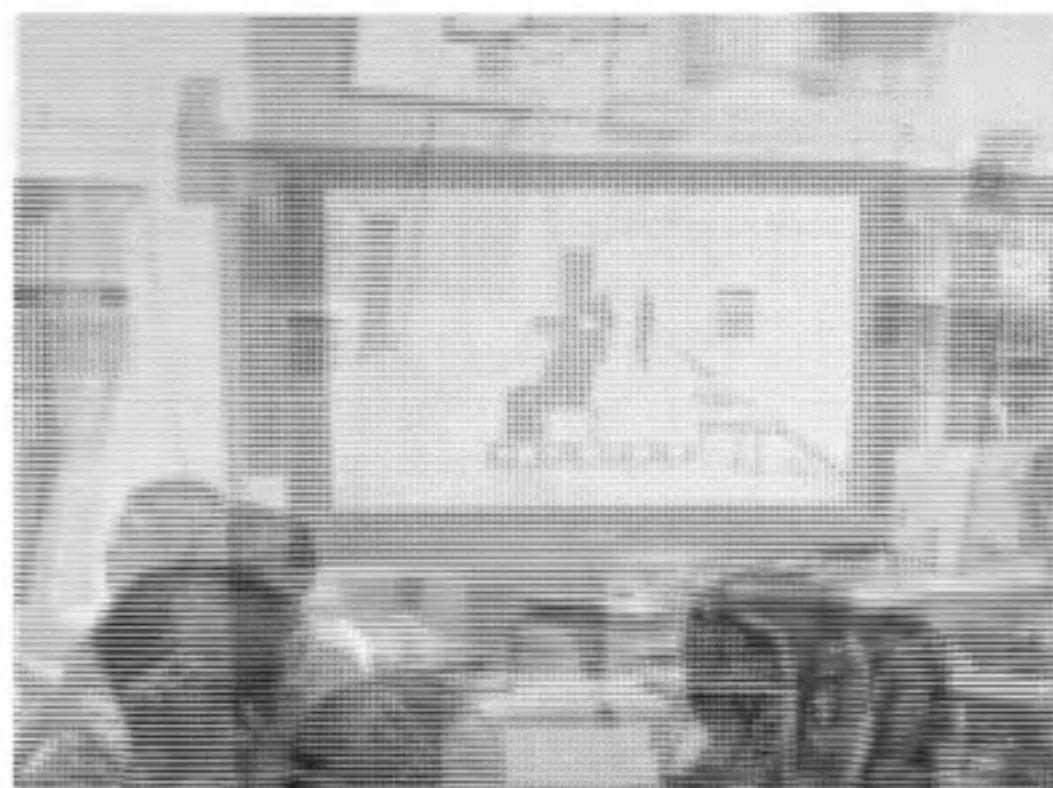
術科教師同士の研修や情報共有の難しさ。これらの話を共有することで、教科教育の今後に危機感を共有することができたのも大きな成果だといえます。情報の共有は、北海道造形教育連盟としてのまとまりを強くしていくとともに、地区活動についてもひろがりをもたせることになったと感じています。『Team Hokkaido』が掛け声だけではなく、かたちとして意識できたのではないのでしょうか。

3 ネットワーク部門の活動

現在、ネットワーク部門は年二回（春・冬）の会議での情報交流と、全道造形教育研究大会での地区サークル活動の紹介（パネル展示）が主なものとなっています。昨年度、北海道造形教育連盟事務局を中心とした組織改編が行われ、『ネットワーク部』から『研究部の一部門』となりました。これまでもネットワーク会議の中で、地区サークルごとの交流とともに「北海道としての研究活動にもっとつながりをつくることができないうだろうか」といった話し合いがされたことがありましたが、あくまでも情報交換の場であったので、直接研究活動に関わるような取り組みはできませんでした。研究部の中に研究・研修・ネットワークがひとつにまとめられたことで、それぞれの専門的な活動が有機的に結合した取り組みすることができないかと模索しています。そのひとつが研究部から紹介されている『北海道の美術教育を支援する活動』です。今後、この取り組みを充実させていくことはもちろん、ほかの取り組みができないか、ネットワーク会議で交流された情報をもとに検討を進めていきたいと考えています。



春のネットワーク会議の様子。毎年、地区委員総会に先立って開催されています。多くの地区から参加していただき、地区研究活動の報告が行われます。



冬のネットワーク会議は北海道教育美術展審査会にあわせて開催しています。審査会 1 日目の終わりごろの短い時間ですが、活動中間報告のような感じでざくばらんに交流しています。

4 最後に・・・

毎年、各地区で行われる「全道造形研究大会」。多くの先生方が大会の準備をし、授業をしています。しかし、その時だけのつながりだけではもったいないと感じることもあります。「その後あの授業はどうなったのだろうか？」「あの子どもたちは、次にどんな取り組みをしたのだろうか？」気になることも出てきます。「もっとこの取り組みについて知りたい。」・・・つながりをつくることで、つながりを継続していくことで、より自分の授業づくりが、地域の研究活動が広がりをを見せていくこともあるのではないのでしょうか。そんな「きっかけ」をネットワークの活動が担っていけるようにと考えています。また、北海道以外とのつながりも広がっていけるように、情報を発信できればと取り組んでいます。

C-2 「ひろがる造形～つながる気持ち」 分科会	助言者 佐藤昌彦教授 (北海道教育大学札幌校) 司会者 富尾 拓 (北海道教育大学附属函館中学校) 記録者 仮 直人 (北斗市立浜分小学校)
○分科会テーマ 「～地域や人, 他分野との繋がりを考えよう。～」 ・ 討議の柱 北海道のネットワーク, 地域の人々や社会との出会い。他分野とのコラボレーションなど, ひろがり・繋がりの造形を考える。	

～夢ツリープロジェクトについて～

1 授業者より

(深堀小 S) 経過 北海道の地域性を生かしたかった。10年前の55回大会で, 函館だけでアートプロジェクトを企画した時のノウハウも生かせると考えた。実施にあたっては, 当日の時間内でやれること, 造形を楽しむこと, 夢を共有できること, 人が繋がることの4点を念頭に企画した。また, お互いに協力してできるものをねらいとした。今後の北海道の地域の繋がりを考えていきたいと考え, 企画した。

(深堀中 S) 参加したのは, 中学生が深堀中と附属中の美術部。深堀中が9名, 附属中が13名, 弥生小学校5, 6年生34名で取り組んだ。子供達だけでなく, 先生方からも働きかけ, 両面からやっということだった。美術部の生徒たちが放課後に深堀小に行き, 佐々木先生に指導していただいた。普段は, 学年別の活動が多いが, 深堀小に製作に行く時にはどうしても一緒に取り組まなければならない, 2, 3年生が積極的に動くなど, 成長した姿が見られた。また, 附属中との交流でも, お互いに高め合う雰囲気ができ, 今日の大大会を迎えた。4グループに分かれて4人のリーダー中心に動かしたが, とても頑張っていた。小学生に「彩りを考えなさいよ」など, 言語活動も見られた。今回, 中学生, 小学生とも交流でき, 和が芽生えた授業だと思った。

(附属中 T) 附属中は今回, 3年生が参加している。家庭科の活動で幼稚園への訪問等, 小さな子と関わりのある子供達だった。小学生との交流と聞き, 自分のニックネームを書いたネームプレートを作るなど, 子供達の思いを引き出す関わり方の工夫を考えていた。今回, 全道各地から2300枚ほどの葉っぱがきた。いろいろな夢があり, 枝に貼りつけながら「これいいね」などの声が聞かれた。最後の感想発表では, 子供達なりに夢についての発言があり, 「夢を応援してあげられる人になりたい」という感想もあった。作業という形をとりながら, 作るだけでなく, 夢を考えるきっかけになったと思う。私たちが求めていたものがあった。



2 質疑応答 / 意見交流

Q1 帯広はネットワークからもれていたようだ。古い名簿がいていたのでは。締め切りが過ぎてから知った。ネットワークの課題だと思う。大きなプロジェクトであり, 新しいことに取り組むので, 「なぜ取り組むのか」が大事。なぜ, こんなことをするのかという話をした場面があったと思うが, それを聞きたい。(十勝U)

A1 フューチャーリーフを書く時に, 「これを全道から集める」と話した。その時に, いろんな地域の先生が来るとか, 作り方を教えたり, 自分たちだけの作業ではなく, いろんな人とふれあうことで作品が出来てくるから, 積極的に動いてねと話した。美術というより, 道徳的な部分の関連があると思った。(深堀中S)

Q2 なぜ, 葉っぱ, 木? 「なぜ作る? どうして?」ということをきちんと丁寧に「こういう言葉」で伝えることが大切。大きなプロジェクトでは, 特に。全道の子供達に夢を持って欲しいということ, 作る子供達や私たちが共有する場面があるとよかった。一枚一枚の葉っぱを素敵にするためには, 生かすべき力をきちんと押さえない。今日の活動では, 子供達自身が, 自分の役割をわかって進めており, 一緒に作る時間は, とても素晴らしかった。すごく素敵なことを広めるために, スタート段階の押さえをしっかりとできるといい。(十勝U)

A2 なぜ葉っぱか。まず, 作ることを楽しもうということ。授業にしなかったのは, それが理由。一人で作るんじゃなくて, みんなで作る楽しさを味わってほしいと考えた。ネットワークに漏れた件については, これからの課題だと思う。(深堀小S)



意見 今日の出発点は「楽しさ」からスタートしており、大切なことだと思う。最終的に授業の指導案にまとめることもできるのではないかな。そうであれば、出口はどこへ持っていくのか、インフラはどうするのか、指導者は何をするのかといったことが必要になる。今日のねらいからいくと、フューチャーリーフを書いた子達にどんな還元がなされるのかということも考えなければならない。となれば、函館の取り組みとして、今後も続けられるといい。各地区が全道の人達に意見を聞きながら、一つの形にしていくというのが北海道の形だと思う。(旭川 Y)

意見 すごく発展性のあるいいものだと思う。生徒をどこまで関わらせるかが大事だと思う。生徒の発案が盛り込まれていくと授業になる。僕らの発想が先行するのでもいいが、子供の考えが活かされるといいと思う。(札幌 T)

意見 フューチャーリーフの取り組みをやってみて、生徒に説明している自分が楽しかった。「全道の人たちの夢や希望がつながって、一つの木になる」そう言うとき、子供達はいきいきと活動していた。ただ、書いて出すだけでなく、その背後に大きなプロジェクトなんだということを感じて、子供達はわくわくしていたと思う。実物を見ることはできないけれど、写真にとって、見せたい。(渡島 T)

意見 期限がタイトだったので、美術部にやってもらった。賛同してくれる学校も結構あって、送ってくれた。「署名書きみたいだね」という意見もあり、そこに創造性はあるのか、名前書いて夢書いて、終了。その後に携わることもなく、結果として何も見えるわけでもない。みんなには、必ず写真にとって報告しますよ、と言ってきた。葉っぱそのものの形を変えてもいいなど、発展させる余地を残しておけばよかったのでは。(旭川 Y)

Q このあと、あのツリーはどうする？作品展に出展するとか？(十勝 U)

A 実物をとっておけないが、写真などデータにとって、残しておく。送ってくれた学校にそれを送ることもできる。残念ではあるが、本日限りのもの。(深堀小 S)

Q 素敵なプロジェクト、課題もあるが、5年後、10年後も続けていくといい。会場にきた人が葉をつけたすなどもできるのではないかな。他の人がどんなことを書いているのか見ながら書くのもいい。今回は、組織だって美術部の連携があったが、帯広は200名を超える美術部の生徒たちがおり、今年から合同授業をやることになった。いろいろなイベントも考えたいので、函館の状況を知りたい。(十勝 U)

A 渡島では合宿が行われていたり、市内でも写生展をやったりしている。どんどん子供が減っているので統合も進み、小さくなっていくだろうと思う。今回の取り組みは、学校行事に活かせる。ここで完結するものもあるが、要素を持ち帰ってもらって学校で発展させてもいい。それが造形のよいところ。「造形を楽しもう」がスタートで、みんなに助けってもらって作っていき、そこから深まっていくものもある。(深堀小 S)

意見 個々の夢ツリーが完成して、寄せていった時に大きなツリーができる。そこが造形の楽しさかと思う。昨年、根室でも、合同作品を作ることになった。そこで、小・中学生で実行委員会を作りアイデアを練った。教師側で出した条件は、「お金かかるのはダメ、小学生でもできること、色画用紙を円錐形にしたユニットを使って、作ること」。各学校に円錐形の台紙を送って、作ってもらい、尖ったところを中心にして球を作った。また、ひっくり返しても面白いということになり、それらも組み合わせ、作品とした。コミュニティセンターを借りて展示し、見学に来た子供達は、自分がこの一個を作ったという気持ちを持てた。今回は、自分のコメントも作品に入ってくる。リーフだと郵送ができるので、より多くの子供が参加できるので、今後ももっと広げることができると思った。(根室 Oさん)



2 「提言1～地域の美術館とつながる広がる～発想を得て表現し、発表しよう」

提言者 更科結希さんより

鑑賞活動と表現活動を密接に繋がるように意識して授業を構成した。美術館に行き、市成太煌の「A tale of the woods (2)」という作品を鑑賞した。作品からメッセージを受け取り、そこから発想して自分の作品を作る。受け取ったメッセージを表現するために、構想を練り、他の人たちからアドバイスをもらう。自分が表現した

いことを相手に伝えるために、生徒達は表現の工夫を考えた。作品の形態は、制限せず、材料も自分達で用意し、何を使ってもよいこととした。また、生徒達が作った作品を、美術館に展示した。作品からメッセージを受け取って造った作品が、他の人にも影響を与えるのではないかと、という期待が持てた。授業の時だけでなく、その後で価値付けされていくものだと感じた。作者と生徒、美術館、構想していく中で子供達同士の繋がりもあった。また、作品を見た同世代の方や市民の方々とも繋がっていくということを感じた。

①質疑応答／意見交流

Q1 なぜこの作品を題材にしたのか？釧路市立美術館がなぜあの作品を所蔵しているのか？（十勝U）

A1 この作品は、物語性が高い作品で、ふさわしいと思った。美術館が当作品を所蔵しているのは、道東の植物や動物などが描かれており、地域との繋がりがあるからではないか。作者は、絵本作家とのことだが、日本画も描いている。釧路に関わりのある方ということだ。

Q2（映像の中で）子供達が作品について、いろいろ話していた。自分の作品の紹介カードをつけていたが、元の絵の作者の考え等をどこかの場面で伝えた方がよい。学芸員とそういうお話は？（十勝U）

A2 作者の意図などは説明していない。予備知識なしで鑑賞させることを重視したので、そういう考えはなかった。学芸員は、完全にサポートに徹していたのでそのような場面もなかった。

Q3 美術館とコラボすばらしい。鑑賞した作品への返答というアイデアがすばらしい。美術館とのやり取りで大変だったことは？（札幌Y）

A3 やりたいようにできた。最後の展示に関わって、ロビーなどでなく、ちゃんとした部屋をおさえて、できたらよかった。美術館という制限があるので、誰でも見られる場所を考えてもよかった。

Q4 根室には、美術館がないので、釧路の芸術館の出前講座をしてもらった。子供達が、感想を言い合うだけでなく、どうしてこういう作品ができたのか、作ろうと思ったのか、ということが大切と考えた。学芸員の方と話したことは、単発で終わるのではなく、この後、どう繋げていくかということ。学校間で何ができるか考えて欲しいと言われた。地域で、こうした取り組みを共有して学校間でも紹介していきたいと思った。（根室O）

意見 残念だなと思うこと。今現在活躍している作家がメディアを通じて自分の作品について語れる時代。絵を飾ったら、観た人のものになるが、作者の意図も魅力であるから、アンサーアートであるならば、どこかの場面で紹介してほしい。それができると社会の中の美術になっていく。（十勝U）

Q5 鑑賞は、いろんな形でできるんだな、「表現は繋がり合う」というのがいい提言だったと思った。本物、実際の作品を見ながらできるのがよかった。展示では、来た人に感想など書いてもらったのか？観た人との繋がりということであればやってもいいのかと思う。（渡島T）

A5 今のところ取り組んでいないが、今展示中なので、やってみる。

Q6 函館でも、美術館の提案で室蘭の鉄の芸術家を招いて鑑賞しながら、最終的に返答作品を製作していくという取り組みを行おうとしており、参考にしたい。小規模な学校も、大きな学校もあり、時期をずらして美術館に訪れてやろうとしている。一つの学年で行ったのか。（渡島S）

A6 3年生3クラス、1クラスずつ、他の学級は普通の授業を行っていた。

Q7 アンサーアートとはいっても、子供達自身の良さや個性が現れると思うが、どうか？（十勝U）

A7 フクロウがどうなっていくのかなど、私が考えつかないようなことまで深まっていた。素材をフリーにして自分たちで準備するようにしたら、かなり考えて準備していた。心情面では、フクロウの目に着目した子が多かった。悲しそうということから情景を考え、物語に入っていた。

3 提言2 「チーム北海道を形に」～人と人の繋がりづくり～

提言者 館内 徹さんより

20年程前からネットワークの取り組みがなされてきた。毎年、夏と冬にネットワーク部会の集まりが開かれている。ネットワーク部は、それぞれの（道内各）地区活動の情報交換をしている。それぞれの地区が抱え

ているものはいろいろある。中学校の美術教師の配置状況の調査では、状況が違うことを実感した。結局全国でどこも（配置状況を）把握していないことがわかった。ネットワーク部の役割として、各地区を組織として、個人として繋いでいくことを大事にしていかなければならない。

①質疑応答／意見交流

意見 昨年造形祭りということで、全19サークルに全部電話した。一人だけの地区があったり、年に1回しか集まらないからむずかしいとのことだったり、直接話さないとわからない。本当に深刻だけどシェアされていない。ネットワーク部会の重要性が増している。（旭川 Y）

意見 私も電話した。帯広十勝は50いくつ学校がある。ネットワーク部会が出来てからしばらく経つが、造形教育連盟の土台があってここまで来ている。話が引き継がれていないことも多い。これだけ集まりがある教科は、美術くらい。この価値を大事にし、広げていきたい。（十勝 U）

意見 今までネットワーク研修会としてきたが、今回、分科会形式で誰でも参加できる形が新しい。北海道には、19地区サークルあるが、旭川より北には、地区サークルがない。5年前、日高ができたが、それまで胆振から日高までなかった。北海道では、動いている組織のほうが少ない。そこで、美術教育支援ということで、どこにいても研修をしますという活動をしている。そのネットワークをつくるのがこうした場なのではないか。今、誰がホームページを更新しているのか、どこで情報が得られるのか、わからない。今回の取り組みで明確になればより繋がりが強固になる。今まで見えなかった相手が見えるようになるのは大切だ。（札幌 U）

意見 最初、情報を共有しましょうとのことで始まった。メンバーが限られており、会議に出た先生から広がらないという課題があった。発信も大事だが、共有しないとお互いに理解できない。こういう機会を生かしながら、これから先、また違う形を目指していってもいい。（渡島 S）



意見 以前、檜山で事務局をやっていたが、美術の先生が3～4人しかいない。美術の専科を引き継ぐことができなかった。専科は少なくとも、美術を教えている先生はいる。研究会など企画しても敷居が高いのか、来てくれない。これからは、参加しやすいスタンスも必要。（渡島 T）

4 助 言

助言者 北海道教育大学札幌校 佐藤昌彦教授より

大事なキーワードは「なぜ」「明確に」ということだ。全道大会は全国へ向けて、主張を発信していくことなので、函館大会の主張がはっきりしてきた。今回の大会の意味、意義は、世界的に見ても価値がある。

一つ目は造形教育の構造を明確にしたということ。「造形の背景にあるもの」との繋がりを明確にした大会であった。これまでは、想像面とそれを具体化するための技術面を丁寧にやってきた。これからは、その背景にある倫理面、道徳面をセットにしてやっていく時代になってきたということ。ものづくりには、責任が伴う、そういう時代になってきたと思う。二つ目は、人・自然環境・民族など「規範」との繋がり。北海道には、材料の性質に対する理解などの規範がある。昔から、自然・物・人との繋がりを大事にしてきた。自然に感謝、ものに感謝、人に感謝というアイヌの人々の思想的背景が規範になるのではないか。では、自然の理にかなった造形ということは、どうか。三つ目は「想像のモデル」。設計図があっただけというよりも、青を貼れば次は何色か、置いてみた感じから次はどうするのかという発想、考えていくという「想像のモデル」を提言した場になっていたのではないか。釧路の美術館との提携は、造形教育の構造の提案であった。「なぜ、表現と鑑賞の相互作用なのか」と問い詰めれば、美的な価値観の形成が中心軸にあるからどちらも必要ということになる。そうした造形教育の構造が確認できたのではないか。函館大会の意義は、造形教育の構造の提案、規範、想像モデルの具体的な実践の姿の3つから提案を図った大会ではなかったか。去年フィンランドに行ってきたが、工作工芸教育の発祥の地は、原点と先端を大切にしていた。原点は手作り。そのための工作台が設置されていた。同時にデジタル機器のソフトウェアも整備されていた。その根底には、ものづくりには責任が伴うということ。今回の函館大会は、世界的に見ても発信力があるのではないかと思う。



「夢・つくる・人 ~ 未来はぐくむ造形教育」

道造形教育連盟が研究大会開催

自立と共生の教育目指す

渡島管内幼・小・中で6授業公開

【函館発】道造形教育連盟（三井哲会長）は七月二十九日、函館市立弥生小学校などを会場に「第六十五回全道造形教育研究大会」を開催した。写真。全道各地から約二百三十人が参加し、渡島管内の幼稚園、小・中学校で計六授業を公開した。

同連盟では、「わたしを

創る」～自立と共生の造形教育をめざして」を研究主題に設定し、研究を進めている。大会テーマは「夢・つくる・人々未来はくむ造形教育」とし、幼稚園・小学校・中学校の公開授業、分科会や講演会を通じて、豊かな造形教育についての指導の充実を図った。

公開授業のうち、体育館

で実施された「北海道夢ツリープロジェクト」は、弥生小五・六年生三十四人と函館市内中学校の美術部員六人が授業に参加。大会実行委員会研究部が講師となつて授業を行った。

「北海道夢ツリープロジェクト」は、大会の活性化と全道ネットワークを使用したアートプロジェクト



で、初の試みとなつている。各地区の児童・生徒がフューチャーリーフという葉を作り、自分の夢や目標を書いていくもので、全道の幼・小・中学校から二千三百枚以上が集まった。

大会では、参加した小・中学生が協力して、ツリーの枝の部分をつなぎ、枝にフューチャーリーフを貼っていった。小

の夢ツリーを完成させた。作業を終えた小学生は、「みんながいろいろな夢を書いていて、頑張っていることが伝わってきたので、私も美容師になりたいという夢に向かって頑張りたい」と感想を。中学生は、「みんなの夢が実現できたらいいな」と思いながら作った」と話していた。

授業後、全体会を行い、はじめに三井会長があいさつ。「子どもたちが主体的・協働的に学ぶことができる質の高い教育をつくりたい」と抱負を述べた。

また、来賓として渡島教育局の辻俊行局長、函館市教委の山本真也教育長が祝辞。辻局長は「美術科は心の教育にも大きく影響する教育活動。資質、能力を磨

き、実り多い会となるようお願いする」と話し、山本教育長は「函館の教育水準を上げるとともに、大会で得たものを皆さんの地域にもち帰っていただければ」と期待した。

続いて、同連盟の湯浅大吾研究部長と佐々木善憲大会研究部長が研究概要を説明。「自立した造形活動」「造形活動における共生の姿」について研究してきたことなどを話した。

また、記念講演として環太平洋大学次世代教育学部の村上高徳教授が「感性や創造性をはぐくむ造形教育」と題して講話。引き続き、分科会や研究協議も行った。場所を五島軒本店に移して全道地区交流会を実施し、親睦を深めた。

北海道通信

昭和50年6月12日第3種郵便物認可

日刊 祝祭日、日曜日、土曜日 休刊 日刊教育版

平成27年 第10552号

8月11日(火曜日)

発行所 札幌市中央区北5条西6丁目

株式会社 北海道通信社

社(代) 222-3521 FAX 222-3532

発行人 松木慶喜

支社 東京6261-3822 旭川33267 函館57781

支局 網走25241 札幌27872 岩見沢25044

支局 釧路251735 網走23719 小樽25515

支局 稚内257111 留萌22716 浦河22200

支局 根室248028 江差250957 倶知安25013

(購読料) 1ヵ月12,960円

編集後記

7月29日(水)函館市立弥生小学校を会場とした第65回全道造形教育研究大会函館・渡島大会では、大会・研究主題「夢・つくる・人～未来はぐくむ造形教育～」のもと、全道各地、東北方面から多くの皆様のご参加をいただきました。本大会の開催にあたり、ご協力を賜りました関係各位の皆様にご心よりお礼申し上げます。

さて、本大会では、幼・小・中の5つの授業と、北海道夢ツリープロジェクト(アートプロジェクト)の1つを公開し、6つの分科会において、参加者との実践交流、そして造形教育への考えや理解を深めることができたと考えています。分科会では、助言者の皆様からのご助言、全道各地からの提言もいただき、今大会の研究主題を活性化する内容となりました。意義ある討議ができ、函館・渡島の先生方にとっても貴重な学習・研修・研鑽の場となりました。授業、提言、講演などを通じて、私たちが目指す大会へのステップを踏むことができたことをうれしく思います。

また、初めて取り組んだ全道規模での夢ツリープロジェクトの試みでは、37校の諸先生方、またこれに関わるフューチャーリーフに参加してくれた児童・生徒数も2300名を超えるものとなり、全道の皆さんの温かいご支援・ご協力を得ることができました。これは、今大会を含め、今後の大会に向けての大切なつながりであり、大きな力であると言えるのではないのでしょうか。

造形教育を通じた北海道のつながりとひろがり、北海道のクリエイターである子どもたちと先生方の今後の活躍と発展性を益々感じることができた大会でした。

最後になりましたが、私たちは、皆様からの多大なご支援、ご協力、ご示唆をいただき、大会を成功裡に終了できたことに感謝すると共に、ここで得られた成果と課題を生かし、今後も造形教育の発展のため、日々実践に取り組んでいきたいと考えております。

編集委員	土 谷 敬 (函館市立湯川小学校 校長)
	木 村 伸 仁 (函館市立楯法華小学校 教諭)
	佐々木 壮 一 (函館市立深堀中学校 教諭)
	佐々木 善 憲 (函館市立深堀小学校 教諭)
	水 島 賢 久 (函館市立磨光小学校 教諭)

第65全道造形教育研究大会函館・渡島大会 研究集録

発 行 者	大会実行委員長	土 谷 敬
編 集	大会研究集録編集委員会	
大会事務局	函館市立楯法華小学校内	木 村 伸 仁
	Tel 0138-86-2051 / Fax 0138-86-2053	
発 行 日	2015年12月	
印 刷 所	(有)三和印刷 〒040-0061	函館市海岸町8番11号
	Tel 0138-45-0845	